

北海道立埋蔵文化財センター

年報19

平成29(2017)年度

北海道立埋蔵文化財センター

年報19

平成29(2017)年度



▲企画展「シブノツナイと北の古代」関連遺物



▲湧別町シブノツナイ竪穴群 発掘調査状況（北東→）



▲分析試料写真 数字は試料No.、アルファベットは分析位置 倍率約1/2、No.21~23のみ等倍

目 次

I	施設の概要	
1	設置の目的	1
2	沿 革	1
3	施設の概要	1
	(1) 工 期	
	(2) 面 積	
	(3) 組 織 図	
	(4) 職員名簿	
II	調査研究事業	
1	重要遺跡確認調査	2
	湧別町シブノツナイ竪穴住居群の調査	
2	埋蔵文化財に関する調査研究	2
	(1) 保管出土品を活用した研究	
	(2) 研修・情報収集	
	ア、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会 第1回役員会	
	イ、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会	
	ウ、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議	
	エ、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第30回研修会	
	オ、第8回文化財写真技術研究会	
	カ、文化財保存修復学会第39回大会	
	キ、第1回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会	
	ク、第2回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会	
	ケ、第3回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会	
	コ、保存科学研究集会2017	
3	分析・鑑定・保存処理等	12
	(1) 分析・鑑定	
	(2) 保存処理	
4	市町村教育委員会支援など	17
	(1) 指導・協力等	
	(2) 出前研修会	
	(3) 埋蔵文化財担当職員研修会	
III	収蔵・保管事業	
1	収蔵資料	20
2	図書資料	22
	(1) 購入図書一覧	
	(2) 受領刊行物一覧	
IV	普及・啓発事業	
1	展示公開	29
	(1) 常設展示「掘り出された北の歴史」	
	(2) 企画展示	
	ア、北の縄文 ―縄文耳飾りの世界一展	
	イ、北海道遺跡百選10 ―シブノツナイと北の古代一展	
	ウ、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成28年度発掘調査成果展	
	エ、世界遺産をめざす北の縄文展	

2	資料の特別利用等	34
(1)	特別利用	
(2)	模写品等の刊行等の承認	
(3)	資料の貸出	
3	講座等の開催	38
(1)	一般道民対象の講座	
	ア、手形・足形の考古学	
	イ、縄文人に挑戦	
	ウ、縄文のコクゾウムシ?	
	エ、オホーツク人の骨を知る・学ぶ	
	オ、考古学からみたアイヌ文化	
(2)	児童生徒学生対象の体験型講座	
	ア、親子ガラス玉づくり教室	
	イ、まいぶん遺跡探検隊 (第1次)	
	ウ、まいぶん遺跡探検隊 (第2次)	
	エ、まいぶん遺跡探検隊 (第3次)	
	オ、まいぶん遺跡探検隊 (第4次)	
(3)	児童生徒対象の出前講座	
	ア、事業目的	
	イ、事業内容	
(4)	教育連携講座	
(5)	一般道民対象の講演会	
	ア、春季講演会 日本人はどこから来たのか?	
	—海を渡った祖先たち— (海部 陽介氏)	
	イ、秋季講演会 近年のホモサピエンスと縄文人研究の動向から	
	—ユーラシアへの拡散を中心に— (松村 博文氏)	
(6)	近隣市町村等対象の出前講座	
(7)	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成28年度発掘調査報告会	
4	協力	42
(1)	講師派遣	
(2)	職員派遣	
(3)	職場体験	
(4)	博物館実習	
5	周辺施設・大学との連携	42
(1)	文京台地区道立教育3施設連携	
(2)	かるちやるnet	
	ア、てくてく、ぺったん!かるちやるスタンプラリー! 春休み編	
	イ、発見・体験 文化の夏一遊ぼう!学ぼう!あつべつ・えべつ	
	ウ、てくてく、ぺったん!かるちやるスタンプラリー!	
	エ、かるちやるガーデン2017	
(3)	のっぽろ11ネット	
6	協賛事業への取り組み	44
7	利用状況	45
(1)	入館者数一覧	
(2)	団体利用者対応	
8	講演会要旨	50
	春季講演会 日本人はどこから来たのか?—海を渡った祖先たち— (海部 陽介氏)	
	秋季講演会 近年のホモ・サピエンスと縄文人研究の動向から	
	—ユーラシアへの拡散を中心に— (松村 博文氏)	

I 施設の概要

1 設置の目的

北海道には貴重な埋蔵文化財が数多く発見されており、これらの埋蔵文化財の保護、保存・活用を図るため、調査研究を行なうとともに、出土文化財等の収蔵保管、展示公開並びに文化財保護思想の普及啓発を図る総合的な機能を有する道立の埋蔵文化財センターを設置する。

2 沿革

平成7年

3月 北海道立埋蔵文化財センター（仮称）基本構想策定

平成8年

9月 本館基本設計完了

平成9年

3月 本館実施設計完了

10月 本館建設工事着手

12月 別館（整理作業所）基本設計完了

平成10年

3月 別館（整理作業所）実施設計完了

9月 別館（整理作業所）建設工事着工

平成11年

3月 本館建設工事竣工

4月 北海道立埋蔵文化財センター開設

8月 別館（整理作業所）建設工事竣工

11月 一般公開

3 施設の概要

(1) 工期

[本館工事] 平成9年10月31日着工

平成11年3月18日竣工

[別館工事] 平成10年9月10日着工

平成11年8月18日竣工

[外構工事] 平成11年7月28日着工

平成11年12月10日竣工

(2) 面積

[敷地面積] 18,599.50㎡

[延床面積]

本館：5,063.02㎡（鉄筋コンクリート造・2階建）

別館：2,081.80㎡（鉄筋造・3階建；整理作業所）（渡り廊下含む）

[部屋別面積]

本館1階

調査研究室（253㎡）

保存処理室（167㎡）

観測・計測室・修復室（47㎡）

金属製品処理室（31㎡）

分析室（48㎡）

実験室（53㎡）

撮影室・暗室（105㎡）

図書室（177㎡）

一般収蔵庫（399㎡）

展示収蔵庫（321㎡）

展示室（310㎡）

本館2階

所長室（47㎡）

事務室（241㎡）

特別収蔵庫（227㎡）

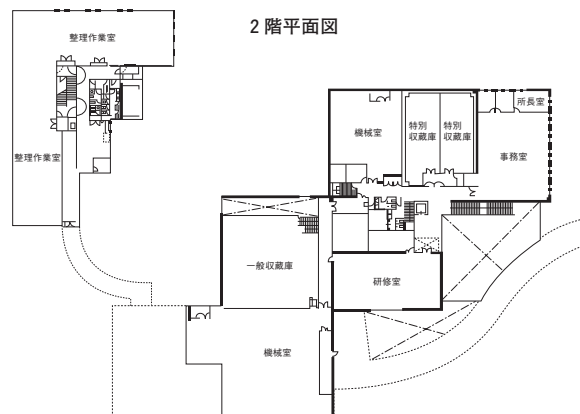
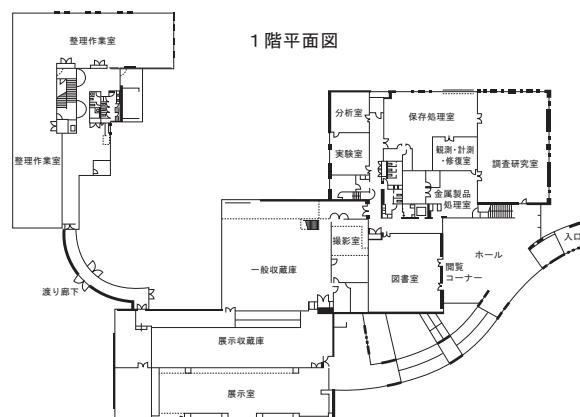
研修室（196㎡）

一般収蔵庫（319㎡）

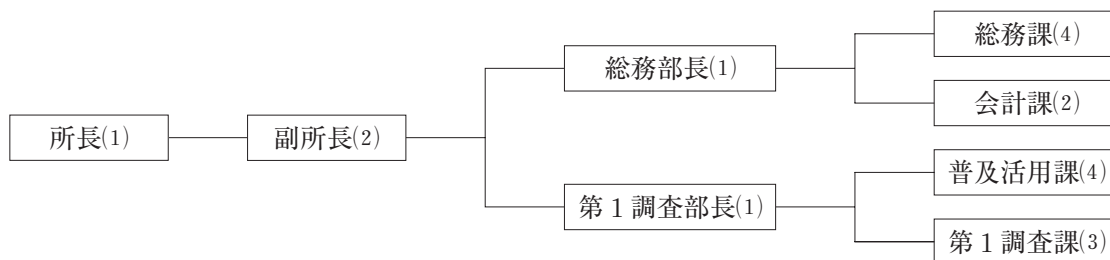
別館1階：整理作業室（520㎡）

別館2階：整理作業室（540㎡）

別館3階：整理作業室（220㎡）



(3) 組織図



(4) 職員名簿

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
所長	越田賢一郎	総務部長	和田基興	第1調査部長	長沼孝
副所長	中田仁	総務課長	小杉充	普及活用課長	田口尚
副所長	山田寿雄	総務課主任	葛西宏昭	普及活用課主査	倉橋直孝
		総務課参与	前田博	普及活用課主査	坂本尚史
		総務課参与	作田千秋	普及活用課主査	柳瀬由佳
		会計課長	中村貴志	第1調査課長	中山昭大
		会計課主任	礪田千秋	第1調査課主査	菊池慈人
				第1調査課主任	三浦正人

Ⅱ 調査研究事業

1 重要遺跡確認調査

北海道教育委員会から平成26～29年度重要遺跡確認調査実施要領が年度当初に通知され、今年度は湧別町シブノツナイ堅穴住居群を調査対象とすることとなった。調査は現地での測量調査及び発掘調査（トレンチ調査）を行った。平成26年度より、調査成果を報告する「重要遺跡確認調査報告書」が年次報告となったため、ここでは今年度の成果の概略のみを記載する。

9月1日（金）～9月23日（土）の期間で、史跡指定範囲139,486㎡を対象に、①堅穴補足測量、②堅穴現況記録、③堅穴撮影、④堅穴検土杖調査、⑤発掘調査（トレンチ調査）を実施した。

①では昨年度の測量成果を現地で再検証し、必要に応じて補正測量を実施した。また作業過程で新たに3か所の堅穴を確認し、追加測量を行った。これにより堅穴総確認数は530か所となった。

②では個別の堅穴に関する情報（煙道・カマド状構造の有無、堅穴下端の盛土や凹みの有無、掘り上げ土投げ込み状況の有無など）を観察・記録した。

③では形状・大きさ・付属構造などを基準に特徴的な堅穴を選び、堅穴の大きさを比較するため人を配置して、撮影を行った。

④では主に堅穴下端中央部付近を対象とし、300か所ほどの堅穴で実施した。結果、焼土・炭化物が覆土中に多く含まれた、焼失住居と考えられる堅穴を確認した。

⑤では堅穴分布範囲北側の平坦地に5×1mのトレンチを6か所設定し、総面積30㎡の発掘を実施した。結果、続縄文文化期後半の遺物のまとまりを確認した。

2 埋蔵文化財に関する調査研究

(1) 保管出土品を活用した研究

【今年度研究概要】

指定管理3期においては下記の3つの課題を中心に保管出土品を活用した調査研究を進めており、今年度も同様に行った。

1. 保管遺物を対象とした科学的分析で、主に材質分析を行うこと。
2. 保管遺物を対象にした遺物と遺構との関係を整理すること。
3. 保管遺物を活用して、新たな体験学習教材

または体験学習内容及び方法を開発すること。

【保管出土品を活用した研究】

1については、石製品類の材質分析として、千歳市美々4遺跡・美々5遺跡およびキウス5遺跡出土資料の分析を行った。

分析した資料は、美々4遺跡の昭和59年度調査で出土した玉類のうち8点と、企画展示「北の縄文 縄文耳飾りの世界」に展示した美々4遺跡・美々5遺跡・キウス5遺跡出土の珧状耳飾3点である。

美々4遺跡の昭和59年度調査資料は「土壙墓群」をなす「土壙墓」から出土した副葬品で、現在常設展示している。そのうち、肉眼観察によりヒスイ（注）以外と推定されたものについて、顕微鏡観察および化学組成分析を行った。ヒスイについては、肉眼観察によって比較的正確に同定できること、化学組成による原産地推定の手法が確立されておりデータが蓄積されていることから、ヒスイ以外の岩石について優先的に分析を行うこととした。

珧状耳飾3点については、企画展示「北の縄文 縄文耳飾りの世界」への展示のために道内市町村から借用した珧状耳飾・石製品類の分析と合わせて行ったものである。

分析結果については、本章3節(1)にまとめて記載した。

2については、遺構と遺物の関係を重視した特別展示、「北海道遺跡百選10 シブノツナイと北の古代」を行った。展示資料は当センター所蔵の千歳市美々8遺跡、オサツ2遺跡、チプニー2遺跡のものを中心に、道内4市町村から多数の擦文文化期資料を借用した。

擦文文化期の研究では堅穴住居跡内出土遺物の器種内容と出土地点の検討が進められており、こうした研究を援用した展示により住居内での空間利用について紹介した。具体的には、カマドを中心とした範囲と甕のまとまった出土状況から「炊事場」を、カマドに向かって右側範囲と特徴的に出土する紡錘車から「紡績場」を、住居奥の右壁付近と同範囲に集中的に出土する小礫をゴザ網の錘石と推測し、「編物の場」を復元し、各作業が

民俗例や文献記録から女性の職掌であることを前提に、これらカマドから向かって右壁側の空間を「女性の場」として位置付けた。

展示では、上記に関連する実物資料と空間利用を簡潔に示した図パネルを示し、視覚的にイメージし易くするための工夫を凝らした。また、覗きこむ様に観察する復元住居ジオラマも併せて展示し、来館者が立体的なジオラマを用いて展示内容を再確認する様に配慮した。こうした手法は展示内容をより鮮明に記憶するための助けになると考えている。

このほか、土坑墓と副葬品の観点からは、7～9世紀の土坑墓・有墳墓に豊富に副葬される直刀・蕨手刀などを主体とした鉄製品を取り上げ、豊富な物資と東北地方北部と共通した墓制（東北地方の末期古墳と北海道の有墳墓）を採用した集団と本州との密接な交流・交易に言及した展示を構成した。

こうした遺構と遺物に関連づけた展示活用は、古代北海道の生活様式や交流・交易の復元と理解に非常に有効であると考えられる。

3については、考古学講座「縄文人に挑戦」においてアオトラ石（緑色泥岩）を用いた石斧製作実験として実施した。

本講座の趣旨は、被加工物・加工具ともに実際の遺物と同様の材質を用い、当時の製作技術を忠実に復元した実験を行うことで、先史時代人の技術や計画性、破損等への対処技術などを理解するための知識を得ることである。参加者は製作実験の前後に資料観察を行うことで、製作に関する理解が深まっていることを実感でき、また実験成果によってはこれまでの研究で指摘されていない新知見を得ることもある。体験教材として、石斧製作に必要な道具一式（砂岩製砥石・安山岩製石鋸・敲石・研磨砂・作業台・トレイ・歯ブラシ・動物脂・磨き布・タオルなど）を把握することができた。

注：ここでいう「ヒスイ」とは、いわゆる「硬玉」のみを指すこととする。主にヒスイ輝石・オンファス輝石からなる岩石である。一方、いわゆる「軟玉」は、主に透閃石・透緑閃石からなる岩石であり、ここでは「ネフライト」と呼称する。

(2) 研修・情報収集

ア、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会 第1回役員会

期 日：6月1日（木）

会 場：静岡県静岡市駿河区南町18-1

「ホテルセンチュリー静岡」

参加者：副所長 山田 寿雄

参 与 前田 博

内 容

1 議事

(1) 会員の入退会について

入会：砺波市埋蔵文化財センター及び田原本町埋蔵文化財センターから入会申請があり、了承された。

退会：泉南市埋蔵文化財センターから退会届の提出があり、了承された。(加盟機関：75機関)

(2) 平成28年度事業報告について

事務局から説明・報告があり、全会一致で了承された。

ア 総会の開催

平成28年6月2日（木）～3日（金）

(幹事機関：宮崎県埋蔵文化財センター)

イ 研修会の開催

平成28年10月20日（木）～21日（金）

(幹事機関：奈良県立橿原考古学研究所)

ウ 役員会の開催

第1回 平成28年6月2日（木）

(宮崎県埋蔵文化財センター)

第2回 平成28年11月18日（金）

(青森県埋蔵文化財調査センター)

エ 機関誌の発行

「公立埋文協会報」第57・58号の発行

オ 文化庁への要望活動

カ その他

「発掘された日本列島2016」展への協力

(3) 平成28年度収支決算について

事務局から説明・報告があり、了承された。

(4) 監査報告について

監事である中山氏（山梨県埋蔵文化財センター所長）から監査結果の報告があり、了承された。

(5) 新規加盟機関の勧誘について

未加盟機関及び都道府県教育委員会（文化財主管課）に対し、加入への案内文書を送付している

ので、連絡協議会への加入について協力願いたい。

(6) 発掘された日本列島2017展について

事務局から事業概要の説明・報告があり、了承した。

(7) 役員改選について

事務局から説明

(8) 平成29年度事業計画（案）について

事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動、発掘された日本列島展への協力についての説明・報告があり、了承された。

(9) 平成29年度収支予算（案）について

事務局から説明があり、了承された。

(10) 平成30年度総会及び研修会の開催地について

事務局から説明(21年度総会承認事項のとおり)

総 会：広島県

研修会：愛知県

(11) その他

協議会設立30周年について

・(方向性として)全埋協と連携し、今後具体化したい。

イ、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会

期 日：6月1日（木）～2日（金）

会 場：静岡県静岡市駿河区南町18-1

「ホテルセンチュリー静岡」

参加者：副所長 山田 寿雄

参 与 前田 博

内 容

〈1日目6月1日（木）〉

1 開会

進行 川口 事務局長

(青森県埋蔵文化財調査センター副参事)

○開会挨拶 田村 会長

(青森県埋蔵文化財調査センター所長)

○挨拶 松井 教育監(静岡県教育委員会)

近江 文化財調査官

議 事

(1) 会員の入退会について

砺波市埋蔵文化財センター及び田原本町埋蔵文化財センターから入会申請、泉南市埋蔵文化財センターから退会届の提出があり、いずれも了承さ

れた。(加盟機関：75機関)

(2) 平成28年度事業報告について

事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動、発掘された日本列島展への協力についての説明・報告があり、了承された。なお、平成29年度の要望事項については、アンケートを基に事務局において検討し、要望事項として提出することについて了承された。

(3) 平成28年度収支決算について

事務局から説明・報告があり、了承された。

(4) 監査報告について

監事である中山氏(山梨県埋蔵文化財センター所長)から監査結果の報告があり、了承された。

(5) 新規加盟機関の勧誘について

未加盟機関及び都道府県教育委員会(文化財主管課)に対し、加入への案内文書を送付している。連絡協議会への加入について協力願いたい。

(6) 発掘された日本列島2017展について

事務局から事業概要の説明

(7) 役員改選について

事務局から説明があり、了承された。

(8) 平成29年度事業計画(案)について

事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動、発掘された。日本列島展への協力についての説明・報告があり、了承された。

(9) 平成29年度収支予算(案)について

事務局から説明があり、了承された。

(10) 平成30年度総会及び研修会の開催地について

総会：広島県

研修会：愛知県

講演

「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」

文化庁文化財部記念物課 近江 文化財調査官

① 震災に伴う埋蔵文化財の保護

岩手県：住いの確保、高速道路などに目途がついた。人が集まりにくい状況にある。

宮城県：二極化が顕著である。

福島県：町としての復興はこれからの状況
原発廃止に伴い、少なくとも来年まで続く。

来年、支援要請の話には協力願いたい。

体制の強化が問題ではないか。

熊本地震

県4名、市5名の応援

熊本城の復旧が主な事業

支援の検討を願いたい。

(仙台市などから派遣あり)

・津波による壊滅的な状況

・被害状況による差が大きい。

・現場の対応の違い。

東北：全額国庫負担、地元負担なし

熊本：5割補助

② 国庫補助

・要望に応じられない。

・開発に伴う発掘調査の微増も理由

・圧縮しても不用額が生じてきていることから、財政サイドから厳しい判断が示されている。財政サイドと連携し、早めの対応を取って欲しい。

③ 検査院の指摘状況

・かなり細かく指摘している。

・作業員の通勤手当に関すること。

・報告書の効果に関すること。

④ 水中遺跡の保護

・海の中にも埋蔵文化財がある。

・今年度、一定程度の方向性を出す予定。

・来年度には、具体的な調査方法について、手引きとしてまとめる予定。

⑤ デジタル技術の導入(活用)について

・紙を利用してきたものを否定するものではない。

・デジタルに移行する時代に来ている。

・デジタルカメラに段階的に移行している状況

⑥ 文化財保護行政

・次世代に伝えていくために担当者会議の開催
(神奈川・福岡)

・掘ることが中心から活用することへ

・若い職員に対する研修の充実

特別講演

「日本における木器研究の最前線」

首都大学東京大学院人文科学研究科教授

山田 昌久 氏

〈2日目6月2日(金)〉

視察

・国特別史跡登呂遺跡・登呂博物館

・ふじのくに地球環境史ミュージアム

ウ、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議

期 日：10月5日（木）～6日（金）

会 場：岩手県盛岡市内丸もりおか歴史文化館ほか

参加者：副所長 山田 寿雄

内 容

盛岡市遺跡のまなび館が開催機関となり、加盟13機関中10機関18名が参加した。

<議事>

1 協議事項

① 平成31年度以降の幹事選出方法及び文化庁要望について

次期ブロック幹事候補として、北海道地区から1機関と東北地区からは宮城県内から1機関を選出することとした。各地区から候補をそれぞれ幹事まで報告いただくことで了承された。

なお、次期幹事のうち1機関は全国の監事となることから幹事候補で協議すること。

また、文化庁への要望等についても毎年度の協議題としたいとの提案があり、了承された。

② 平成33年度以降のブロック会議開催機関について

北海道1回、東北2回のサイクルを維持し、第34回から43回までの開催機関を各地区内で調整し、来年度のブロック会議で決定することで了承された。

2 照会事項

各機関から照会のあった以下の事項について、照会機関からの趣旨説明のあと、各参加機関の事例紹介など活発な意見交換が行われた。

① 地方自治法・地方公務員法改正に係る影響について

② 無期労働契約転換への対応について

③ 発掘調査報告書の非掲載の出土品の活用状況について

④ 出土鉄さい等の取扱について

⑤ 保存処理を要する出土品の活用状況について

⑥ 遺構構築部材の取り上げについて

⑦ 調査図面・写真資料等の管理台帳について

⑧ スキャニングされたデジタルデータの管理方法について

⑨ 分掌事務の変更

⑩ 施設の自己点検評価の導入状況について

⑪ 所内研修など職員教育の取り組みについて

⑫ 大学・研究機関等との連携事業の取り組みについて

⑬ 埋蔵文化財センターの業務について

⑭ 発掘調査報告書ウェブ公開に係る公衆送信権等の処理について

⑮ 原因者負担以外の出版物の刊行について

⑯ 鋼鉄製の矢板で調査区を囲んでの発掘調査事例について

⑰ 最新電子機器等の運用について

⑱ 消費税10%導入時における入館料の対応について

⑲ 文化財保護法第93条・94条に係る「発掘届（通知）」の取扱について

<視察>

10月5日の全体会議の終了後、もりおか歴史文化館及び史跡盛岡城跡の視察が行われた。

6日は志波城古代公園及び盛岡市遺跡の学び館において、それぞれ担当者からの説明を受けながら視察が行われた。

エ、平成29年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第30回研修会

期 日：10月19日（木）～10月20日（金）

会 場：青森県観光物産館アスパム 6階会議室
「岩木」ほか

参加者：普及活用課主査 坂本 尚史

1日目 10月19日（木）研修会

<特別講演>

「倭の周辺域における墳墓の諸相」東北大学総合学術博物館教授 藤沢 敦 氏

<事例報告1>

「末期古墳とエミシ社会」青森県八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 宇部 則保 氏

<事例報告2>

「末期古墳の展開と阿光坊古墳群の位置づけ」青森県おいらせ町教育委員会 小谷地 肇 氏

<事例報告3>

「副葬品から探る九州南部の墓制」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 吉村 和昭 氏

本研修は主に北海道から東北地方に残された「末期古墳」に焦点を当て、中央と周辺地域の様相の差異から社会構造の違いを導き、非単一的な

日本列島の社会を再認識する、との主旨が窺えた。

古墳時代末の7～8世紀、4世紀から古墳造営を推進してきた大和朝廷＝倭はその勢力範囲の外縁部（北は大崎平野から新潟平野にかけて）にまで「終末期古墳」の造営を行っていた。これに対し周辺地域である南北地域にはこれら「倭の古墳」と異なる独自の墓制を確認することができるが、全体を通しての背景として提示された。事例報告では周辺地域に展開された特徴的墓制が紹介され、個別の考古資料との関係性が理解できた。

具体的に北海道・北東北地域では「末期古墳」と呼ばれる小円墳が築造される。末期古墳の成立は7世紀初頭で、前段階の「後期古墳」の小規模円墳や同時期の終末期古墳から強い影響を受けたことが指摘されている。また並行して北東北地域に方形竪穴住居や土師器が導入されることもその証左と考えられた。

しかし、倭の古墳と末期古墳には大きな相違点も認められることが藤沢教授の講演では注目された。一つは存続時期で、倭の古墳が終焉した8世紀以降も、末期古墳は10世紀まで盛んな築造が継続する。倭の古墳の大きな特徴として、中央で起こった墓制の変化が短期間で地方にまで浸透する連動性があげられるが、こうした連動が末期古墳にはみられない点である。

二つ目は古墳格差の顕在化で、倭の古墳は墳丘形態・規模・内部主体構造・外部施設・副葬品において、身分階層を表すための明瞭な格差が認められる。これに対し末期古墳は前述の各要素が非常に均質的で階層を示す差異は認め難い点があげられた。

こうした倭の古墳と末期古墳との比較結果から、倭には確立した階層社会、北海道・北東北には特定の中心的政治勢力が存在しない緩やかな階層社会が存在し、異なる文化集団として交流と対峙がなされた非単一的な古代日本列島の様相があったと理解することができた。

北海道の擦文文化期の社会構造を考察する上で重要な視点であり、縄文時代以来の自給的生業形態から、交易に比重を置いた生業形態へ変容した擦文文化が、その交流・交易体制を本州とどのような関係性のもと築いていたのかを考える上で大変有意義な研修であった。

本研修の成果は、12月2日開催の特別展「北海道遺跡百選10 シブノツナイと北の古代」に応用することができた。

2日目 10月20日（金）視察見学

東北町歴史民俗資料館にて常設展および特別展「上北地方の古代遺跡」を見学。おいらせ町阿光坊古墳館にて常設展見学後、阿光坊古墳群を踏査。青森市三内丸山遺跡の野外展示、整理作業室、収蔵室、常設展示を見学。

特に阿光坊古墳群の視察では、常設展示で内部構造や築造方法に関する知識を得た後に、実際の古墳を見学することが出来たため、理解が深まった。復元された墳丘と未調査の墳丘を比較して実見できたことは、構築時の墳丘の高さなどを考える上で興味深かった。

オ、第8回文化財写真技術研究会

期 日：7月7日（金）・7月8日（土）

会 場：奈良県奈良市二条町2-9-1

奈良文化財研究所 平城宮跡資料館 講堂

参加者：第1調査課長 中山 昭大

内 容

7月7日（金）

研究会Ⅰ「発掘調査におけるデジタルカメラの導入について」その背景と目的

講 演「埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について」

文化庁から3月に出された『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について』（報告）における今後のデジタル機器導入に際しての注意点と、導入に移行せざるを得ない現状について文化庁記念物課の近江俊秀氏から話があった。デジタルカメラはフルサイズを推奨、周辺機器も必要で、データの保存には時間もお金もかかることを認識すべきであるとのこと。その後の討論では、データ管理は結局人に依存するので異動があると維持が難しい、セキュリティ問題、フィルム保管などの話題が出た。

7月8日（土）

メーカーに聞く～より身近になった中判デジタルカメラ～

リコーペンタックス、フェーズ1、ハッセルブラッド、富士フィルムの各社から最新のデジタル

中判カメラの説明を受けた。今のところ、富士フィルムのG F Xが当センター導入には適しているように思えた。

研究会Ⅱ 文化財フィールド写真術

奈文研栗山雅夫氏・杉本和樹氏、名古屋市博物館杉浦秀昭氏、東大史料編纂所高山さやか氏、奈良国立博物館佐々木香輔氏、宮内庁正倉院事務所北田仁司氏という実際に文化財保存や調査の第一線で活躍している諸氏の撮影方法の説明。外では太陽の向きに留意する、仏像は資料撮影であることを常に頭に置き、どの仏像でも比較できるように同じ照明角度、カメラの位置で撮影する、文書の複写では文書の各形式に注意して、資料を傷めないような撮影をする、工芸品は撮影室の空調を事前に保存室と同じにして資料の劣化を防ぐ、など、資料の状態を余すことなく写し撮るための工夫についての説明があった。

カ、文化財保存修復学会第39回大会

期 日：6月30日（金）～7月2日（日）

会 場：金沢歌劇座 石川県金沢市下本田町

参加者：普及活用課長 田口 尚

内 容：6月30日（金）は、プレイベント見学会として「石川県立歴史博物館と周辺近代化遺産のヘリテージツアー」が開催された。この博物館は、明治31年に金沢城址内に置かれた旧陸軍9師団の赤レンガ造りの旧金沢陸軍兵器支廠兵器庫を博物館として再利用したものである。戦後は金沢美術工芸大学校舎として利用され、大学移転後の1968年に石川県郷土館として開館した。1990年には重要文化財に指定され、再改修工事を経て2015年に石川県立歴史博物館と加賀本多博物館（旧藩老本多蔵品館）としてリニューアルオープン。重文建造物の再利用の参考として、他県からの視察も多い。体験コーナーでは甲冑や当時の衣服を着ることができ、過去の映像やCGなど映像展示を多く配置している。収蔵庫は兵器庫を現状のまま再利用しており、けっして良好な保管環境とは言えないが、最新の二酸化炭素を利用した大型燻蒸装置（低酸素法）を配置し、積極的に病害虫対策や総合的病害虫管理活動（I P M活動）を実施している。周辺には旧陸軍第9師団長官舎を再利用した県立美術館や石川県文化財保存修復工房、旧陸軍金沢借

行社、旧陸軍第9師団司令部庁舎などの歴史的建造物群が集合しており、歴史公園としての施設配置が素晴らしい。しかし、積雪寒冷地に特有のレンガや石材の凍結融解現象による劣化がいたるところに見られ、保護と活用の相反する問題点も顕著であった。また、石川県文化財保存修復工房では、実際の絵画・屏風・掛け軸などの修復現場をガラス越しに見学できた。ここでは、修復師の後継者不足、さらに修復に必要な刷毛等の伝統的工芸用品を製作する工房の廃止、その後継者不足が喫緊の問題となっている。

文化財保存修復学会の本体会では、口頭発表は8セッションに分けられ、災害対応、保存・修復事例、殺菌、分析同定事例、製作材料など、一日目19件、二日目14件の計33件の発表があった。特別講演として石川県文化財保存修復協会代表理事（大会実行委員長）中越一成氏による「地域に根差した文化財修復」の講演があり、文化財修復の未来に向けての問題点が指摘された。ポスターセッションは一日目P001～P060、二日目P061～P120の発表があった。その他、特別ポスター発表が5件あり、金沢県における文化財保存修復に関連する発表と災害対策作業部会2016年度活動報告があった。

2日間の日程で興味深かった発表を列記する。

口頭発表のO-03「乾燥方法・災害種別の異なる被災水損資料の揮発成分について」の発表では、東日本大震災の被災資料をもとに東北歴史資料館の及川規、芳賀文絵らが分析・検討した。その結果、乾燥方法の違いにより残存する成分と種類が異なり、真空凍結乾燥では揮発性の高い成分も残存することが判明した。津波被害よりも洪水被害の方が、酸・エステル類が多く残存する可能性があり注意を要するとの情報を得た。O-13では、「X線CTデータから見た興福寺阿修羅像の修理痕跡」について、奈良大の今津節生教授らから報告があった。各時代の破損や修理痕、釘抜けが見られ、明治以前から第一手の両腕は破損していたことが明らかとなった。O-32では、「国立民族学博物館における収蔵庫再編成—民族資料の収蔵・保管改善—」の報告があった。保存科学研究と連動した持続的な資料管理とI P M活動が連動することの重要性が述べられた。特に資料の形状や状態

に合わせた収納・保管方法を適用することで、比較的短期間、低予算で改善ができる。同様の資料を収蔵する他館と経験や知見を共有することで持続的な管理、環境改善が可能との情報を得た。

ポスター発表では、P-1「ガラス外壁を有する博物館建造物における衝突野鳥の傾向分析と対策」、P-2「桐箱と調湿剤等の使用による収蔵品へのカビ生育抑制効果の検討」などの施設や保管環境に関する発表は、道内各博物館や収蔵施設にも有用な情報であった。P-44「キトラ古墳壁画の修復」では、より詳細な薬剤の組み合わせや保存強化材料が紹介された。この修復作業は現地のキトラ古墳壁画展示施設においてビデオ公開されているが、発表で保存材料をはじめ、多くの知見が得られた。今後の道内の脆弱資料にも活用可能と思われる。P-55「X線CTと3Dプリンターを駆使したアイヌ民族資料「イカヨブ（狩猟用矢筒）」の内部構造および内容物の可視化」では、密閉未開封の矢筒に残存する用具の数、素材などを推定し、用具のみを3Dプリンターで復元した。考古資料や民族文化財に対して、非接触による内部の調査方法を大きく進展させ、今後を期待させる発表であった。

今後とも可能な限り地域の文化財の保存と活用に貢献できるように、学会などの最新情報収集と得られた情報の発信に努めていきたい。

キ、第1回北海道東部の竪穴住居跡群 調査懇談会

期 日：7月25日（火）

会 場：道庁別館西棟3階会議室1

参加者：第1調査部長 長沼 孝
普及活用課主査 坂本 尚史

内 容：北海道教育委員会が主催する「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」に文化財・博物館課長の依頼を受け出席した。本会は、北海道東部を中心とした竪穴群に関する基礎的な情報を整備し、将来の世界遺産登録をも視野に入れた保全と活用を図ることを目的に進められた調査に対する意見交換の場、として位置付けられている。

出席者は、事務局である北海道教育委員会4名、構成員（有識者）として東京大学准教授熊木俊朗氏、北海道大学総合博物館研究員天野哲也氏、北

海学園大学非常勤講師澤井 玄氏、報告者として斜里町立知床博物館学芸主幹松田 功氏が招聘されていた。

意見交換の話題提供として松田氏から「斜里町チャシコツ岬上遺跡について」と題した報告が行われた。内容は以下の4点に要約される。①遺跡はオホーツク文化終末期の単独集落遺跡として貴重な類例であり、また当該期の集落としては高密度且つ最大規模を誇ることや保存状態の良さから、町が国指定史跡をめざしている。②遺跡の立地が岬上の海に囲まれた環境であり、当該期集落の典型的要素として捉えられる一方、標高50mを超える急崖上の立地は他の遺跡にはみられない、際立った特徴である。③住居・墓・貝塚（廃棄層）の諸様相が揃って検出された貴重な例であり、骨塚やヒグマの歯を伴う配石遺構はアイヌ文化へと続く動物儀礼の変遷を示す可能性がある。④廃棄層から皇朝十二銭のひとつである「神功開宝」が出土し、擦文文化を挟んだオホーツク文化と律令政権との関係を考察するための重要な資料を得た。また、②の急崖上に位置する特殊性については、広範囲を見渡せる眺望の良さを理由にあげ、交易拠点や防御性などの集落の性格を推測した。

これに対し構成員からは、「特異な立地環境にある理由を眺望以外にも考える必要がある」、「オホーツク文化の典型的要素を持つ単一大規模遺跡で、集落構造がこれだけ明らかにされた例は他になく、大変貴重である」などの発言がなされた。

次に「個別調査」として位置付けられている重要遺跡確認調査について、平成29年度の実施計画書を提示・説明した。

最後に事務局である北海道教育委員会から、道指定史跡の指定範囲と竪穴分布範囲の齟齬について話題提供があり、竪穴分布範囲の座標データ収集の必要性（測量調査）が確認された。構成員からは「道教委が主導して問題の把握と解消に努めてもらいたい」との発言があった。

ク、第2回北海道東部の竪穴住居跡群 調査懇談会

期 日：10月12日（火）

会 場：道庁別館8階教育庁1号会議室

参加者：普及活用課主査 坂本 尚史

内 容：北海道教育委員会が主催する「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」に文化財・博物館課長の依頼を受け出席した。本会の主旨は上述のとおりである。

出席者は、事務局である北海道教育委員会3名、構成員（有識者）として東京大学准教授熊木俊朗氏、北海道大学総合博物館研究員天野哲也氏、北海学園大学非常勤講師澤井 玄氏が招聘されていた。また、傍聴人として湧別町教育委員会の林勇介学芸員が同席した。

意見交換の一つ目の情報提供として、当センターより「平成29年度湧別町シブノツナイ竪穴住居跡群調査成果について」と題した報告を行った。内容は、①確認竪穴総数が530か所に増加したこと、②竪穴掘り上げ土の投げ込み状況を確認したこと、③基本土層を確認したこと、④指定範囲北部に縄文文化の遺物分布を確認したこと、⑤指定範囲北西部に近年の地形改変を確認したこと、⑥竪穴検土杖調査により炉跡・覆土堆積・焼失住居に関する情報を取得したこと、を説明した。

これに対し構成員からは「竪穴分布範囲に関する情報と個別竪穴の構造の把握を発掘調査によって取得していく必要がある」、「調査が地元を引き継がれ、町民の活用に向けた調査が実施されていくことが望ましい」との発言があがった。

二つ目の情報提供として事務局から「竪穴群データベース」についての説明があり、情報の取得項目や管理方法、現在の集計成果などについて具体的な提示があった。

これに対し構成員からは取得項目の増設の提案のほか、「対象を窪みで残る竪穴に限定しているが、当該期の集落の立地や地域性、時代構成などを正確に把握するためにも、調査によって把握された埋没した竪穴もデータベースに取り込む必要がある」との発言がなされた。また「他の研究者が作成した既存のデータベースを参考・援用してはどうか」などの提案もあがった。

三つ目の情報提供として事務局から「北海道・ロシア地域間文化遺産交流事業」が紹介され、事業目的や今後の展望についての説明がなされた。

ケ、第3回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会

期 日：平成30年2月28日（火）

会 場：道庁別館西棟3階会議室1

参加者：普及活用課主査 坂本尚史

内 容：北海道教育委員会が主催する「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」に文化財・博物館課長の依頼を受け出席した。本会の主旨は上述のとおりである。

出席者は、事務局が北海道教育委員会3名、構成員（有識者）が東京大学准教授熊木俊朗氏、北海道大学総合博物館研究員天野哲也氏、北海学園大学非常勤講師澤井 玄氏であった。また、傍聴人として湧別町教育委員会の林 勇介氏が同席した。

意見交換では総合調査「竪穴群データベースについて」、個別調査「シブノツナイ竪穴住居跡群調査の成果と課題」、次期計画「北海道東部の竪穴住居跡群調査第2次計画」の報告が行われた。

総合調査は事務局である北海道教育委員会文化財・博物館課から、①データベース作成作業の対象と地域の確認、②データベース様式の改訂の説明、③平成29年度に実施したオホーツク管内を対象とした調査成果について報告がなされた。

個別調査では当センターより3か年に及ぶ重要遺跡確認調査の成果を、①遺跡立地、②竪穴分布、③竪穴群分布範囲周辺部の利用状況、④竪穴群形成過程、⑤史跡指定範囲の保存状況の各観点から項目別に報告し、今後本遺跡の調査が継続的に実施されることを想定した上で、将来的な課題について提示した。有識者からはこの地に大規模竪穴群が形成された理由、遺跡の性格について考えていく必要があることが指摘され、その方法論についても議論が及んだ。

次期計画では個別調査を引き続きオホーツク管内で実施する計画が示され、有識者からは総合調査・個別調査共に、道指定史跡の現況・実態の把握を優先的に進めるべきとの指摘があがった。

会の最後には事務局から「北海道・ロシア地域間文化遺産交流事業」に関する取り組みについて経過説明がなされた。

コ、保存科学研究集会2017

期 日：平成30年 3 月 9 日（金）

会 場：奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂

参加者：普及活用課長 田口 尚

内 容：今年度は『金属製遺物の調査・研究に関する最近の動向』と題して開催された。遺跡調査や保存処理、収蔵保管において常に問題となるテーマのひとつであったため、全国の県教委、埋文センター、市町村、保存科学関係者により満席の状態となった。高妻洋成センター長の挨拶のち、「保管・展示時の鉄製遺物の劣化に及ぼす湿度の影響」柳田明進（奈良文化財研究所）、「地層処分研究開発における出土遺物の知見の活用」三ツ井誠一郎（日本原子力研究開発機構）、「金属製遺物における分析からわかること～原理からデータの解釈まで～」渡邊緩子（日鉄住金テクノロジー株式会社）、「金相化学分析と鑄造実験から見える古代中国・殷墟青銅器の鑄造技術」飯塚義之（中央研究院地球科学研究所）、「古代青銅鏡金属組織の直接観察と定量分析の試み」長柄毅一（富山大学）などの他、午後には最新の出土金属製品の取上げ、復元、分析事例、X線CT画像を利用した模擬発掘や公開展示利用などのポスター発表解説があった。各発表後に、総合討議と参加者からの質疑応答が活発に行われた。柳田氏は金属製品劣化防止には、やはり適切な温湿度環境維持・確保の重要性であることを述べた。三ツ井氏は放射性廃棄物の地層処分に使用される金属ボックスの構造やボックスへの地殻変動や地質環境による影響についての質問に、理論的安全性を説明した。渡邊氏や飯塚氏は、ハンディ蛍光X線装置の登場など、昨今の分析機器の発達と使用者の分析値解釈の誤解や弊害を上げ、機器別に基本原理やデータ処理の基礎について詳細に解説された。長柄氏は基本的な直接観察や顕微鏡観察がもっとも重要であるとした。出土金属製品の取扱いは、当センターをはじめ、道内関係機関に再度周知徹底が必要であることを痛感した。

3 分析・鑑定・保存処理等

(1) 分析・鑑定

ア、石製装身具等の材質分析

今年度は、企画展「北の縄文 縄文耳飾りの世界」の開催にあわせ、展示のために道内市町村から借用した石製装身具等の材質分析を行った。

分析対象は、借用したもののうち、詳細な岩石学的分析結果が報告されている福島町館崎遺跡出土資料（(公財)北海道埋蔵文化財センター2017）を除く16点とした。石材の化学組成データの蓄積と、それによる石材の同定を目的として、肉眼・顕微鏡観察および化学組成分析を行った。

本章2節(1)のうちの保管出土品の材質分析とあわせ、以下に概要を報告する。

分析試料

分析試料は表1のとおりである。口絵2に試料写真および分析位置を示す。今回は紙幅の都合上、分析位置の一部については測定値の掲載を割愛している。

測定装置

化学組成の測定には、北海道立埋蔵文化財センターが所有する日本電子製エネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX-3220を使用した。定性分析及びファンダメンタルパラメーター（FP）法による、標準試料を用いない半定量分析を行った。

装置の仕様および測定条件

X線管球：ターゲットがRhのエンドウィンドウ型

X線検出器：Si (Li) 半導体検出器

管電圧：30.0kV

管電流：自動設定

雰囲気：真空

X線照射径と測定時間：照射径7mmのときライブタイムで120秒、照射径1mmのとき同じく300秒

測定は非破壊で行った。試料は超音波洗浄機による水洗後、エタノールで拭き取りした。ただし、注記の剥離のおそれのあるもの等にはこの処理は行っていない。

測定は、原則的に任意の2か所ないし3か所を選定し、X線照射径7mmで行った。色調の違いなどにより化学組成の差が予想される部位には、必要に応じて追加して測定した。その際、小領域に対してはX線照射径を1mmとした。

分析結果

図1に代表的な蛍光X線スペクトルを、表2に半定量分析による化学組成値を重量%で示す。化学組成値と肉眼・顕微鏡観察結果から推定される岩石名は表1に示した。黒色部を含む範囲を測定したうち、No.9(c)、No.13(b)、No.14(d)(i)、No.26(e)では、他の測定部位と比較して Cr_2O_3 や Fe_2O_3 の含有が多く、クロム鉄鉱あるいは磁鉄鉱を含む部位を測定したと推定される。緑色部を測定したNo.18(d)は、緑泥石と推定される。

縄文時代早期中葉～中期中葉の珧状耳飾と石製品類（No.1～19）では、使用されている石材は滑石が最多で7点、以下、葉蠟石岩4点、緑泥石岩4点、ネフライト2点、タルク化蛇紋岩と金雲母岩が各1点であった。

珧状耳飾の類型分類（表1）と石材には、関連のみられる例がある。「有明山社」型の4点（No.10・11・15・17）はすべて葉蠟石岩製であり、他の類型では葉蠟石岩は使用されていない。円盤形には滑石（No.1・19）・緑泥石岩（No.2・3）があり、緑泥石岩は円盤形にのみ使用されている。一方、複数の種類の珧状耳飾に用いられる石材は、滑石のみであった。また、珧状耳飾以外の石製品類では、主に滑石・緑泥石岩が使用されている。今回分析した資料は限られた数ではあるが、以上の傾向は、当時の石材選定の一端を示している可能性がある。なお、No.13の寿都3遺跡の三角形珧状耳飾は滑石製で、色調やクロム鉄鉱を含有する等の特徴が福島町館崎遺跡出土の三角形珧状耳飾と共通しており、関連が想定される。

縄文時代後期中葉、美々4遺跡群集墓の副葬品の玉類（No.20～27）では、垂飾に蛇紋岩・ネフライト・滑石、丸玉に緑泥石岩、小玉に滑石が用いられていた。これらは報告時は「蛇紋岩」「滑石」とされていたものである。今回分析した玉類は多量のヒスイ製の玉類に伴って出土しており、同様の出土状況は、後期後葉の美々4遺跡周堤墓や隣接する苫小牧市美沢1遺跡周堤墓でも確認されている。ここでも、ヒスイ製以外の玉類は、ほとんどが蛇紋岩製と報告されている。

まとめ

分析の結果、縄文時代早期中葉～中期中葉の珧状耳飾と石製品類では、これまで考えられてきた

表 1 分析試料一覧

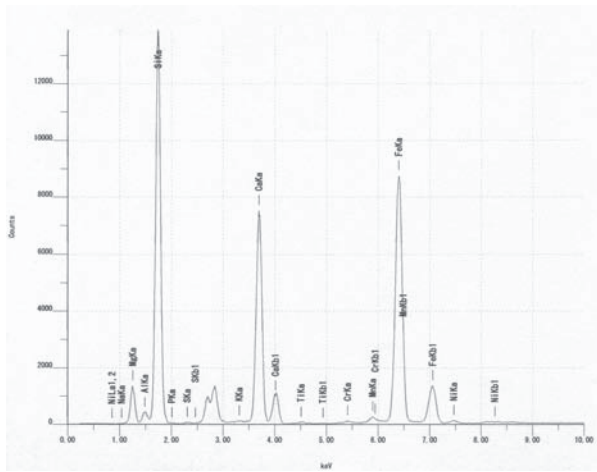
試料 No.	遺跡名	遺物名	球状耳飾類型 (川崎2004による)※	時期	報告石材名	推定石材名	掲載報告書等	図番号	所蔵
1	小林遺跡	球状耳飾	凹盤形	前期前半	蛇紋岩	滑石	芽室町教育委員会2000『小林遺跡 第5次発掘調査報告書』	図15-4	芽室町教育委員会
2	小林遺跡	球状耳飾	凹盤形	前期前半	蛇紋岩	緑泥石岩		図15-5	
3	新吉野台遺跡	球状耳飾	凹盤形	前期前半	蛇紋岩	緑泥石岩		図34-3-1	
4	新吉野台遺跡	有孔石斧				ネフライト			
5	共栄B遺跡	球状耳飾?	凹盤形?	早期中葉	蛇紋岩	緑泥石岩		Fig. 40-1204	浦幌町教育委員会
6	共栄B遺跡	垂飾		早期中葉	滑石	滑石		Fig. 32-1027	
7	共栄B遺跡	環状垂飾		早期中葉	環状垂飾	緑泥石岩		Fig. 38-1	
8	共栄B遺跡	環状垂飾		早期中葉	環状垂飾	滑石		Fig. 38-384	
9	北斗遺跡	類 球状耳飾		前期前半	ヒスイ(?)	滑石	釧路市教育委員会1975『釧路市北斗遺跡調査概要』	第8図17	釧路市教育委員会
10	緑町1遺跡	球状耳飾	「有明山社」型	前期前半	葉礫石岩	葉礫石岩	旭川商業高等学校郷土部1961『あけぼの』旭商郷土部ノートNo.5.「新旭川市史」第1巻通史1		旭川市博物館
11	八木A遺跡	球状耳飾	金環形(断面三角形)	前期前半	ネフライト	ネフライト	南茅部町埋蔵文化財調査団1995『八木A遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』	図275-83	函館市教育委員会
12	八木A遺跡	球状耳飾	三角形	前期末葉~中期前半	滑石	滑石		第144図6	寿都町教育委員会
13	寿都3遺跡	球状耳飾	三角形	前期末葉~中期前半	滑石	タルク化蛇紋岩		第144図7	寿都町教育委員会
14	寿都3遺跡	球状耳飾	三角形	前期末葉~中期前半	滑石	葉礫石岩		第67図226	苫小牧市教育委員会
15	美沢4遺跡	球状耳飾	「有明山社」型	前期前半	滑石	滑石	(財)北海道埋蔵文化財センター1980『フレベツ遺跡群』		
16	美沢11遺跡	類 球状耳飾		前期?	メノウ	滑石	苫小牧市埋蔵文化財調査センター1993『美沢11遺跡』	図12-7	
17	美々々5遺跡	球状耳飾	「有明山社」型	前期後半	滑石	葉礫石岩	(財)北海道埋蔵文化財センター1981『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』	図159-193	
18	美々々4遺跡	球状耳飾	三角形	前期後半	滑石	金雲母岩		図12-8	
19	キウス5遺跡	球状耳飾	凹盤形	前期前半	滑石	滑石	(財)北海道埋蔵文化財センター1995『キウス5遺跡(2)』	図32-1(図39-6)	
20		勾玉		後期中葉	滑石	蛇紋岩		図39-4(図39-23)	
21		小玉		後期中葉	滑石	滑石		図39-5(図39-24)	北海道立埋蔵文化財センター
22		小玉		後期中葉	滑石	滑石		図39-3(図39-25)	
23		小玉		後期中葉	滑石	滑石		図45-1(図39-11)	
24	美々々4遺跡	垂飾		後期中葉	蛇紋岩	滑石	(財)北海道埋蔵文化財センター1981『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』	図48-3(図39-70)	
25		丸玉		後期中葉	蛇紋岩	緑泥石岩		図52-2(図39-3)	
26		垂飾		後期中葉	蛇紋岩	ネフライト		図56-1(図39-1)	
27		垂飾		後期中葉	滑石	ネフライト			

※「有明山社」型については、他に加藤(2010)、藤田(2011)を参考にした。

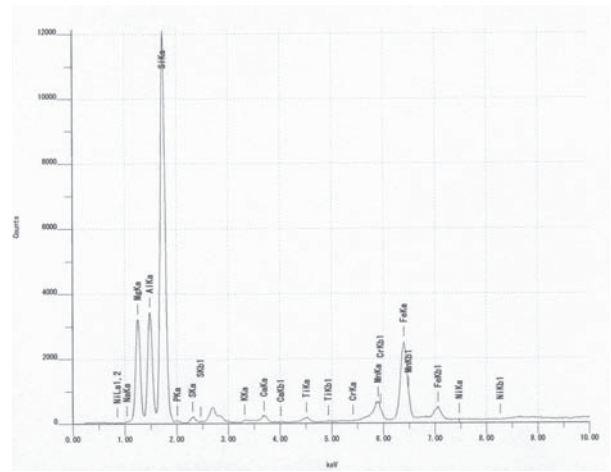
表 2 化学組成値(1)

試料No. 分析位置 色調等 X線照射径	1			2			3			4			5			6			7		
	a: 緑色 7mm	b: 白色 7mm	c: 緑色主 7mm	a: 帯緑 白色 7mm	b: 濃緑色 7mm	c: 白色 7mm	a: 緑色 7mm	b: 白色 7mm	c: 緑色 7mm	d: 白色 7mm	a: 白色 7mm	b: 暗褐色 と黒色斑状 7mm	c 7mm	a: 暗色 7mm	b: 白色 7mm	c: 傷部 7mm	a: 濃緑色 7mm	b: 帯緑 白色 7mm	c: 白色 主体 7mm	d: 白斑部 7mm	
Na ₂ O	0.86	0.48	0.73	1.36	0.85	0.31	1.12	1.00	1.19	0.32	0.58	0.77	0.77	1.03	0.57	1.81	1.96	nd	0.09	nd	0.30
MgO	27.68	27.32	28.00	35.63	34.59	34.04	33.46	31.22	34.42	33.61	20.90	20.45	20.57	34.08	33.74	35.08	27.98	32.37	30.02	26.96	26.27
Al ₂ O ₃	2.27	2.10	1.96	17.10	18.09	18.02	15.34	15.42	16.67	16.07	2.44	2.65	2.31	19.76	19.64	19.29	2.44	1.77	18.47	18.44	21.16
SiO ₂	62.63	62.86	62.50	38.88	38.95	40.12	43.94	46.03	41.87	43.92	56.26	55.48	57.07	42.33	42.81	42.20	62.63	39.41	38.72	37.96	38.88
P ₂ O ₅	0.37	0.34	0.30	0.20	0.29	0.28	0.41	0.36	0.41	0.45	0.33	0.31	0.29	0.30	0.33	0.21	0.19	0.23	0.28	0.32	
SO ₃	0.10	0.15	0.16	0.02	0.08	0.07	0.10	0.09	0.10	0.12	0.15	0.16	0.14	0.17	0.33	0.26	0.34	0.26	0.37	0.63	
K ₂ O	0.04	0.04	0.04	0.03	0.06	0.10	0.02	0.04	0.03	0.03	0.03	0.03	0.02	0.06	0.06	0.08	0.17	0.08	0.10	0.16	
CaO	0.10	0.12	0.13	0.16	0.17	0.21	1.53	1.84	0.92	1.11	12.41	12.66	12.47	0.20	0.25	0.23	0.13	0.13	1.13	1.32	
TiO ₂	0.03	0.02	0.07	nd	0.02	0.02	0.40	0.19	0.21	0.19	0.08	0.04	0.07	0.06	0.10	0.19	0.05	0.03	0.01	0.03	
Cr ₂ O ₃	0.06	0.05	0.09	0.26	0.20	0.24	0.00	0.00	nd	0.00	0.04	0.04	0.02	0.05	nd	0.15	0.12	0.03	0.12	0.08	
MnO	0.07	0.07	0.07	0.14	0.15	0.16	0.08	0.08	0.13	0.11	0.17	0.18	0.15	0.13	0.19	0.20	0.08	0.05	0.17	0.20	
Fe ₂ O ₃	5.64	6.27	5.82	5.96	6.26	6.18	3.58	3.71	4.03	4.04	6.56	6.81	6.63	6.24	6.87	1.69	4.58	8.44	10.29	10.94	
NiO	0.14	0.16	0.13	0.28	0.29	0.26	0.01	0.01	0.02	0.02	0.06	0.06	0.05	0.06	0.00	0.00	0.14	0.31	0.22	0.25	

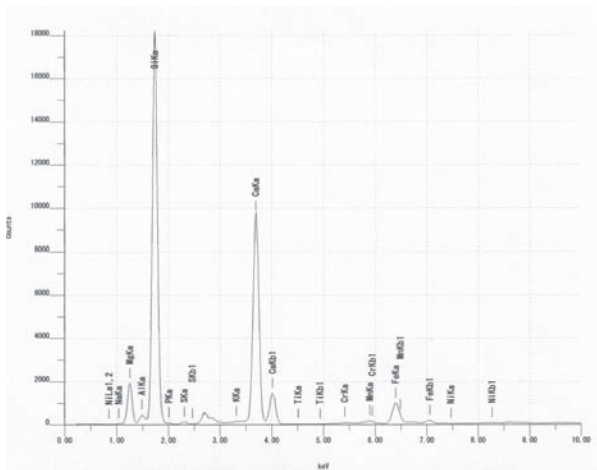
試料 No. 4 (a) ネフライト (黒色系)



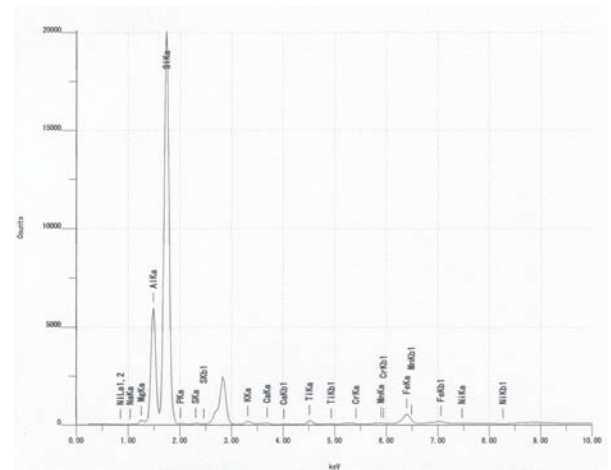
試料 No. 5 (a) 緑泥石岩



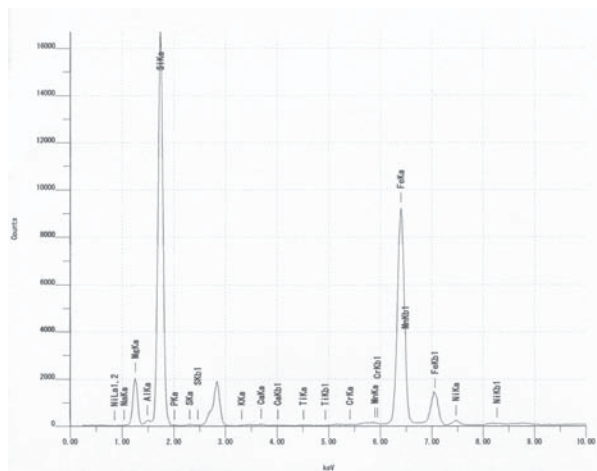
試料 No. 12 (a) ネフライト (白色系)



試料 No. 15 (a) 葉蠟石岩



試料 No. 16 (a) 滑石



試料 No. 18 (a) 金雲母岩

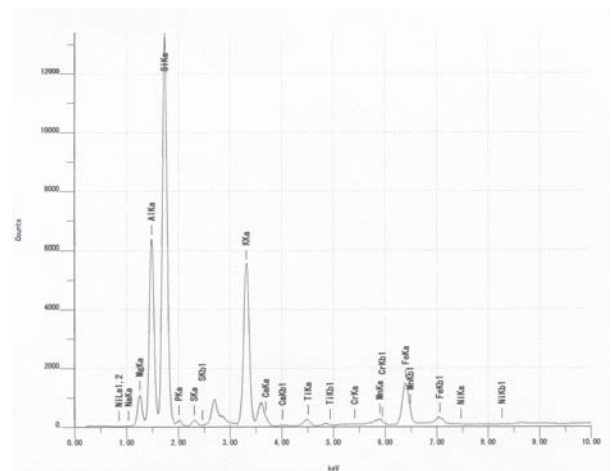


図1 蛍光X線スペクトル図

滑石や蛇紋岩以外に、緑泥石岩や葉蠟石岩・金雲母岩の使用が確認された。これらの石材を利用した玦状耳飾は、今まで道内では同定例のほとんどなかったものである。また、縄文時代後期中葉の美々4遺跡の副葬品の玉類でも同様に、緑泥石岩・ネフライトの使用が確認された。

石製装身具等に使用される石材は、緻密で光沢があるなど共通した特徴をもつものも多く、通常の肉眼観察のみでは同定の難しい場合も少なくない。詳細な観察や化学組成の測定を行うことで、新たな石材情報を得ることができるものと考えられる。

なお、今回は紙幅の都合により、化学組成値や蛍光X線スペクトル図を一部割愛した。資料借用先市町村には、それらも含めた分析結果の報告を行っている。

末尾になりましたが、分析を許可していただいた各教育委員会に感謝いたします。

(注) No. 12は、見通しの断面形が台形であり、「有明山社」型とも考えられるが、平面形と厚さの点では金環形に相当する。環の断面形が三角形であることが一般的な金環形とは異なるが、「金環形(角)」(加藤2010)に倣い、今回は、「断面が三角形の金環形」として扱った。

主要引用・参考文献

- アースサイエンス株式会社2009「西島松5遺跡出土玉類の岩石学的分析(平成18年度)」『西島松5遺跡(6)』(財)北海道埋蔵文化財センター
- アースサイエンス株式会社2017「石製品等の岩石学的分析(1)・(2)」『館崎遺跡』(公財)北海道埋蔵文化財センター
- 加藤 学2010「新潟県における玦状耳飾」『玉文化』7
- 川崎 保2004「玉の類型編年 玦状耳飾」『季刊考古学』89
- 藤田富士夫2011「富山県の玦飾(玦状耳飾)」『玉文化』8

有機性遺物

有機性遺物では、過年度報告の小樽市忍路土場遺跡、千歳市美々4遺跡、同美々8遺跡、同キウス4遺跡などの、縄文時代～アイヌ文化期の木製品のうち、報告時に樹種同定を実施できなかった水浸出土材および炭化材の樹種同定を行った。道内における用具や建築材の樹種選択傾向、ウルシノキや針葉樹材などの本州材の流入についての検討試料と基礎データ収集を行った。

また、小樽市忍路土場遺跡、千歳市美々4遺跡、同キウス4遺跡等、縄文時代前期～後期～晩期の赤色漆塗糸、赤色漆塗櫛・腕輪、赤色漆塗弓等の剥落細片をエポキシ樹脂包埋研磨し、プレパラートを作成した。主に光学顕微鏡と蛍光X線分析装置を用いて漆塗膜構造や顔料分析を行い、製作技法の検討を行った。千歳市美々8遺跡、同ユカンボシC15遺跡、平取町二風谷遺跡資料では、アイヌ文化期の漆塗椀(イタンキ)や行器(シントコ)、漆塗折敷などについても、剥落細片からプレパラートを作成して、木胎、下地、塗膜構造、顔料などを分析し、製作技法を比較検討し、産地推定や編年の基礎データの収集に努めた。

その他、蛍光X線分析装置、走査電子顕微鏡など、分析同定に係る精密機器の設置環境整備と機器維持管理を行っているが、多くの器材や機器の老朽化が進み、消耗品の部品供給や保守点検停止も視野に入れ、早急に更新を検討すべき段階となっている。

(2) 保存処理

保存処理では、道立センター収蔵・展示中の木製品や金属製品などについて、保管環境の温湿度測定を行うなど日々点検実施している。収蔵品のうち、水漬保管遺物では、資料および容器の洗浄、水と養生材料の交換をおよそ四半期ごとに行った。処理済木製品や金属製品などの乾燥保管資料は、シリカゲル、アートソープ、脱酸素剤などの調湿剤を随時交換し、必要性に応じてフィルムパックなどを実施した。特に重要文化財「北海道美々8遺跡出土品」のうち、金属製品については、資料点検確認後に、シリカゲルや脱酸素剤の状態を確認し、RPシステムによるフィルムパックでは同封のインジケータの変色状況に注意をした。その他、水漬けフィルムパックの木製品については、PEG含浸法と真空凍結乾燥法を併用した保存処理を実施し、資料の安定化と処理期間の短縮に努め、接合・修復、注記、収納作業を実施した。金属製品やガラス玉では、収蔵保管および貸出後の劣化、破損や亀裂状況の把握につとめた。今年度は、特に企画展等の展示活用に合わせて、恵庭市西島松5遺跡、千歳市チプニー2遺跡、同オルイカ遺跡出土資料などについて、必要に応じてX線

透視撮影を実施し、随時、クリーニング、再脱塩処理、破片接合、アクリル系樹脂を減圧含浸し、修復・強化・安定化処理を行った。

収蔵遺物以外では、市町村に対して行っている保存処理や資料の保管環境整備に係る指導・助言に関連したX線透過・材質分析、樹種同定等も随時、実施した。

なお、金属製品について、全道的に再処理を要するものが増加傾向にある。また、機器の老朽化、減失に伴い、今後の保存処理、収蔵作業計画を再検討する必要がある。

4 市町村教育委員会支援など

(1) 指導・協力等

①江差町：「発掘調査に係る埋蔵文化財整理報告作業の指導について（江差町教育委員会）」。対応者：田口 尚。期間：12/11（月）～2/28（水）。場所：当センター。対象資料：本町遺跡出土金属製品14点。指導・助言内容：本町遺跡出土金属製遺物の調査及び保存処理指導。真鍮製品の構造調査および銅銭・鉄銭のX線透視観察による判読。サビおよび砂泥のクリーニング、脱塩、接合・修復、アクリル樹脂による保存処理強化。エスカルフィルムと脱酸素剤による遺物の保存（RPシステム）を実施した。

②北海道：「科学研究費助成事業への協力について（北海道博物館）」。研究課題名：「小氷期最寒期と巨大噴火・津波がアイヌ民族へ与えた影響」。対応者：田口 尚。期間：12/19（火）、12/27（水）、1/5（金）。場所：当センターX線撮影室。対象資料：ボックスサンプリングした有珠山火山灰の堆積層。分析内容：堆積土壌中に見られる有珠山火山灰の火砕流および津波堆積構造をX線透視観察により判読した。X線フィルム撮影およびデジタル画像を記録した。

③新ひだか町：「町内出土漆製品に関する保存処理及び収蔵・保管の指導助言について（新ひだか町教育委員会）」。対応者：田口 尚。期間：3/19（月）～3/20（火）。場所：新ひだか町博物館。対象資料：静内御殿山墳墓群出土の資料ほか。指導・助言内容：御殿山墳墓群出土の脆弱な赤色漆塗櫛、赤色漆塗土製品を実見・観察・簡易撮影した。損壊した土製品はアクリル樹脂により仮強

化後に実見・観察した。展示・保管環境については、素材別の適性温湿度を示し、温湿度記録計、照度計、紫外線計測装置、環境モニターキットの使用方法等について、機器計測の実演を行い指導した。

(2) 出前研修会

「地域の埋蔵文化財

―道南（渡島・桧山）を対象に―

目的：地域の埋蔵文化財についての見識を深める。

講師

第1 調査部長 長沼 孝

（公財）北海道埋蔵文化財センター主査

立田 理

函館市教育委員会生涯学習部文化財課主査

福田 裕二

森町教育委員会社会教育課文化財係長

高橋 毅

日時：8月31日（木）

会場：森町公民館

内容

研修1

「北海道の歴史と道南（渡島・桧山）の文化財」

（講師：長沼 孝）

①道南（渡島・桧山）の文化財等に関する数的概要、②天然記念物、③道南の歴史的文化財、④民俗文化財、⑤名勝、⑥建造物、⑦最近の話題の7項目について研修を行った。

研修2

「津軽海峡遺跡群の調査成果から」

（講師：立田 理）



▲市町村埋蔵文化財担当職員出前研修会

① 北海道の円筒土器下層C式、② 北海道の「盛土遺構について」、③ 箱館戦争の銃弾の3点について、研修を行った。

研修3

「近年の函館市内の調査成果から」

(講師：福田 裕二)

① 市町村合併後の函館市の埋蔵文化財、② 市町村合併後の函館市の指定文化財、③ 函館市縄文文化交流センターの整備、④ 史跡大船遺跡の整備、⑤ 史跡垣ノ島遺跡の整備、⑥ 北海道・北東北の縄文遺跡群の6点について、研修を行った。

研修4

「寒冷地における石材保存研究について」

(講師：高橋 毅)

① 寒冷地における文化財の保存修復に関する研究、② 石材保存に関する事例、③ 森町鷲ノ木遺跡の石材保存についての3点について、研修を行った。

日 程 13：10 受付・オリエンテーション

13：30 研修1

14：30 研修2

15：15 休憩

15：30 研修3

16：15 研修4

16：45 研修終了

参加者：市町村職員等11名、センター職員9名、計20名。

【出前研修会参加者一覧】

	名 前	振興局	所 属
1	福田 裕二	渡島	函館市教育委員会文化財課主査(講師)
2	高橋 毅	渡島	森町教育委員会文化財係長(講師)
3	吉田 力	渡島	函館市教育委員会
4	工藤 貴司	渡島	長万部町教育委員会
5	大谷 茂之	渡島	八雲町教育委員会
6	竹田 聡	渡島	知内町教育委員会
7	片山 弘喜	渡島	森町教育委員会
8	石井 淳平	檜山	厚沢部町教育委員会
9	塚田 直哉	檜山	上ノ国町教育委員会
10	飯浜 幹広	檜山	上ノ国町教育委員会
11	百々 千鶴	空知	深川市教育委員会

(3) 埋蔵文化財担当職員研修会

「埋蔵文化財発掘調査のデジタル資料に関する諸問題」

目 的：発掘調査に携わっている市町村職員を対象に、埋蔵文化財発掘調査のデジタル資料に関する諸問題について、専門的な研修を行う。

講 師

文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門

文部科学技官 川畑 純

奈良文化財研究所研究員 高田 祐一

日 時：12月8日(金)

会 場：北海道立埋蔵文化財センター2階研修室内 容

研修1

「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」及び「埋蔵文化財発掘調査のデジタル資料に関わる指針解説」

(講師：川畑 純)

研修2

「全国遺跡報告総覧解説」(講師：高田 祐一)

研修3

「ワークショップ：全国遺跡報告総覧操作研修」

(講師：高田 祐一)

日 程 10：00 受付開始

10：20 オリエンテーション

10：30 開会にあて

10：35 研修1

12：00 昼食

13：20 研修2

14：30 研修3

16：00 質疑応答

16：30 研修終了



▲市町村埋蔵文化財担当職員研修会

参加者：市町村職員等23名、センター職員17名、
計40名

【埋蔵文化財担当職員研修会参加者一覧】

	名 前	振興局	所 属
講師	川畑 純		文化庁記念物課調査官
講師	高田 祐一		奈良文化財研究所研究員
1	内田 和典		北海道教育庁文化財博物館課
2	永谷 幸人		北海道教育庁文化財博物館課
3	荒山 千恵	石狩	いしかり砂丘の風資料館
4	眞坂 隆太	石狩	江別市郷土資料館
5	鈴木 将太	石狩	恵庭市郷土資料館
6	野村 祐一	渡島	函館市教育委員会
7	山田 央	渡島	七飯町歴史館
8	大谷 茂之	渡島	八雲町郷土資料館
9	木元 豊	渡島	木古内町教育委員会
10	竹田 聡	渡島	知内町郷土資料館
11	鈴木 志穂	渡島	福島町教育委員会
12	石井 淳平	桧山	厚沢部町教育委員会
13	工藤 大	桧山	せたな町教育委員会
14	中塚 風沙	後志	余市水産博物館
15	田代 雄介	胆振	むかわ町教育委員会
16	高島 孝宗	宗谷	オホーツクミュージアムえさし
17	乾 茂年	宗谷	浜頓別町教育委員会
18	林 勇介	オホーツク	湧別町教育委員会ふるさと館郷土館
19	八重柏 誠	オホーツク	美幌博物館
20	百々 千鶴	空知	深川市教育委員会
21	高橋 美鈴	日高	様似町教育委員会
22	熊崎農夫博	釧路	厚岸町海事記念館
23	石渡 一人	根室	別海町教育委員会

Ⅲ 収蔵・保管事業

1 収蔵資料

出土文化財を北海道出土文化財取扱要綱（平成13年4月11日付け教育長・出納長通知）等に則して保管し、いつでも活用できるよう管理を行い、整理作業を進めている。

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数		
1	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々4	5	140	1
2	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々5	1	1	0
3	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々4	3	152	15
4	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々5	11	74	0
5	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々6	2	13	0
6	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々7	7	42	0
7	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々4	6	365	108
8	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々5	3	50	5
9	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々6	2	16	3
10	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々7	1	4	3
11	北埋調報	7	昭和56	1981	美沢川流域の遺跡群Ⅴ	千歳市	美々8	1	91	117
12	北埋調報	8	昭和57	1982	美沢川流域の遺跡群Ⅵ	千歳市	美々8	1	5	9
13	北埋調報	9	昭和57	1982	ママチ遺跡	千歳市	ママチ	9	161	73
14	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々4	9	166	143
15	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々9	1	2	4
16	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々4	3	33	32
17	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々5	1	5	0
18	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々2	9	53	4
19	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々4	5	57	0
20	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々8	1	7	5
21	北埋調報	35	昭和61	1986	美沢川流域の遺跡群Ⅹ	千歳市	美々3	2	13	4
22	北埋調報	36	昭和61	1986	ママチ遺跡Ⅲ	千歳市	ママチ	8	84	75
23	北埋調報	44	昭和62	1987	美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ	千歳市	美々8	2	42	27
24	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々3	2	39	7
25	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々8	1	42	72
26	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々3	14	134	34
27	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々8低湿部	0	0	0
28	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々3	4	10	31
29	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々7	3	14	12
30	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8	3	37	16
31	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8低湿部	1	0	2
32	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々7	3	11	7
33	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8	2	59	72
34	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8低湿部	1	0	1
35	北埋調報	86	平成5	1993	ユカンボシC2遺跡	千歳市	ユカンボシC2	4	24	14
36	北埋調報	89	平成5	1993	美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ	千歳市	美々8	1	0	84
37	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	オサットー1	1	0	0
38	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	キウス7	4	14	13
39	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス5	9	33	12
40	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス7	1	5	7
41	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	ケネフチ8	1	5	0
42	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ2	4	20	117
43	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ14	7	31	16
44	北埋調報	100	平成7	1995	ユカンボシC9遺跡	千歳市	ユカンボシC9	3	25	33
45	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8	0	0	14
46	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8低湿部	2	168	10
47	北埋調報	103	平成7	1995	オサツ2遺跡(2)	千歳市	オサツ2	5	0	30
48	北埋調報	104	平成7	1995	キウス5遺跡(2)	千歳市	キウス5	9	89	18
49	北埋調報	105	平成7	1995	キウス7遺跡(3)	千歳市	キウス7	15	97	110
50	北埋調報	113	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅨ	千歳市	美々4	12	343	229
51	北埋調報	114	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅩ	千歳市	美々8低湿部	1	0	0
52	北埋調報	115	平成8	1996	キウス5遺跡(3)	千歳市	キウス5	17	113	254
53	北埋調報	116	平成8	1996	キウス5遺跡(4)B・C地区	千歳市	キウス5	9	24	17
54	北埋調報	117	平成8	1996	キウス7遺跡(4)	千歳市	キウス7	8	29	0
55	北埋調報	119	平成8	1996	キウス4遺跡	千歳市	キウス4	4	37	1
56	北埋調報	124	平成9	1997	キウス4遺跡(2)	千歳市	キウス4	24	377	121
57	北埋調報	125	平成9	1997	キウス5遺跡(5)A2地区	千歳市	キウス5	11	151	159
58	北埋調報	126	平成9	1997	キウス5遺跡(6)B・C地区	千歳市	キウス5	4	46	1
59	北埋調報	127	平成9	1997	キウス7遺跡(5)	千歳市	キウス7	6	16	5
60	北埋調報	128	平成9	1997	ユカンボシC15遺跡(1)	千歳市	ユカンボシC15	3	36	81
61	北埋調報	133	平成10	1998	ユカンボシC15遺跡(2)	千歳市	ユカンボシC15	14	283	63
62	北埋調報	134	平成10	1998	キウス4遺跡(3)A H K I地区	千歳市	キウス4	42	302	234
63	北埋調報	135	平成10	1998	キウス4遺跡(4)A2地区	千歳市	キウス4	5	39	14
64	北埋調報	136	平成10	1998	キウス5(7)キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス5	1	0	0
65	北埋調報	136	平成10	1998	キウス5(7)キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス7	1	1	0
66	北埋調報	138	平成11	1999	柏台1遺跡	千歳市	柏台1	26	22	0

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数	
67	北埋調報 144	平成11	1999	キウス4遺跡(5)	千歳市	キウス4	11	33	40
68	北埋調報 146	平成11	1999	ユカンボシC15遺跡(3)	千歳市	ユカンボシC15	1	46	14
69	北埋調報 147	平成11	1999	対雁2遺跡(1)	江別市	対雁2	2	42	14
70	北埋調報 148	平成11	1999	キウス4遺跡(6)	千歳市	キウス4	7	16	2
71	北埋調報 152	平成12	2000	キウス4遺跡(7)	千歳市	キウス4	18	109	45
72	北埋調報 157	平成12	2000	キウス4遺跡(8)	千歳市	キウス4	49	519	380
73	北埋調報 159	平成12	2000	ユカンボシC15遺跡(4)	千歳市	ユカンボシC15	1	1	3
74	北埋調報 160	平成12	2000	対雁2遺跡(2)	江別市	対雁2	5	32	41
75	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー1	4	14	33
76	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー2	1	5	0
77	北埋調報 174	平成13	2001	ケネフチ9遺跡	千歳市	ケネフチ9	2	10	1
78	北埋調報 176	平成13	2001	ユカンボシC15遺跡(5)	千歳市	ユカンボシC15	0	0	0
79	北埋調報 177	平成13	2001	対雁2遺跡(3)	江別市	対雁2	1	6	69
80	北埋調報 178	平成14	2002	西島松5遺跡	恵庭市	西島松5	68	218	97
81	北埋調報 180	平成14	2002	キウス4遺跡(9)	千歳市	キウス4	90	1,623	696
82	北埋調報 187	平成14	2002	キウス4遺跡(10)	千歳市	キウス4	0	0	0
83	北埋調報 188	平成14	2002	オリイカ1遺跡	千歳市	オリイカ1	2	32	2
84	北埋調報 189	平成14	2002	オリイカ2遺跡	千歳市	オリイカ2	5	17	4
85	北埋調報 192	平成14	2002	ユカンボシC15遺跡(6)	千歳市	ユカンボシC15	0	59	0
86	北埋調報 193	平成14	2002	対雁2遺跡(4)	江別市	対雁2	41	81	36
87	北埋調報 194	平成15	2003	西島松5遺跡(2)	恵庭市	西島松5	7	21	19
88	北埋調報 204	平成15	2003	対雁2遺跡(5)	江別市	対雁2	3	5	11
89	北埋調報 206	平成15	2003	オリイカ1遺跡(2)	千歳市	オリイカ1	1	2	2
90	北埋調報 207	平成15	2003	チブニー2遺跡(2)	千歳市	チブニー2	2	12	12
91	北埋調報 209	平成16	2004	西島松5遺跡(3)	恵庭市	西島松5	55	455	467
92	北埋調報 215	平成16	2004	対雁2遺跡(6)	江別市	対雁2	0	1	0
93	北埋調報 221	平成17	2005	オリイカ2遺跡(2)	千歳市	オリイカ2	23	34	10
94	北埋調報 224	平成18	2006	西島松5遺跡(4)	恵庭市	西島松5	10	27	22
95	北埋調報 225	平成17	2005	チブニー2遺跡(3)	千歳市	チブニー2	31	7	27
96	北埋調報 226	平成17	2005	対雁2遺跡(7)	江別市	対雁2	16	38	41
97	北埋調報 231	平成18	2006	対雁2遺跡(8)	江別市	対雁2	33	49	429
98	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	梅川2	3	5	6
99	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	祝梅川上田	5	9	4
100	北埋調報 240	平成18	2006	対雁2遺跡(9)	江別市	対雁2	13	14	22
101	北埋調報 248	平成20	2008	西島松3・5遺跡(5)	恵庭市	西島松5	33	486	140
102	北埋調報 251	平成19	2007	キウス5遺跡(8)	千歳市	キウス5	3	17	10
103	北埋調報 252	平成19	2007	キウス9遺跡	千歳市	キウス9	13	49	181
104	北埋調報 253	平成20	2008	梅川4遺跡(1)	千歳市	梅川4	8	20	51
105	北埋調報 255	平成19	2007	対雁2遺跡(10)	江別市	対雁2	1	2	4
106	北埋調報 260	平成21	2009	西島松5遺跡(6)	恵庭市	西島松5	39	53	11
107	北埋調報 265	平成21	2009	西島松2遺跡	恵庭市	西島松2	93	437	168
108	北埋調報 267	平成21	2009	オリイカ2遺跡(3)	千歳市	オリイカ2	3	6	53
109	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー7	3	10	3
110	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー9	8	1	0
111	北埋調報 269	平成21	2009	梅川4遺跡(2)	千歳市	梅川4	8	57	20
112	北埋調報 284	平成23	2011	キウス5遺跡(9)	千歳市	キウス5	5	22	134
113	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	祝梅川小野	31	180	81
114	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	梅川1		2	2
115	北埋調報 296	平成24	2012	対雁2遺跡(11)	江別市	対雁2	18	85	101
116	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	祝梅川小野	7		54
117	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	梅川1	1	27	3
118	北埋調報 299	平成24	2012	キウス5遺跡(10)	千歳市	キウス5	30	112	56
119	北埋調報 300	平成24	2012	祝梅川上田遺跡(2)	千歳市	祝梅川上田	5	30	13
120	北埋調報 306	平成25	2013	梅川4遺跡(3)	千歳市	梅川4	55	201	183
121	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	祝梅川小野	2	8	0
122	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	梅川1	35	108	0
123	北埋調報 323	平成27	2015	キウス3遺跡・キウス11遺跡	千歳市	キウス3	2	3	8
124	北埋調報 323	平成27	2015	キウス3遺跡・キウス11遺跡	千歳市	キウス11	13	33	36

(道教委・道埋文センター発掘調査分)					合 計	1,307	9,743	6,400
--------------------	--	--	--	--	-----	-------	-------	-------

1	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ボンオサツ	2	1	18
2	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ケネフチ5	5	42	0
3	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ15	1	14	1
4	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ16	4	44	14
5	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ18	1	1	0
6	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ボンオサツ	1	1	0
7	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	オサツ18	1	1	8
8	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ケネフチ5	5	14	2
9	保第 6	平成8	1996	オサツ15(2)	千歳市	オサツ15	5	47	7
10	保第 7	平成8	1996	オサツ16(2)	千歳市	オサツ16	13	28	8
11	保第 8	平成9	1997	オサツ15(3)	千歳市	オサツ15	6	26	4
12	保第 9	平成9	1997	オサツ16(3)	千歳市	オサツ16	2	14	0
13	保第 10	平成9	1997	ケネフチ5(3)	千歳市	ケネフチ5	11	68	23

(保護協会発掘調査分)					合 計	57	301	85
-------------	--	--	--	--	-----	----	-----	----

総 合 計						1,364	10,044	6,485
-------	--	--	--	--	--	-------	--------	-------

2 図書資料

(1) 購入図書一覧

番号	書名	編著者名	出版者
1	目の眼 2017年9月号 勾玉 日本美のはじまり	白洲信哉 編	目の眼
2	ユリイカ 2017年4月臨時増刊号 総特集 縄文 JOMON	西館一郎 編	青土社
3	日本人は大災害をどう乗り越えたのか 遺跡に刻まれた復興の歴史	文化庁 編	朝日新聞出版
4	発掘された日本列島 2017 新発見考古速報	文化庁 編	共同通信社
5	人はどのように鉄を作ってきたか 4000年の歴史と製鉄の原理	永田和宏 著	講談社
6	デジタル技術でせまる人物植輪	城倉正祥 著	吉川弘文館
7	日本先史考古学史講義 考古学者たちの人と学問	大村裕 著	六一書房
8	知られざる縄文ライフ え？貝塚ってゴミ捨て場じゃなかったんですか!?	譽田亜紀子 著	誠文堂新光社
9	ときめく縄文図鑑	譽田亜紀子 著	山と溪谷社
10	土偶のリアル 発見・発掘から蒐集・国宝誕生まで	譽田亜紀子 著	山川出版社
11	科学 2017年2月号 (Vol.87 No.2) 特集 日本人の基層 古代の環境と暮らしを再構築する	田中太郎 編	岩波書店
12	考古学エレジーの唄が聞こえる 発掘にかけた青春哀歌	澤宮優 著	東海研究教育所
13	縄文土器を読む	小林達雄 編	アム・プロモーション
14	土器編年と集落構造 (考古調査ハンドブック16)	福田健司 著	ニューサイエンス社
15	人はなぜ戦うのか 考古学からみた戦争	松木武彦 著	中央公論新社
16	文化財保存70年の歴史 明日への文化遺産	文化財保存全国協議会 編	新泉社
17	日本装身具史 ジュエリーとアクセサリーの歩み	露木宏 編・著	美術出版社
18	縄文人はなぜ死者を穴に埋めたのか 墓と子宮の考古学	大島直行 著	国書刊行会
19	シリーズ藩物語 松前藩	濱口裕介・横島公司 著	現代書館
20	新作発見！弥生絵画 人・動物・風景	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 編	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
21	よみがえる古代の港 古地形を復元する	石村智 著	吉川弘文館
22	ドラえもん社会科おもしろ攻略 日本を変えた世界の歴史 古代～中世 (ドラえもんの学習シリーズ)	浜学園 監修	小学館
23	わくわく！探検 れきはく日本の歴史 3	国立歴史民俗博物館 編	吉川弘文館
24	縄文世界へタイムワープ (歴史漫画タイムワープシリーズ)	河合敦 監修 もとじろう マンガ、 チーム・ガリレオ ストーリー	朝日新聞出版
25	日本人と動物の歴史 1 家畜	小宮輝之 著	ゆまに書房
26	日本人と動物の歴史 2 野生動物	小宮輝之 著	ゆまに書房
27	トイレの自由研究 1 起源・歴史・技術変遷編	こどもくらぶ 編	フレーベル館
28	知里幸恵とアイヌ 豊かなアイヌ文化を初めて文字で表現した天才少女 (小学館版学習まんが人物館)	知里幸恵銀のしずく記念館 監修	小学館
29	知里幸恵物語 アイヌの「物語」を命がけて伝えた人	金治直美 著	PHP研究所
30	アイヌのむかしばなし ひまなこなべ	萱野茂 文、どいかや 絵	あすなろ書房
31	石ころ採集ウォーキングガイド	渡辺一夫 著	誠文堂新光社
32	日本の石ころ標本箱 川原・海辺・山の石ころ採集ポイントがわかる	渡辺一夫 著	誠文堂新光社
33	図解でわかる ホモ・サピエンスの秘密 最新知見をもとにひも解く、おどろきの人類700万年史	インフォビジュアル研究所 著	太田出版
34	TIMELINE 地球の歴史をめぐる旅へ！	ピーター・ゴース 作	フレーベル館
35	火山列島・日本で生きぬくための30章 歴史・噴火・減災	夏 緑 著、末藤久美子 絵	童心社
36	アイヌ語地名と日本列島人が来た道	筒井功 著	河出書房新社
37	アイヌ語・恵庭の地名をたどる	地藏慶護 著、永山輩世 編	響文社
38	科学の目で見る 日本列島の地震・津波・噴火の歴史	山賀進 著	ベレ出版
39	火の科学 エネルギー・神・鉄から錬金術まで	西野順也 著	築地書館
40	もっと博物館が好きっ！ みんなと歩む芸員	四国ミュージアム研究会 編	教育出版センター
41	見る目が変わる博物館の楽しみ方 地球・生物・人類を知る	矢野興一 編・著	ベレ出版

(2) 受領刊行物一覧 (平成29年2月1日から平成29年12月31日受領分)

番号	[北海道]
	北海道教育庁 生涯学習推進局
1	アイヌ民俗文化財・ユーカーラシリーズ55 金成マツ筆録 アイヌ叙事詩 びたりと引ついた城
2	アイヌ民俗文化財・ユーカーラシリーズ56 金成マツ筆録 アイヌ叙事詩 ユーカーラ 太鼓を持つ女
3	アイヌ民俗文化財・ユーカーラシリーズ57 メノコユーカーラ;ノミの津波シラミの津波-沖の国ボンレブびとと婚約させられた
4	平成28年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗技術調査 8
	札幌市教育委員会
5	市内遺跡発掘調査報告書9 平成28年度 調査報告書
6	札幌市文化財調査報告書104 K441遺跡 第3次調査
7	札幌市文化財調査報告書105 M554遺跡
	公益財団法人 北海道文学館
8	平成27年度 年報
	株式会社 亜瑠西社 井上哲
9	読売新聞金曜朝刊連載 おでかけ体験ナビ 2月17日号
	リクルート北海道じゃらん
10	ママじゃらん北海道 2017年春夏号
11	北海道じゃらん 8月号
12	北海道じゃらん 12月号
	株式会社 あるた出版 山内 絵里
13	O.tone vol.103
	北海道大学 総合博物館
14	北海道大学総合博物館とタイ国立科学博物館の部局間協定における共同活動
15	北海道大学総合博物館ニュース 第35号
16	北海道大学総合博物館ニュース 第36号
	北海道大学 総務企画部広報課
17	LITTERAE POPULI Vol.59 / spring 2017
	北海道大学 大学院理学研究院 増田隆一
18	哺乳類の生物地理学
	一般財団法人 北海道歴史文化財団 野外博物館 北海道開拓の村
19	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより Vol.38 2017年春号
20	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより Vol.39 2017年夏号
21	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより Vol.40 2017年秋号
22	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより Vol.41 2017年冬号
	北海道札幌手稲高等学校ガイダンス部
23	平成28年度 1年次総合学習インターンシップ報告書
	札幌国際大学 縄文世界遺産研究室
24	縄文 札幌国際大学縄文世界遺産研究室 年報1 2016年度
	釧路市立博物館
25	釧路市立博物館館報 No.418 2016.9
26	釧路市立博物館館報 No.419 2017.3
	北海道立図書館
27	北の資料135 北海道立図書館所蔵 逐次刊行物目録 新聞(道内業界紙)の部 平成28年11月30日現在
	三笠市立博物館
28	三笠市立博物館年報 第34号 2015(平成27)年度
29	三笠市立博物館紀要 第19号
	千歳市教育委員会 埋蔵文化財センター
30	千歳市文化財調査報告書 42 ウサクマイB遺跡(第3次調査)
	深川市教育委員会 生涯学習スポーツ課・スポーツ係
31	深川市 ふるさと歴史めぐり
	有島記念館
32	有島記念館館報 VOL.16
	美幌博物館
33	美幌町埋蔵文化財各種開発確認調査報告書
	様似町教育委員会
34	様似山道-歴史の道活用整備事業報告書-
	ひがし大雪自然館
35	ひがし大雪自然館研究報告 第4号
	浦幌町立博物館
36	浦幌町立博物館年報 第17号
37	浦幌町立博物館紀要 第17号
38	浦幌町立博物館だより 平成29(2017)年4月号
	厚岸町海事記念館
39	厚岸町海事記念館通信 No.52
40	厚岸町海事記念館通信 No.53
41	厚岸町海事記念館通信 No.54
	[岩手]
	一戸町教育委員会教育長 古館 英彦
42	平成29年度 御所野縄文博物館 企画展図録 えっ!縄文時代にアスファルト?
	[宮城]
	仙台市富沢遺跡保存館
43	いにしへの木 林 森

	[秋田]
	秋田県立博物館
44	Museum News 秋田県立博物館ニュース No.164
45	Museum News 秋田県立博物館ニュース No.165
46	秋田県立博物館研究報告 第42号
47	秋田県立博物館 年報 平成29年度
	鹿角市教育委員会
48	特別史跡大湯環状列石 環境整備事業(第Ⅱ期～第Ⅳ期)報告書
	[福島]
	福島県教育庁 文化財課
49	福島県文化財調査報告書 第512集 福島県内遺跡分布調査報告 23
50	福島県文化財調査報告書 第513集 会津縦貫南道路遺跡調査報告書1 栗林遺跡(1次調査)
51	福島県文化財調査報告書 第514集 一般国道115号相馬福島遺跡調査報告5 福田遺跡 沼ヶ入遺跡(1次調査) 上ノ台遺跡
52	福島県文化財調査報告書 第515集 農山村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告2 五畝田・犬這遺跡
53	福島県文化財調査報告書 第516集 県道北泉小高線関連遺跡発掘調査報告2 五畝田B遺跡
54	福島県文化財調査報告書 第517集 県道広野小高線関連遺跡発掘調査報告1 南代遺跡
55	福島県文化財調査報告書 第520集 常磐自動車道遺跡調査報告73 大谷上ミノ原遺跡(5次調査)
	会津若松市教育委員会
56	会津若松市文化財調査報告書 第151号 郡山遺跡Ⅱ-総括報告書-
57	会津若松市文化財調査報告書 第152号 若松城郭内武家屋敷跡 岩田市右衛門邸跡
	猪苗代町教育委員会 生涯学習課図書歴史情報館係
58	史跡会津藩主松平家墓所保存整備事業報告書
	[埼玉]
	所沢市立埋蔵文化財調査センター
59	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第69集 市内遺跡調査報告 23 -下安松遺跡第10次調査-
60	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第70集 東原遺跡 -第1次調査- 遺物編
61	所沢市立埋蔵文化財調査センター 年報No.22 平成27年度
	桶川市教育委員会
62	平成27年度 桶川市内遺跡発掘調査報告書
63	東台Ⅰ遺跡 第2次発掘調査報告書
64	堀ノ内遺跡 第4次発掘調査報告書
65	東Ⅰ遺跡 第1次発掘調査報告書
	吉見町埋蔵文化財センター
66	吉見町埋蔵文化財調査報告書 第16集 西吉見条里遺跡Ⅲ
67	吉見町埋蔵文化財調査報告書 第17集 町内遺跡11
	[東京]
	駿台史学会
68	駿台史学 第160号
69	駿台史学 第161号
	株式会社 ファミリーマガジン代表取締役 久野 隆
70	別冊宝島2597号 最新学説で読み解く人類20万年の歩み
	株式会社 山川出版社
71	土偶界へようこそ 縄文の美の宇宙
	公益社団法人 日本文化財保護協会
72	埋蔵文化財調査要覧 平成29年度
73	公益社団法人日本文化財保護協会 紀要 第1号/飛天 平成29年会報
	港区立港郷土資料館
74	港区立 港郷土資料館 資料館だより 第78号
75	港区立 港郷土資料館 資料館だより 第79号
76	港郷土資料館館報 -34- 平成27年度版
77	研究紀要19 平成28年度
	株式会社 敬文舎 柳町 敬直
78	縄紋時代史・上 縄紋人の祖先たち
	株式会社 吉川弘文館
79	文明に抗した弥生の人びと
	株式会社 新泉社
80	倭人の祭祀考古学
	株式会社 ニューサイエンス社
81	考古調査ハンドブック 縄文文化
	國學院大學博物館
82	國學院大學博物館研究報告 第33輯
	株式会社 パスコ
83	神奈川県厚木市 愛甲御屋敷遺跡 第10地点
84	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書57 上粕屋・石倉中遺跡第3次調査
85	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書58 上粕屋・石倉中遺跡第4次調査
	大成エンジニアリング株式会社
86	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書 55 用田大河内遺跡Ⅳ
	玉川大学教育博物館
87	東京都町田市 田端環状積石遺構
88	東京都町田市 御嶽堂遺跡 発掘調査報告書

	有限会社 吾妻考古学研究所
89	横浜市中区 山手120番館遺跡 発掘調査報告書
90	神奈川県中郡大磯町 馬場台遺跡 第61地点 発掘調査報告書
91	横浜市瀬谷区 竹村原遺跡 発掘調査報告書
92	神奈川県海老名市 国分尼寺北方遺跡 第47次調査 発掘調査報告書
	[神奈川県]
	株式会社 玉川文化財研究所
93	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書 52 船久保遺跡第3次調査
94	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書 53 上粕屋・和田内遺跡第7次調査
95	神奈川を掘る II 玉川文化財研究所 研究論集 2017
	公益財団法人 かながわ考古学財団
96	公益財団法人かながわ考古学財団 年報23 平成27年度
97	研究紀要22 かながわの考古学
	神奈川県教育委員会教育局
98	神奈川県埋蔵文化財調査報告 62
99	神奈川県埋蔵文化財センター年報 28 2015(平成27)年度
100	平成28年度 かながわの遺跡展・巡回展 かながわの最初の現代人 -旧石器時代のヒトと社会-
	株式会社 アーク・フィールドワークシステム
101	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書54 桜畑遺跡第12地点
102	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書59 諏訪前A遺跡第14地点
	横浜市歴史博物館
103	横浜市歴史博物館 News No. 42
	平野幸彦/神奈川昆虫談話会
104	神奈川虫報 No.194 トムラウシの甲虫目
	国際文化財株式会社
105	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書 56 西富岡・長竹遺跡第4次調査
	大和市教育委員会
106	大和市渋谷(南部地区)土地区画整理事業地内遺跡Ⅲ 神奈川県大和市 中ノ原遺跡G地点 発掘調査報告書
107	大和市渋谷(南部地区)土地区画整理事業地内遺跡Ⅳ 神奈川県大和市 中ノ原遺跡H地点 発掘調査報告書
108	大和市渋谷(南部地区)土地区画整理事業地内遺跡Ⅴ 神奈川県大和市 中ノ原遺跡K地点 発掘調査報告書
109	大和市文化財調査報告書第92集 神奈川県大和市 相ノ原遺跡第Ⅵ地点・相ノ原遺跡第Ⅶ地点・中ノ原遺跡B地点第2次調査・中ノ原遺跡O地点・大塚戸遺跡D地点 埋蔵文化財発掘調査報告書
	[新潟県]
	新潟市文化財センター
110	鳥灘遺跡 第5次調査
111	舟戸遺跡Ⅱ 第25次調査
112	細池寺道上遺跡Ⅵ 第44次調査 本文編
113	細池寺道上遺跡Ⅵ 第44次調査 写真図版編
114	細池寺道上遺跡Ⅵ 第44次調査 図面図版編
115	新潟市文化財センター年報 第3号
116	新潟市文化財センター年報 第4号
117	平成28年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展関連講座・講演会 記録集
	敬和学園大学 新発田学研究センター
118	年報 新発田学 第八号
	農と縄文の体験実習館
119	津南町文化財調査報告書 第71輯 越那A遺跡
	刈羽村教育委員会
120	刈羽村埋蔵文化財調査報告書 第5集 西谷遺跡Ⅱ
	[富山県]
	富山県埋蔵文化財センター
121	開所40年記念特別展 遺跡保護のあゆみ-富山県40年間の発掘調査で解き明かされてきた歴史の数々-
122	埋文とやま vol.138
123	埋文とやま vol.139
124	埋文とやま vol.140
	[福井県]
	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
125	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書 14 宅地等現状変更に伴う発掘調査
126	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書 15 第124次調査
127	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 46 平成27年度環境整備事業概報
	坂井市教育委員会
128	坂井市埋蔵文化財調査報告書 長崎遺跡
	[山梨県]
	山梨県立考古博物館
129	山梨県立 考古博物館だより No.84
130	第35回特別展 ひつぎのヒミツ~棺から読み解く古墳時代~
131	山梨県立考古博物館だより No.83
	韮崎市教育委員会
132	山梨県韮崎市 史跡 新府城跡 環境整備事業にともなう発掘調査報告書Ⅴ
133	山梨県韮崎市埋蔵文化財発掘調査報告書 平成28年度 韮崎市内発掘調査報告書
	南アルプス市教育委員会
134	山梨県南アルプス市 文化財年報 平成28年度
135	南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック 第2集 ver 4 堤の原風景

136	南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック 第3集 ver2 大地の記録
137	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第44集 山梨県南アルプス市 東出口遺跡(第3地点)
138	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第51集 山梨県南アルプス市 平成27年度埋蔵文化財試掘調査報告書
	公益財団法人 山梨文化財研究所
139	都留市埋蔵文化財調査報告 第17集 山梨県都留市 三ノ側遺跡
140	甲府市文化財調査報告 92 西耕地B遺跡
141	笛吹市文化財調査報告書 第32集 山梨県笛吹市 馬場遺跡
142	笛吹市文化財調査報告書 第33集 山梨県笛吹市 竹居古墳群
	[長野]
	茅野市尖石縄文考古館
143	茅野市縄文ガイドブック
	[岐阜]
	養老町教育委員会
144	養老町埋蔵文化財調査報告書 第11集 養老町埋蔵文化財試掘確認立会調査報告書
	[静岡]
	静岡市立登呂博物館
145	登呂遺跡出土品重要文化財指定記念 特別展 弥生×登呂
146	2017 静岡市立登呂博物館 企画展 東海土器五十三次展
	[三重]
	多気町教育委員会
147	丹生水銀鉱採掘跡分布調査報告
	三重県埋蔵文化財センター
148	三重県埋蔵文化財調査報告 323-5 北山A遺跡(第2・3・5・6次)発掘調査報告
149	三重県埋蔵文化財調査報告 370 中坪遺跡(第1次)発掘調査報告
150	三重県埋蔵文化財調査報告 371 市場遺跡発掘調査報告
151	三重県埋蔵文化財調査報告 372 大久保遺跡(第3次)発掘調査報告
152	三重県埋蔵文化財調査報告 373 野添大辻遺跡(第4次)発掘調査報告
153	三重県埋蔵文化財調査報告 374 林上新田遺跡発掘調査報告
154	近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT~亀山西JCT)建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ
155	平成28年度 三重県埋蔵文化財年報
	[滋賀]
	滋賀県教育委員会事務局 文化財保護課
156	守山川広域河川改修事業に伴う発掘調査報告書 金森西遺跡
157	土山浦生近江八幡線道路改築工事に伴う発掘調査報告書 蛭子田遺跡
158	滋賀竜王工業団地造成工事に伴う発掘調査報告書 堤ヶ谷遺跡
159	滋賀県内遺跡発掘調査報告書 平成27年度埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業(県内遺跡発掘調査等)
	大津市教育委員会 文化財保護課
160	大津市埋蔵文化財調査報告書 (80) 穴太遺跡(南山田地区)発掘調査報告書
161	大津市埋蔵文化財調査報告書 (81) 近江国府跡・管池遺跡発掘調査報告書報告書
162	大津市埋蔵文化財調査報告書 (83) 真野廃寺発掘調査報告書Ⅱ
163	大津市埋蔵文化財調査報告書 (96) 日吉神宮寺遺跡発掘調査報告書
164	大津市埋蔵文化財調査報告書 (97) 中村遺跡発掘調査報告書
165	大津市埋蔵文化財調査報告書 (98) 南滋賀遺跡(北浮田地区)発掘調査報告書
166	大津市埋蔵文化財調査報告書 (101) 南滋賀遺跡(砂子田地区)発掘調査報告書
167	大津市埋蔵文化財調査報告書 (102) 滋賀里遺跡(小嶋田地区)発掘調査報告書
168	大津市埋蔵文化財調査報告書 (103) 穴太遺跡・穴太銅込古墳群発掘調査報告書
169	大津市埋蔵文化財調査年報 -平成27(2015)年度-
	大津市埋蔵文化財調査センター
170	大津市埋蔵文化財調査報告書 (110) 滋賀里遺跡発掘調査報告書Ⅵ
	守山市立埋蔵文化財センター
171	守山市文化財調査報告書 平成27年度国庫補助対象遺跡発掘調査報告書
172	下之郷遺跡関連発掘調査報告書Ⅱ
173	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅸ 守山市文化財調査報告書
174	下之郷遺跡確認調査報告書Ⅺ -第95次調査報告書-
175	下之郷遺跡関連発掘調査報告書Ⅲ -第23次調査報告書-
176	下之郷遺跡発掘調査報告書 総括編
	公益財団法人 栗東市体育協会
177	栗東市埋蔵文化財調査報告 2015(平成27)年度 年報
178	平成28年度 特別展示 悠久の時のながれ -湖南の縄文1万年-
179	栗東市 話題の発掘調査 はっくつ2016
180	栗東発掘再発見 vol.7 古墳時代祭祀場の出土品 滑石の玉
	東近江市教育委員会 東近江市埋蔵文化財センター
181	東近江市埋蔵文化財調査報告書 第30集 市内遺跡の調査
182	東近江市埋蔵文化財調査報告書 第31集 中沢遺跡(25次)・小脇遺跡
183	東近江市の遺跡シリーズ17 能登川地区の中世城館
184	東近江市の遺跡シリーズ18 伊庭御殿遺跡と朝鮮人街道
185	東近江市の遺跡シリーズ19 布引掩体群
186	東近江市の遺跡シリーズ20 宮井廃寺と辻岡山瓦窯跡
187	東近江市の遺跡シリーズ21 箕作山東麓の遺跡
	[京都]
	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所
188	気候適応史プロジェクト成果報告書2 高分解能古機構学と歴史・考古学の連携による機構変動に強い社会システムの探索

189	気候適応史プロジェクト Newsletter No.14
	京都府教育庁指導部
190	京都府埋蔵文化財調査報告書 平成28年度
	宇治田原町教育委員会
191	京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書 第3集 禪定寺城跡(付. 粽谷古墳)発掘調査報告書
	[大阪]
	堺市文化観光局 文化部 文化財課分室
192	堺市埋蔵文化財調査概要報告 第157冊 真福寺遺跡(SPJ-4)発掘調査概要報告 -美原区真福寺所在-
193	堺市埋蔵文化財調査概要報告 第158冊 太井遺跡発掘調査概要報告
194	長山古墳発掘調査報告書 百舌鳥古墳群の調査9
195	百舌鳥古墳群の調査10
196	四ツ池遺跡 その2 昭和48年度 発掘調査報告書
197	平成27年度 国庫補助事業発掘調査報告書
198	第五回百舌鳥古墳群講演会記録集 新たな百舌鳥古墳群像をめぐって
	公益財団法人 大阪府文化財センター
199	公益財団法人 大阪府文化財センター年報 平成26年度
200	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第267集 摂津市 明和池遺跡4
201	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第268集 柏原市 大泉郡糸里遺跡3・山ノ井遺跡
202	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第269集 大阪市 大阪城跡7
203	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第270集 吹田市 吹田操車場遺跡12
204	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第271集 和泉市 伯太藩陣屋跡・信太千塚古墳群2
205	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第272集/門真市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集 門真市 西三荘遺跡
206	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第273集/藤井寺市文化財報告書 第39集/ 藤井寺市 津堂遺跡
207	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第274集 吹田市 吹田操車場遺跡13
208	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第275集 柏原市 船橋遺跡5
209	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第276集 高槻市 井尻遺跡2
210	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第277集 吹田市 中ノ坪遺跡
211	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第278集 枚方市 招堤北代遺跡
212	公益財団法人 大阪府文化財センター年報 平成27年度
213	大阪文化財研究 研究紀要 第48号
214	大阪文化財研究 研究紀要 第49号
215	大阪文化財研究 研究紀要 第50号
	[兵庫]
	姫路市教育委員会
216	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第42集 豆田遺跡
217	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第43集 姫路城城下町跡-姫路城跡第338次発掘調査報告書-
218	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第44集 姫路城城下町跡-姫路城跡第343次発掘調査報告書-
219	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第45集 姫路城城下町跡-姫路城跡第349次発掘調査報告書-
220	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第46集 姫路城城下町跡-姫路城跡第351次発掘調査報告書-
221	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第47集 播磨国分寺跡発掘調査報告書
222	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第48集 姫路城城下町跡-姫路城跡第353次発掘調査報告書-
223	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第49集 姫路城城下町跡-姫路城跡第354次発掘調査報告書-
224	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第50集 姫路城城下町跡-姫路城跡第356次発掘調査報告書-
225	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第51集 豆田遺跡発掘調査報告書
226	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第52集 丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書
227	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第53集 丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書
228	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第54集 姫路城城下町跡-姫路城跡第366次発掘調査報告書-
229	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第55集 豆田遺跡発掘調査報告書
230	家島諸島の考古学
	たつの市立埋蔵文化財センター
231	たつの市立埋蔵文化財センター図録14 特別展 新宮宮内遺跡の時代
	[和歌山]
	公益財団法人 和歌山県埋蔵文化財センター
232	公益財団法人 和歌山県文化財センター年報 2016
233	吉原遺跡
234	中飯降遺跡
235	寺内古墳群、相方遺跡
236	根来寺遺跡、山口古墳群
237	平井遺跡、平井II遺跡
238	平成29年度 地宝のひびき -和歌山県内文化財調査報告会資料集-
	[鳥取]
	鳥取県埋蔵文化財センター
239	弥生の港湾集落 青谷上寺地遺跡
240	調査研究紀要8
241	とっとり弥生の王国 2017 Spring 特集 倭人の食卓
	琴浦町教育委員会
242	琴浦町埋蔵文化財調査報告書 第13集 鳥取藩台場跡 赤崎台場跡発掘調査報告書
243	琴浦町埋蔵文化財調査報告書 第14集 鳥取県東伯郡琴浦町 町内遺跡発掘調査報告書(笠見第3遺跡、別所22号墳)
244	琴浦町埋蔵文化財調査報告書 第16集 鳥取県東伯郡琴浦町 別所22号墳発掘調査報告書
245	琴浦町埋蔵文化財調査報告書 第17集 鳥取県東伯郡琴浦町 町内遺跡発掘調査報告書(別所第4遺跡)

	[鳥根]
	鳥根県教育庁 埋蔵文化財調査センター
246	鳥根県の埋蔵文化財情報誌 ドキ土器まいぶん No.62
	浜田市教育委員会
247	平成28年度 浜田市内遺跡発掘調査報告書
	隠岐の島町教育委員会
248	隠岐の島町埋蔵文化財調査報告 2 久見高丸遺跡
	[岡山]
	総社市教育委員会
249	総社市埋蔵文化財調査報告26 牛塚古墳群
250	総社市埋蔵文化財調査年報26 平成27年度
	[広島]
	公益財団法人 広島県教育事業団 埋蔵文化財調査室
251	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告 第76集 狐川1号遺跡・福原2号遺跡・福原3号遺跡
252	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第77集 国道313号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 御領遺跡(第7次調査2013)
	三原市教育委員会
253	三原市文化財調査報告書 第18集 史跡 小早川氏城跡(三原城跡) 史跡整備にかかる通り丁濠端保存整備事業報告書
	広島県立歴史博物館
254	守屋壽コレクションが迫る近世日本の新たな異文化交流像
255	広島県立歴史博物館研究紀要 第19号
256	草戸千軒町遺跡調査研究報告12 草戸千軒町遺跡漆器関係資料2
	[山口]
	山口市教育委員会
257	史跡大内氏遺跡附凌雲寺跡保存修理事業報告書3 史跡大内氏遺跡附凌雲寺跡 「館跡」第1期整備事業報告書
258	山口市埋蔵文化財調査報告 第118集 大内氏関連町並遺跡10 -第9・29次調査-
259	山口市埋蔵文化財調査報告 第119集 下東遺跡3
260	山口市文化財年報10 平成27(2015)年度
	[高知]
	高知県教育委員会
261	高知県埋蔵文化財年報 13
262	文化財こうち 第3号
	[福岡]
	筑紫野市教育委員会
263	筑紫野市文化財調査報告書 第111集 旧九州鉄道城山三連橋梁
264	筑紫野市文化財調査報告書 第112集 堀池遺跡 第3・5・6次発掘調査
265	筑紫野市文化財調査報告書 第113集 原口遺跡 第2次・第3次発掘調査
	[佐賀]
	佐賀県教育庁 文化財課
266	佐賀県文化財調査報告書 第213集 佐賀県の中近世城跡緊急分布調査報告書V 佐賀県の中近世城館 第5集 各説編4
	[宮崎]
	宮崎県埋蔵文化財センター
267	宮崎県埋蔵文化財センター年報 第21号 平成29年度
	[鹿児島]
	鹿児島県立埋蔵文化財センター
268	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第72号
269	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第73号
270	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第74号
	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
271	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター 要覧 平成29年度
272	かごしまの遺跡 第13号
273	かごしまの遺跡 第14号
	瀬戸内町教育委員会
274	瀬戸内町文化財調査報告書 第6集 瀬戸内町内の遺跡2

Ⅳ 普及・啓発事業

1 展示公開

(1) 常設展示「掘り出された北の歴史」

展示にあたっては、国（文化庁）・函館市・七飯町・北斗市・今金町・木古内町・余市町・夕張市・長沼町・遠軽町・福島町の各教育委員会に、展示品借用についての協力を得た。また、企画展示との関係から、展示室とホールを併用して展示を行っている。

〔千歳市ママチ遺跡出土土面展示〕

国指定重要文化財の「土面」（国保有、昭和63年6月6日指定）を常設展示している。「土面」は、縄文時代晩期終末のもので、昭和61年に千歳市ママチ遺跡から出土した。土面としては最も北方から出土したものである。

〔遺跡調査と保護活用〕

北海道の遺跡分布、遺跡の調査や整理作業の実際、遺物の分析・保存処理の方法などについて展示・解説している。

〔石の道具〕

石は人類が最初に利用した素材の一つである。旧石器時代の石の道具は、破片の接合から高度な技術で製作されたことが明らかになっている。遠軽町（旧白滝村）白滝遺跡群、千歳市柏台1遺跡、今金町ピリカ遺跡（国指定史跡）、木古内町新道4遺跡出土の石器、接合資料などを展示している。

また、縄文時代には用途に応じて適した石材を選び、様々な形の石器が作られた。その使用方法を図と復元模型でわかりやすく示している。

〔木の道具〕

木の道具は、通常の遺跡では腐ってしまい残らないが、実際の生活の中では各所に使われていた。そのため、低湿性遺跡など腐食しにくい状況で出土した木の道具は、当事の人々の生活の様子を大変良く伝えてくれる。千歳市美々8遺跡低湿部の擦文文化期・アイヌ文化期の遺物のほか、ユカンボシC15遺跡の板綴舟、キウス4遺跡の縄文時代後期の脚付き容器などを展示している。展示品は保存処理後の遺物である。千歳市美々8遺跡低湿部出土品は、平成17年6月9日国の重要文化財に



▲常設展示

指定された。その一部を常設展示している。また、美々8遺跡の「美々ムラ」復元模型を置いている。

〔金属の道具〕

金属の道具は、人類が新しく手にしたものの一つである。刀・刀子・鍋等は交易品として北海道に入ってきたものが多く、これら道具類を手に入れるための交易が、北海道社会を変容させる一つの要因となった。金属製品も腐食しやすい材質であり、展示品は保存処理を行っている。

〔土の道具〕

粘土を成形し火で焼き上げた土器は、人類が最初に手に入れた火にかけられる容器である。土器の使用により、食材の利用範囲が大きく拡大して、縄文時代の生活の安定がもたらされたと考えられている。土器には自由な造形ができる粘土を使用しているため、時代とともに文様や形が様々な変化しており、時には機能を超越した、変わった形態や美しさをかもし出すものがある。道指定重要文化財の複製品なども展示している。また、擦文文化期には紡錘車・土錘など土器以外の土製生活用具が新たに加わった様子も紹介している。

このほか、本物の土器片に触れ、重さや質感などを確認することができるハンズオン展示も行っている。

〔こころの道具〕

「装いところ」：身を飾った「装い」（装身具）には、ヒスイ製勾玉などの各種玉、垂飾、珠状耳飾、土製の耳栓などがあり、当時の人々のおしゃれどころや精神生活の一端をみせてくれる。

常設展示点数一覧

展 示 場 所 ・ コ ー ナ ー		遺物点数	パネル・レプリカなど	合計点数	
ホール・展示回廊		17	65	82	
常設展示室	受付・導入部分	4	20	24	
	「遺跡調査と保護活用」部分	遺跡調査	5	72	77
		遺物の保存と分析	1	133	134
	「石の道具」部分	旧石器時代の石器	143	13	156
		縄文時代の石器	119	15	134
	「木の道具」部分	縄文時代の木製品	6	17	23
		擦文・アイヌ文化期の木製品	19	50	69
	「金属の道具」部分		12	2	14
	「骨の道具」部分		2	3	5
	「土の道具」部分		279	46	325
	「こころの道具」部分	装いとこころ	453	4	457
		動物とひと	13	8	21
「キウスの縄文ムラ」部分		59	8	67	
「新しい時代へ」		17	2	19	
屋外	エントランスひろば	0	1	1	
	中庭	0	1,820	1,820	
合 計		1,149	2,279	3,428	

また、墓の副葬品は当時の人々の死者に向けられた「こころ」の一面をのぞかせてくれる。特に縄文時代では、子供の足形を取った足形付き土版、死者の再生を願い供えられたであろう妊婦の土偶、重要な儀式に用いられたであろう石棒など、希少な遺物が副葬されている。

「動物とひと」：動物意匠の土器、動物形石製品などは、人と動物とのふれあいを感じさせる遺物がある。表現された動物たちに、何を感じ、何を求めているのか、当時の人々の自然と向き合う生活の一端を考えさせられる。また、国指定重要文化財千歳市美々4遺跡出土動物形土製品の複製品も展示している。

「キウスの縄文村」

千歳市キウス4遺跡の発掘調査から、周堤墓、盛土遺構、住居跡などをジオラマで復元した。また、合成樹脂で剥ぎ取った盛土遺構土層断面を展示している。盛土遺構の出土遺物には、祭祀に使われたと考えられる赤彩の土器、特殊な形の土器や土製品、玉類、土偶などがある。

「ビデオコーナー」

遺跡についてわかりやすく解説した『ビビちゃんとかろう博士の遺跡ってなーに』『ビビちゃんとかろう博士の発掘体験』『ビビちゃんとかろう博士の縄文生活体験』などを常時上映している。

「体験コーナー」

火起し体験コーナー：きりもみ式、ひもぎり式、弓ぎり式、まいぎり式による火おこし体験ができる。

土器コーナー：ミニチュア土器づくりや土器拓本体験ができる。観察用に煮炊きに使った復元土器を展示している。

石器コーナー：すり石・石皿を使った堅果類や穀物の擦り潰し体験、滑石を使った石製品づくりを行っている。観察用に石器の材料となる石材見本を展示している。

(2) 企画展示

ア、「北の縄文—縄文耳飾りの世界—展」

展示期間：7月8日（土）～10月1日（日）

目 的：道内各地の縄文文化を体感し、耳飾りづくりなどの体験を通して北海道の縄文文化への関心を高め、より理解を深めることを目的とする。

展示場所：常設展示室、体験コーナー

展示内容

縄文探訪と縄文工房の二つのテーマを通して、北海道の縄文文化を分かりやすく紹介する。

1. 縄文探訪

【縄文耳飾りの世界】（常設展示室）

縄文時代の耳飾りの変遷、製作技法の説明などを通して縄文人の精神世界を紹介する。



▲北の縄文 縄文耳飾りの世界

- ①縄文の耳飾りとは
 - ②日本の耳飾りの歴史（縄文時代・古墳時代・近代）
 - ③石の耳飾り
 - ・縄文耳飾りの源流、玦状耳飾
 - ・玦状耳飾の形態変遷
 - ・玦状耳飾は誰がつけたのか
 - ・玦状耳飾の製作技法
 - ④土の耳飾り
 - ・石から土への転換 土製玦状耳飾
 - ・耳飾りの新潮流 耳栓
 - ・大きいことは偉いのか？ 大型化する耳飾り
 - ・多様なデザイン誕生のわけ
 - ・成長する耳飾り
 - ・スタンプ形土製品は耳飾りか？
- 展示遺跡（括弧内は所蔵・保管施設）
 釧路市 北斗遺跡（釧路市博物館）



▲縄文工房

- 浦幌町 新吉野台遺跡（浦幌町教育委員会）
共栄B遺跡（浦幌町教育委員会）
- 芽室町 小林遺跡（芽室町教育委員会）
- 旭川市 緑町1遺跡（旭川市博物館）
- 江別市 吉井の沢1遺跡
（北海道立埋蔵文化財センター）
- 千歳市 美々4遺跡
（千歳市教育委員会・
北海道立埋蔵文化財センター）
美々5遺跡
（北海道立埋蔵文化財センター）
美々7遺跡
（北海道立埋蔵文化財センター）
- キウス4遺跡
（北海道立埋蔵文化財センター）
キウス5遺跡
（北海道立埋蔵文化財センター）
- 恵庭市 柏木B遺跡（恵庭市教育委員会）
西島松5遺跡
（北海道立埋蔵文化財センター）
- 苫小牧市 美沢4遺跡（苫小牧市教育委員会）
美沢11遺跡（苫小牧市教育委員会）
柏原5遺跡（苫小牧市教育委員会）
- 乙部町 元和遺跡（乙部町教育委員会）
- 寿都町 寿都3遺跡（寿都町教育委員会）
- 函館市 八木A遺跡（函館市教育委員会）
- 福島町 館崎遺跡（福島町教育委員会）
- 松前町 東山遺跡（松前町教育委員会）



▲北海道遺跡百選10

2. 縄文工房

【縄文文化を体験してみよう】

(ホール・体験コーナー)

勾玉作りや実際の遺物を使用した拓本体験などを通して縄文文化を体感する。参加者は入館時に配布するポイント（10ポイント）内で自由にメニューを選び、体験することができる。また、特別展示内に縄文工房で利用できるポイントの「ポイントゲットクイズ」を設置し、展示資料にまつわるクイズに回答することで、自発的・積極的に展示を観察した上で、体験を多く行える工夫をした。

- ・滑石を使用した勾玉や球状耳飾をはじめとするアクセサリづくり。製作の困難さや使われた石材の希少性を伝え、当時の装飾品の貴重さを感じる体験ができる。
- ・粘土を使用した耳栓、ミニチュア土器、土偶づくり。土器のつくり方や土偶の信仰について知識と体験を得ることができる。
- ・鹿角を使用したペーパーナイフづくり。角の堅さやしなやかさ、切れ味などを体験し、骨角器の利便性を体験できる。
- ・土器や石器、土層を図案とした砂絵づくり。土器や石器を身近に感じてもらい、復元土器には接合部、石器には剥離面があるなどの観察するヒントを伝える。
- ・編布づくり。縄文時代にも衣類や容器などに編み布の技術が用いられたことを体験により伝える。

[展示企画担当] 坂本 尚史

イ、北海道遺跡百選10

ーシブノツナイと北の古代ー展

展示期間：12月2日(土)～平成30年2月25日(日)

目的：北海道出土の希少な遺物を取り上げ、分かりやすく紹介することで、埋蔵文化財への関心を高め、より理解を深めることを目的とする。

「遺跡との出会い」をテーマに北海道の代表的な遺跡を探る「北海道遺跡百選」の10回目は、重要遺跡確認調査を実施した道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡を取り上げ、さらに遺跡が主に形成された時代である擦文文化期の世界に焦点を当て

た。また、北海道教育委員会が世界遺産登録に向けて推進している「北海道東部の竪穴住居跡群」の調査についても紹介した。

擦文文化の展示は「集落」、「生業」、「交流・交易」、「葬制」の4つのテーマに分け、多角的に擦文文化期の世界を概観できる様に工夫した。特に貴重な資料として、「交易・交流」では余市町大川遺跡の資料を借用し、道内最古段階の文字資料（線刻文字付き土器）、律令国家との接点を示す資料（銚帯金具）を展示した。また「葬制」では恵庭市西島松5遺跡の土坑墓副葬品である蕨手刀・直刀を展示した。

このほか「生業」では擦文文化のモノの使い方を、図解や製作復元の手法を用いて分かりやすく解説した。

展示場所：常設展示室

展示内容

シブノツナイ竪穴住居群
窪みで残る竪穴住居群
北の古代～擦文文化の世界～

- ・擦文文化とは
- ・擦文土器
- ・擦文文化の集落
- ・擦文文化の生業
- ・交易と交流
- ・擦文文化の葬制

展示遺跡（括弧内は所蔵・保管施設）

湧別町 シブノツナイ竪穴住居群

（湧別町教育委員会）

川西オホーツク遺跡

（湧別町教育委員会）

湧別町内（湧別町教育委員会）

余市町 大川遺跡（余市町教育委員会）

東中学校校庭（余市町教育委員会）

恵庭市 西島松5遺跡（恵庭市郷土資料館）

西島松5遺跡

（北海道立埋蔵文化財センター）

西島松2遺跡

（北海道立埋蔵文化財センター）

千歳市

美々8遺跡（北海道立埋蔵文化財センター）

オサツ 2 遺跡（北海道立埋蔵文化財センター）
キウス 5 遺跡（北海道立埋蔵文化財センター）
キウス 9 遺跡（北海道立埋蔵文化財センター）
祝梅川上田遺跡（北海道立埋蔵文化財センター）
チプニー 1 遺跡（北海道立埋蔵文化財センター）
チプニー 2 遺跡（北海道立埋蔵文化財センター）
ユカンボシ C15 遺跡

（北海道立埋蔵文化財センター）

厚真町 富里 1 遺跡

（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）

〔展示企画担当〕 坂本 尚史



▲平成28年度発掘調査成果展

ウ、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成28年度発掘調査成果展

展示期間：平成29年 4 月 1 日（土）～ 5 月 28 日（日）

目 的：公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成28年に行った発掘調査の成果を紹介する。

展示場所：ホール、常設展示室

展示内容

出土遺物や写真、解説パネルで遺跡調査の成果を紹介する。

【遺物とパネル等で紹介】（常設展示室会場）

〔道南〕

木古内町 札苅 7 遺跡

縄文時代後期～晩期 出土遺物

木古内町 幸連 5 遺跡

縄文時代中期～後期 盛土遺構出土遺物

〔道東・道北〕

根室市 別当賀一番沢川遺跡

縄文時代中期～後期 復元土器・石器

根室市 温根沼 3 遺跡

縄文時代早期後半 復元土器・石器

〔道央〕

厚真町 オニキシベ 3 遺跡

縄文時代後期初頭 竪穴住居跡出土石器群

厚真町 上幌内 4 遺跡

縄文時代早期 復元土器

擦文文化期 鉄器・礫

厚真町 厚幌 2 遺跡

縄文時代前期 石皿・北海道式石冠

厚真町 富里 1 遺跡

続縄文文化期 北大式土器

擦文文化期 復元土器

千歳市 根志越 5 遺跡

アイヌ文化期 漁具（枝材集中・保存処理済み）

【パネル・写真で紹介】（ホール会場）

〔道南〕

知内町 湯の里 2 遺跡、木古内町 泉沢 6 遺跡・幸連 4 遺跡・釜谷 10 遺跡

〔道東・道北〕

下川町 上名寄 8 遺跡、根室市 幌茂尻 1 遺跡、

湧別町 シブノツナイ 竪穴住居群

〔道央〕

厚真町 上幌内 5 遺跡・オコッコ 1 遺跡・幌内 7 遺跡・豊沢 5 遺跡

〔展示企画担当〕（公財）北海道埋蔵文化財センター調査部及び坂本 尚史

エ、世界遺産をめざす北の縄文展

会 期：通年（4 月 1 日～平成30年 3 月 31 日）

目 的：北海道は北東北 3 県と連携して「北の縄文文化回廊づくり」や遺跡群の世界文化遺産登録へ向けての取り組みを行っている。公益財団法人北海道埋蔵文化財センターはこれに連携して、世界遺産登録をめざす北海道・北東北 3 県の縄文遺跡群について展示を行い、広く道民や道外からの観光客に情報発信をする。これにより、北海道の歴史的風土の理解を図るとともに、世界文化遺産登録推進の取り組みへの関心を高める。



▲世界遺産をめざす北の縄文展

展示場所：ホール

展示内容

〔常 設〕

「開催にあたって」「世界遺産登録をめざして」「資産を構成する18遺跡と関係14市町の位置」など。

〔展示遺跡〕

北海道：キウス周堤墓群、北黄金貝塚、入江・高砂貝塚、鷺ノ木遺跡、大船遺跡、垣ノ島遺跡
青森県：三内丸山遺跡、小牧野遺跡、是川石器時代遺跡、長七谷地貝塚、亀ヶ岡石器時代遺跡、田小屋野貝塚、二ツ森貝塚、大平山元Ⅰ遺跡、大森勝山遺跡

岩手県：御所野遺跡

秋田県：大湯環状列石、伊勢堂岱遺跡など

*展示遺跡・展示物品は随時更新する。また、各道県の動向の紹介、イベントなどの案内を行う。

2 資料の特別利用等

(1) 特別利用

番号	利用者	利用目的	利用期日・期間	利用資料名
1	沙流川歴史館 森岡 健治	閲覧・撮影	5月14日	千歳市美々4遺跡出土クマ意匠のある資料など
2	東北大学文学部考古学研究室 青木 要祐	閲覧・撮影	6月27・29日	千歳市オルイカ2遺跡出土資料・祝梅川上田遺跡出土旧石器資料
3	石橋 孝夫	閲覧・撮影	7月11日	千歳市美々8遺跡出土資料・ユカンボシC15遺跡出土木製品資料
4	高倉 純	閲覧	9月26日	千歳市キウス5遺跡出土旧石器資料
5	坂口 隆	閲覧・撮影	11月2日	恵庭市西島松5遺跡出土土器資料・千歳市美々4遺跡出土土器・キウス4遺跡出土木製品資料
6	熊木俊朗・鈴木克彦	閲覧・撮影	11月8日	恵庭市西島松5遺跡・西島松2遺跡出土コハク玉
7	NHK札幌放送局 放送部 番組制作 田中 淳	閲覧・撮影	11月16日	千歳市美々8遺跡出土木製品マレク台・金属製品マレク・動物遺体サケ・キウス4遺跡出土動物遺体サケ
8	金沢大学先端科学・イノベーション推進機構 宮田 佳樹	分析試料 サンプリング	11月30日・12月1日	江別市対雁2遺跡出土土器
9	金沢大学先端科学・イノベーション推進機構 宮田 佳樹	閲覧・撮影・ 分析試料サン プリング	平成30年1月10日	江別市対雁2遺跡出土土器
10	吉本 忍	閲覧・撮影	平成30年1月16日	恵庭市西島松5遺跡出土繊維付着金属製品
11	国立歴史民俗博物館 工藤雄一郎	閲覧・撮影	平成30年 2月8日・9日	千歳市柏台1遺跡出土搔器、石皿、顔料等、千歳市オサツ16遺跡搔器、千歳市祝梅川上田遺跡出土細石刃核・細石刃
12	平泉文化遺産センター 鈴木 博之	閲覧・撮影	平成30年2月28日	千歳市美々8遺跡出土擦文土器

番号	利用者	利用目的	利用期日・期間	利用資料名
13	北海道大学大学院医学研究院 助教 中澤 祐一	閲覧・撮影	平成30年 3月12日・13日	千歳市柏台1遺跡出土資料
14	首都大学東京大学院人文科学 研究科助教 岩瀬 彬	閲覧・撮影	平成30年 3月12日から14日	千歳市柏台1遺跡出土資料
15	東北大学文学部考古学研究室 青木 要祐	閲覧・撮影	平成30年 3月16日から19日	千歳市柏台1遺跡出土資料・千歳市オリカ 2遺跡出土資料
16	北海道教育庁生涯学習推進局 文化財・博物館課 赤井 文人	閲覧・撮影	平成30年 3月16日	千歳市柏台1遺跡出土資料
17	北海道大学大学院医学研究院 助教 中澤 祐一	閲覧・撮影	平成30年 3月22日・23日	千歳市柏台1遺跡出土資料

(2) 模写品等の刊行等の承認

番号	申請者	使用目的	使用方法	利用資料名・点数	申請書	承認書
1	国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩	国立歴史民俗博物館総合展示 第1展示室グラフィックパネル 等を使用	複写	千歳市ユカンボシC15遺跡出土 深鉢土器写真ほか 写真デジタル データ 計2点	3月31日	4月10日
2	株式会社 吉川弘文館 編集部長 堤 崇志	寺前直人『(仮)文明に抗した 倭人たち』に使用	複写	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ 計1点	4月11日	4月14日
3	株式会社 クリエイティブネクサス 藤元 章弘	日本テレビ「所さんの目がテ ン！」に使用	複写	小樽市忍路土場遺跡出土火鑽棒 写真ほか 写真デジタルデータ 計2点	4月8日	4月19日
4	NPO法人 三内丸山縄文発信の会 理事長 遠藤 勝裕	青森県ホームページに使用	複写	千歳市キウス1号周堤墓写真 写真デジタルデータ 計1点	4月21日	4月27日
5	株式会社ファミリーマガジン 代表取締役 久野 隆	『別冊宝島 最新学説で読み 解く人類20万年の歩み』に使用	複写	千歳市オリカ2遺跡出土細石 刃写真ほか 写真デジタルデータ 計3点	5月2日	5月10日
6	(株)あるた出版 山内 絵里	『O.tone』 vol.103に使用	撮影	千歳市美々4遺跡出土動物形土 製品写真ほか 写真撮影 計4 点	5月9日	5月11日
7	北の縄文道民会議 代表 堀 達也	世界文化遺産登録推進事業に 使用	複写	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 ほか 写真デジタルデータ 計3 点	5月29日	6月1日
8	株式会社 山川出版社 代表取締役社長 野澤 伸平	『アイヌの歴史のテキストブ ック』に使用	複写	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 ほか 写真デジタルデータ 計2 点	6月9日	6月14日
9	仙台市富沢遺跡保存館 館長 金森 安孝	平成29年度特別企画展『いに しえの木 林 森』展示、図 録、関連印刷物製作に使用	複写	千歳市ユカンボシC15遺跡埋没 林検出状況写真ほか 写真デジ タルデータ 計4点	6月14日	6月21日
10	胆振総合振興局保健環境部 環境生活課長 村上 宏	『北の縄文パネル展』展示パ ネルに使用	複写	豊浦町高岡1遺跡包含層出土土 器写真ほか 写真デジタルデータ 計7点	6月16日	6月22日
11	株式会社 新泉社 代表取締役 石垣 雅設	小林青樹著『倭人の祭祀考古 学』に使用	複写	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 写真デジタルデータ 計1点	6月22日	6月28日
12	茅野市尖石縄文考古館 館長 守矢 昌文	『茅野市縄文ガイドブック』 改訂増刷に使用	複写	福島町館崎遺跡出土石鏃写真 写真デジタルデータ 計1点	7月16日	7月27日
13	札幌国際大学縄文世界遺産 研究室長 越田 賢一郎	展覧会「十勝の縄文文化」に 使用	複写	函館市中野B遺跡竪穴住居群調 査写真ほか 写真デジタルデータ 計10点	8月3日	8月8日
14	平取町教育委員会 教育長 庄野 剛	沙流川歴史館特別展「クマの 意匠展」ポスターに使用	撮影	千歳市美々4遺跡出土クマ意匠 土製品ほか 写真撮影 計5点	8月8日	8月15日
15	社会医療法人康和会 札幌しらかば病院理事長 加藤 康夫	一般社団法人札幌医師会会報 「札幌通信11月号(No603)」 に使用	複写	北斗市押上1遺跡調査状況写真 ほか写真デジタルデータ 計2点	8月28日	9月1日
16	恵庭市郷土資料館長 澁谷 敏明	特別公開2017 道央の漆塗り 櫛展に使用	複写	小樽市忍路土場遺跡調査状況写 真ほか写真デジタルデータ 計12 点	9月1日	9月6日

番号	申請者	使用目的	使用方法	利用資料名・点数	申請書	承認書
17	小学館 相賀 昌宏	『小学8年生』第四号に使用	複写	千歳市美々4遺跡動物形土製品 写真写真デジタルデータ 計1点	9月5日	9月13日
18	様似町教育委員会 教育長 荒木 輝明	特別展『様似のむかしむかし 展-遺跡から見る様似の歴史』 展示資料に使用	複写	千歳市キウス5遺跡出土縄文式 土器写真写真デジタルデータ 計1点	9月6日	9月13日
19	(株)ニューサイエンス社 代表取締役 福田 久子	『考古調査ハンドブック 縄 文文化』に使用	複写	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 写真デジタルデータ 計1点	9月22日	10月2日
20	青森県環境生活部県民生活 文化課長 福井 弘信	『青森県史 通史編1 原始 古代 中世』に使用	複写	恵庭市西島松5遺跡出土方頭太 刀写真ほか写真デジタルデータ 計4点	9月30日	10月10日
21	奈良文化財研究所 都城発掘調査部 庄田 慎矢	『野外考古学』30号に使用	複写	遠軽町上白滝8遺跡出土接合資 料写真ほか写真デジタルデータ 計4点	10月6日	10月13日
22	株式会社 敬文舎 柳町 敬直	安斎正人『縄紋時代史』1に 使用	複写	遠軽町白滝遺跡群航空写真写真 デジタルデータ 計1点	10月12日	10月18日
23	縄文世界遺産推進室長 木村 尚司	世界文化遺産登録推進事業に 使用	複写	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 ほか写真デジタルデータ 計6点	10月30日	11月6日
24	一戸町教育委員会教育長 古館 英彦	御所野縄文博物館企画展パネル および展示図録に使用	複写	恵庭市西島松5遺跡出土アスフ ルト写真ほか 写真デジタル データ 計5点	11月2日	11月9日
25	国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩	国立歴史民俗博物館総合展示 第1展示室グラフィックパネル 等に使用	複写	遠軽町上白滝8遺跡1区sb-95 調査状況写真 写真デジタル データ 計1点	12月1日	12月12日
26	株式会社ファミリーマガジン 代表取締役 久野 隆	宝島社『日本史パノラマ大地 図帳』に使用	複写	千歳市オリイカ2遺跡出土細石 刃写真ほか写真デジタルデータ 計2点	11月22日	11月29日
27	せたな町教育委員会 学芸員 工藤 大	せたな町生涯学習講座に使用	複写	せたな町生測2遺跡報告書掲載 写真写真デジタルデータ 計15 点	11月30日	12月7日
28	今金町教育委員会 教育長 田中 俊一	ピリカ旧石器文化館内タッチ パネル学習機器に使用	複写	千歳市柏台1遺跡出土細石刃と 石核の接合資料写真ほか写真デ ジタルデータ 計7点	12月12日	12月15日
29	島根県古代出雲歴史博物館 館長 今岡 充	企画展「隠岐の黒曜石」展示 及び図録に使用	複写	遠軽町上白滝8遺跡調査状況写 真ほか写真デジタルデータ 計3 点	12月13日	12月18日
30	五十嵐 ジャンヌ	レゼジー先史学研究協会2017 年度年報誌に使用	複写	千歳市柏台1遺跡出土コハク玉 写真ほか写真デジタルデータ 計 2点	12月22日	1月9日
31	国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩	国立歴史民俗博物館総合展示 第1展示室グラフィックパネル 等に使用	複写	千歳市キウス5遺跡C地区柱穴 列調査状況写真写真デジタル データ 計1点	12月25日	1月9日
32	株式会社 雄山閣 宮田 哲男	『別冊季刊考古学』27号に使用	複写	恵庭市西島松5遺跡土坑墓P 508と副葬品写真ほかデジタル データ 計8点	2月5日	2月14日
33	縄文世界遺産推進室長 木村 尚司	『Let's 北の縄文』に使用	複写	八雲町野田生1遺跡出土赤彩土 器写真デジタルデータほか 計22 点	2月14日	2月19日
34	国立歴史民俗博物館 館長 久留島 浩	国立歴史民俗博物館総合展示 第1展示室グラフィックパネル 等に使用	複写	函館市中野B遺跡調査状況写真 デジタルデータ 計1点	2月13日	2月19日
35	テレコムスタッフ株式会社 代表取締役 寺島 高幸	B S-T B Sの歴史番組「諸説 あり！」番組に使用	複写	遠軽町上白滝8遺跡平成8年度 調査状況写真デジタルデータ 計1点	2月21日	2月28日
36	根室市歴史と自然の資料館 館長 餅崎 幸寛	根室市ホームページに使用	複写	根室市トーサムボロ湖周辺堅穴群 出土オホツク式土器写真デジタル データ 計4点	2月24日	3月2日
37	南牧村教育委員会 教育長 井出 英夫	『野辺山高原旧石器時代ガイ ドブック』に使用	複写	千歳市柏台1遺跡出土コハク玉 写真 写真デジタルデータ 計 1点	3月7日	3月19日
38	株式会社プラネットライツ 代表取締役 浅香 芳博	『今こそ知りたいアイヌ』サ ンエイ新書に使用	複写	恵庭市西島松5遺跡土坑墓出土 品写真ほか 写真デジタルデータ 計2点	3月15日	3月22日

番号	申請者	使用目的	使用方法	利用資料名・点数	申請書	承認書
39	株式会社KADOKAWA 文芸・ノンフィクション局 第四編集部 部長 立木 成芳	井口直司『縄文土器・土偶』 (角川ソフィア文庫) に使用	複写	函館市桔梗2遺跡出土シヤチ形 土製品写真 写真デジタルデー タ 計1点	3月15日	3月22日
40	青森県教育庁文化財保護課 課長 増田 仁	『三内丸山遺跡44 総括報告 書 第2分冊』に使用	複写	共和町リヤムナイ3遺跡石斧出土 状況写真ほか 写真デジタルデー タ 計2点	3月12日	3月23日

(3) 資料の貸出

番号	申請者	利用目的	使用期間	利用資料名・点数	申請書	承認書
1	縄文世界遺産推進室長 木村 尚司	縄文文化普及啓 発事業(北の縄 文パネル展)に 利用	5月19日～24日	土偶(複製 函館市著保内野遺跡 出土) 1点	4月24日	4月28日
2	北の縄文道民会議 代表 堀 達也	「縄文夏祭り」 での展示	6月27日～7月14日	動物形土製品(複製千歳市美々4 遺跡出土) 1点、土面(複製 千歳 市ママチ遺跡出土) 1点、計2点	5月19日	5月25日
3	北の縄文道民会議 代表 堀 達也	パリ日本文化会 館での「北の縄 文国宝土偶展」 展示会での縄文 文化啓発事業に 利用	6月20日～7月12日	土偶(複製 函館市著保内野遺跡 出土) 1点	6月16日	6月19日
4	平取町教育委員会 教育長 庄野 剛	沙流川歴史館特 別展「クマの意 匠展」に展示	8月1日～12月8日	千歳市美々4遺跡出土資料1点、 キウス4遺跡出土資料1点、江別 市対雁2遺跡出土資料1点、クマ 形石製品(複製 芦別市滝里安井 遺跡出土) 1点、クマ形木製品(複 製 羅臼町松法川北岸遺跡出土) 1点、計5点	7月12日	7月21日
5	恵庭市郷土資料館長 澁谷 敏明	特別公開2017 道央の漆塗り櫛 展に展示	9月29日～10月10日	千歳市キウス5遺跡出土漆塗櫛 1点	9月7日	9月13日
6	縄文世界遺産推進室長 木村 尚司	「縄文雪祭り」 での展示	平成30年1月23日 ～2月16日	土偶(複製 木古内町新道4遺跡 出土) 1点、動物形土製品(複製 千歳市美々4遺跡出土) 1点、土 面(複製 千歳市ママチ遺跡出 土) 1点、千歳市キウス4遺跡出 土異形石器計3点、計6点	10月30日	11月8日
7	九州国立博物館長 島谷 弘幸	九州国立博物館 交流展示「海の 路、アジアの路」 の陳列に使用	平成30年4月1日 ～平成31年3月31日	千歳市キウス4遺跡出土土器5 点、千歳市ママチ遺跡出土異形土 器3点、千歳市キウス5遺跡出土 土器1点、千歳市オサツ2遺跡出 土土器4点	1月23日	2月6日
8	縄文世界遺産推進室長 木村 尚司	「赤れんが縄文 回廊」展示のた め	平成30年3月25日か ら平成31年3月24日 まで(365日間)	土偶(複製 函館市著保内野遺跡 出土)ほか 計22点	3月1日	3月8日
9	国立科学博物館長 林 良博	国立科学博物館 の常設展示に使用	平成30年4月1日 ～平成31年3月31日	千歳市柏台1遺跡出土顔料ほか3 点、千歳市オリカ2遺跡出土細 石刃核ほか 6点	3月16日	3月20日

3 講座等の開催

(1) 一般道民対象の講座

ア、「人類学・考古学を知る・学ぶ2」

手形・足形の考古学

日時：7月22日（土） 13：30～15：30

講師：第1調査部長 長沼 孝

参加者：94名（うち道民カレッジ生36名）

内容：縄文人は何故、子供の足形・手形を残したのか。縄文人の子供へのまなざしとところについて、わかりやすく解説した。



▲人類学・考古学を知る・学ぶ2 長沼講師

イ、「人類学・考古学を知る・学ぶ4」

縄文人に挑戦—アオトラ石斧の製作—

日時：10月28日（土） 13：30～15：30

講師：普及活用課 主査 坂本 尚史

参加者：18名（うち道民カレッジ生11名）

内容：旧石器時代に誕生し現在まで使用される斧は、人類の歴史のなかで重要な位置づけを持つ道具である。特に縄文時代の北海道では道央部か



▲人類学・考古学を知る・学ぶ4 坂本講師

ら産出したアオトラ石（緑色岩）を使用した石斧製作が盛んに行われ、道外への流通も確認されている。

今回は平取町額平川で採取したアオトラ石を用いて、縄文人の石斧製作技術（擦切り技法・敲打調整・剥離調整・研磨）を忠実に再現した石斧づくりに挑戦した。

ウ、「人類学・考古学を知る・学ぶ5」

縄文のkokozoumushi?—圧痕・レプリカの考古学—

日時：11月25日（土） 13：30～15：30

講師：熊本大学教授 小畑 弘己

参加者：70名（うち道民カレッジ生23名）

内容：土器に残る小さな凹み。シリコンでその形を復元し、電子顕微鏡で観察する。土器の再発掘ともいえる検証からみえてきた縄文人とダイズ、ヒエ、エゴマ、kokozoumushiとの関係について、わかりやすく解説した。



▲人類学・考古学を知る・学ぶ5 小畑講師

エ、「人類学・考古学を知る・学ぶ6」

オホーツク人の骨を知る・学ぶ

日時：平成30年1月20日（土） 13：30～15：30

講師：琉球大学教授 石田 肇

参加者：100名（うち道民カレッジ生25名）

内容：大陸から北海道にやってきて、アイヌ文化の成立に大きく関わったオホーツク人。その特徴とルーツを北方諸民族の人類学的特徴とともに、わかりやすく解説した。



▲人類学・考古学を知る・学ぶ6 石田講師

オ、「人類学・考古学を知る・学ぶ7」

考古学からみたアイヌ文化

日時：平成30年3月17日（土） 13：30～15：30

講師：所長 越田賢一郎

参加者：135名（うち道民カレッジ生30名）

内容：北の大地に生まれ、展開し、今に生きるアイヌ文化。その物質文化を考古学の視点から解説した。



▲人類学・考古学を知る・学ぶ7 越田講師

(2) 児童生徒学生対象の体験型講座

ア、「こども考古学教室」

親子ガラス玉づくり教室

日時：6月3日（土） 13：30～15：30

講師：装飾タイル製作家 宮崎 幸子

普及活用課長 田口 尚

参加者：15名

内容：親子（児童・生徒とその保護者）を対象としたガラス玉の歴史と作り方をいろいろと学びガラス玉づくりを体験する。



▲親子ガラス玉づくり教室

イ、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊（第1次）土器

日時：7月29日（土） 13：30～15：30

講師：普及活用課長 田口 尚

参加者：5名

内容：実物のハンズオン体験やビデオマイクログ装置による土器表面や割れ口の観察、ミニチュア土器づくりを通じて、北海道内から出土した土器について、楽しく学ぶプログラム。



▲まいぶん遺跡探検隊（第1次）土器

ウ、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊（第2次）石器

日時：8月5日（土） 13：30～16：00

講師：普及活用課 主査 坂本 尚史

参加者：17名

内容：収蔵庫を見学後、展示室で石器に関して参加者各人が探検手帳を用い調べ学習を行った。実物資料のハンズオン体験では資料の扱い方、観察の仕方を学習した。製作体験は、企画展示にあ



▲まいぶん遺跡探検隊（第2次）石器

わせ、瑛状耳飾を作成し、製作の困難さや製作時の破損・修復について学習した。

エ、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊（第3次）火おこし

日時：平成30年1月6日（土）13：30～16：00

講師：普及活用課長 田口 尚

参加者：28名

内容：火おこしに関する歴史を学びながらタイズに挑戦した後、ひもきり、弓きりなどを使って火起こし体験に取り組んだ。



▲まいぶん遺跡探検隊（第3次）火おこし

オ、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊（第4次）発掘体験

日時：平成30年1月13日（土）13：30～15：30

講師：普及活用課 主査 倉橋 直孝

参加者：10名

内容：地層砂絵で新千歳空港用地内の土層につ



▲まいぶん遺跡探検隊（第4次）発掘体験

いて学んだあと、展示室にあるキウス4遺跡と美沢15遺跡の土層剥ぎ取り展示を観察。研修室でレベルによる高さの測定、平板測量による図面作成について学習した後、コンテナを利用した疑似遺跡の発掘体験を行った。

(3) 児童生徒対象の出前講座

ア、事業目的

完全学校週5日制に対応して、土曜日や日曜日の休日に、市町村教育委員会との連携の下で、子供たちにとってわかりやすく地域の歴史や文化を説明するとともに、それらを大切にすることを養い、体験学習を通して豊かな人間性や多様な個性を育むことを目的とする。

これまで、道立センター内で行ってきた考古学教室を、全道の市町村に出向いて地元教育委員会と連携を図って実施することにより、市町村独自の事業実施の契機となるよう努めている。

イ、事業内容

①地域の遺跡を学ぶ—実物に触れてみよう—

地元市町村出土の遺物や北海道立埋蔵文化財センター保管の土器・石器類に触れてもらいながら、地元市町村の埋蔵文化財についての説明を行う。また、埋蔵文化財センター紹介のビデオ『遺跡ってなーに』を鑑賞する。

②体験学習

子供たちの歴史・文化に対する関心を高めるために、縄文時代等にアクセサリーとして使用されていた「勾玉」を、滑石を材料にして、製作する。



▲出前講座 美唄市

また、時間の許す限り、石器（黒曜石破片）での紙切り、火起こしなどの体験を行う。

46ページの表のとおり8か所で実施した。

(4) 教育連携講座

児童会、小学校、中学校、大学、教育委員会等を対象とする体験型教育連携講座を、46ページの表の通り11回実施した。

火起こし・勾玉作り・ミニチュア土器づくり・拓本体験学習、収蔵庫・展示収蔵庫・展示室などの見学、展示室探検クイズラリーなどを内容とする。

また、北海道教育委員会からの依頼により、平成25年度から「道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修」（夏・冬季休業期間分、教職員対象）を実施している。

(5) 一般道民対象の講演会

ア、春季講演会

「人類学と考古学を知る・学ぶ1」

「日本人はどこから来たのか？ー海を渡った祖先たちー」

日 時：5月20日（土） 13：30～15：30

講 師：国立科学博物館人類研究部人類史研究グループ長 海部 陽介

参加者：161名（うち道民カレッジ生41名）

内 容：古くて新しい話題、「日本人はどこから来たか？」。人類学研究の最前線に立つ講師が、自ら取り組む、南の海を舞台とした実験プロジェクトなどを紹介していただいた。



▲春季講演会 海部講師

イ、秋季講演会

「人類学と考古学を知る・学ぶ3」

「近年のホモサピエンスと縄文人研究の動向からーユーラシアへの拡散を中心にー」

日 時：9月30日（土） 13：30～15：30

講 師：札幌医科大学教授 松村 博文

参加者：133名（うち道民カレッジ生47名）

内 容：アフリカを出たホモサピエンス。ユーラシアの北へ、南へ拡散し、日本列島へ。海外調査経験豊富な講師が、近年の研究動向や調査成果を踏まえ、その動向や縄文人研究を紹介していただいた。



▲秋季講演会 松村講師

(6) 近隣市町村等対象の出前講座

近隣市町村教育委員会・学校等から出前講座の依頼があった場合には、その都度検討して、対応できる場合には実施している。今年度は47ページの表のとおり6か所で実施した。



▲出前講座 三笠藤幼稚園

(7) 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
平成28年度発掘調査報告会

日時：4月15日（土） 13：30～16：30

参加者：75名（うち道民カレッジ生37名）

内容：平成28年度に（公財）北海道埋蔵文化財センターが調査を行った遺跡のうち①～④の発掘成果の報告と、特別展示「（公財）北海道埋蔵文化財センター平成28年度発掘調査成果展」会場での報告者による展示解説を行った。

- | | |
|---------------------|-------|
| ①厚真町オニキシベ3遺跡・上幌内5遺跡 | 愛場 和人 |
| ②木古内町札苅7遺跡 | 芝田 直人 |
| ③木古内町幸連4遺跡 | 鈴木 宏行 |
| ④根室市別当賀一番沢川遺跡 | 広田 良成 |
- 企画：（公財）北海道埋蔵文化財センター調査部
及び坂本 尚史



▲平成28年度発掘調査報告会

4 協力

(1) 講師派遣

大学の依頼により47ページの表のとおり6か所に講師を派遣した。

(2) 職員派遣

協力機関への会議などに47ページの表のとおり3件職員を派遣した。

(3) 職場体験

江別市教育委員会の依頼によりキャリア教育（中学生の職場体験）を47ページの表のとおり6件受け入れた。

(4) 博物館実習

各大学の依頼により博物館実習の学生を47ページの表のとおり3件受け入れた。

5 周辺施設・大学との連携

江別市から札幌市北東部に所在する各文化施設や大学と、以下の連携を行っている。各連携参加状況等については44ページの表のとおり。

(1) 文京台地区道立教育3施設連携

江別市文京台地区にある北海道立図書館、北海道立教育研究所、北海道立埋蔵文化財センターが、今後さらに地域に根ざし、開かれた「施設」を目指すため、平成15年から連携事業を行っている。今年度も、7月以降に実施する事業を紹介するリーフレットを合同で作成し、回覧した。

(2) かるちやるnet

新札幌から江別市南西には社会教育的文化施設が集中し、地域に暮らす人たちにとって恵まれた環境にある。各文化施設は地域文化の向上や知的財産の継承など重要な役目を担っているが、財政の悪化により運営・事業の見直しを迫られ、取り巻く情勢は厳しさを増している。このような状況を踏まえ、各施設が協力・連携を強化し、意見交換・連携事業・広報事業などの実施を協議する場として結成された。

平成21年に北海道がイオン北海道(株)との包括的連携協定を締結する際に北海道開拓記念館が企業側に提案した「道の教育・文化施設の広報活動への協力・協働事業」を基礎とする。

ア、てくてく、ぺったん！

かるちやるスタンプラリー！ 春休み編

日 時：3月25日(土)～4月9日(日)
場 所：札幌市青少年科学館(記念品交換施設)、サンピアザ水族館、北海道開拓の村・北海道博物館・自然ふれあい交流館・北海道立図書館・江別市セラミックアートセンター・江別市郷土資料館(記念品交換施設)・北海道立埋蔵文化財センター(記念品交換施設)(会員館のうち、野幌森林公園と教育研究所を除く)
内 容：各施設でスタンプをもらい、全てのスタンプが揃ったら記念品が貰える。記念品の交換場所は札幌市青少年科学館、江別市郷土資料館、北海道立埋蔵文化財センターとした。

イ、「発見・体験 文化の夏

一遊ぼう！学ぼう！あつべつ・えべつー

日 時：8月11日(金・祝) 10:00～21:00
場 所：サンピアザ光の広場
内 容：各施設の紹介パネルを展示して、広報資料を配布した。

体験・展示コーナー・ワークショップでは、昔の遊び体験、毛皮タッチング体験、大型絵本・仕掛け絵本・なつかしの雑誌などを常設した。時間限定ワークショップとしては、サイエンスショー、



▲一遊ぼう！学ぼう！あつべつ・えべつー

砂絵体験、アンモナイトレプリカづくり、紙とんぼづくり、かに釣り体験、デジタル宇宙旅行などを行った。

また、クイズラリーやアンケートを実施し、クイズ回答者にはもれなく記念品をプレゼントした。

ウ、てくてく、ぺったん！

かるちやるスタンプラリー！

日 時：7月15日(土)～8月20日(日)
場 所：札幌市青少年科学館(記念品交換施設)、サンピアザ水族館、北海道開拓の村・北海道博物館・自然ふれあい交流館・北海道立図書館・江別市セラミックアートセンター・江別市郷土資料館(記念品交換施設)・北海道立埋蔵文化財センター(記念品交換施設)(会員館のうち、野幌森林公園と教育研究所を除く)
内 容：各施設でスタンプをもらい、全てのスタンプが揃ったら記念品が貰える。記念品の交換場所は札幌市青少年科学館、江別市郷土資料館、北海道立埋蔵文化財センターとした。

エ、かるちやるガーデン2017

日 時：12月17日(日) 10:00～15:00
場 所：札幌市中央区北5条西5丁目7
sapporo55ビル

総合案内；

sapporo55ビル インナーガーデン(1階)
受付・ワークショップなど会場；

北海道教育大学サテライト教室(4階)
内 容：北海道教育大学学校・地域教育支援セン



▲かるちやるガーデン2017

ターとかるちやるnetが協働して博学連携のもと実施した文化施設PR・普及イベント。

多数の来訪者が期待される札幌市中心部のsapporo55ビルを会場として、1階のインナーガーデンで各施設の概要PR・詳細な情報提供を行い、4階の北海道教育大学サテライト教室では、①稲わらでつくるプチしめ縄②砂絵であそぼう！③紙トンボをつくろう！④魚の透明標本を観察しよう！⑤体験！デジタル宇宙シアター⑥科学絵本のおもしろさ⑦初公開!?「昔の北海道を見てみよう！」などの体験型広報ワークショップを行った。

(3) のっぽろ11ネット

今年度は活動していない。

6 協賛事業への取り組み

教員のための博物館の日in札幌

日 時：7月27日（木） 9：30～16：30

会 場：北海道開拓の村ビジターセンター
内 容：博物館ひろばにおいて北海道立埋蔵文化財センターの普及啓発事業についての紹介パネルを展示し、広報資料を配布した。



▲教員のための博物館の日in札幌

周辺施設との連携参加一覧

名 称	文京台地区道立教育3施設連携	かるちやるnet	のっぽろ11ネット
江別市郷土資料館		○	
江別市スポーツ振興財団			○
野幌自治会			○
北海道情報大学			○
野幌中学校			○
江別市セラミックアートセンター		○	○
野幌総合運動公園事務所			○
酪農学園大学			○
北海道立図書館	○	○	
北海道立教育研究所	○	○	
札幌学院大学			○
北翔大学			○
北海道立埋蔵文化財センター	○	○	○
自然ふれあい交流館		○	
道立自然公園野幌森林公園		○	
北海道博物館		○	
北海道開拓の村		○	○
サンピアザ水族館		○	
札幌市青少年科学館		○	

7 利用状況

(1) 入館者数一覧

月別入館者数

	開館日数			大人(男性)			大人(女性)			子供			合計		
	28年度	29年度	前年度比(%)	28年度	29年度	前年度比(%)	28年度	29年度	前年度比(%)	28年度	29年度	前年度比(%)	28年度	29年度	前年度比(%)
4月	26	26	100.0	486	460	94.7	383	362	94.5	234	321	137.2	1103	1143	103.6
5月	26	25	96.2	484	550	113.6	309	360	116.5	537	495	92.2	1330	1405	105.6
6月	26	26	100.0	590	656	111.2	487	611	125.5	450	288	64.0	1527	1555	101.8
7月	28	27	96.4	658	460	69.9	503	406	80.7	528	299	56.6	1689	1165	69.0
8月	26	27	103.8	442	487	110.2	388	493	127.1	427	531	124.4	1257	1511	120.2
9月	27	26	96.3	383	476	124.3	339	374	110.3	266	263	98.9	988	1113	112.7
10月	24	26	108.3	311	345	110.9	266	274	103.0	181	200	110.5	758	819	108.0
11月	24	25	104.2	371	342	92.2	195	196	100.5	154	210	136.4	720	748	103.9
12月	21	21	100.0	248	227	91.5	129	115	89.1	54	91	168.5	431	433	100.5
1月	23	22	95.7	277	316	114.1	281	204	72.6	205	163	79.5	763	683	89.5
2月	23	23	100.0	205	236	115.1	102	157	153.9	54	73	135.2	361	466	129.1
3月	23	23	100.0	375	409	109.1	278	238	85.6	213	196	92.0	866	843	97.3
合計	297	297	100.0	4830	4555	94.3	3660	3552	97.0	3303	2934	88.8	11793	11041	93.6

平成11から29年度までの月別入館者数

①【平成11から17年度までの月別入館者数】

	11	12	13	14	15	16	17	①計
4月		758	656	545	538	831	595	3923
5月		709	453	656	1081	964	716	4579
6月		652	621	808	1299	1054	858	5292
7月		527	303	633	922	828	1124	4337
8月		673	388	662	789	747	851	4110
9月		544	374	631	762	1020	727	4058
10月		650	302	649	991	1027	773	4392
11月	1988	467	659	445	836	669	618	5682
12月	687	286	326	669	505	330	318	3121
1月	593	218	411	287	229	189	240	2167
2月	366	129	240	212	270	187	189	1593
3月	469	221	362	297	331	296	366	2342
合計	4103	5834	5095	6494	8553	8142	7375	45596

②【平成18から29年度までの月別入館者数】

	指定管理者1期				指定管理者2期				指定管理者3期				②合計	①②合計
	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29		
4月	830	669	904	1192	799	920	1244	1201	1150	969	1103	1143	12124	16047
5月	1440	1228	1403	1978	1755	1223	1127	1359	967	991	1330	1405	16206	20785
6月	768	1099	1150	934	1597	1277	1143	1360	1207	1345	1527	1555	14962	20254
7月	1138	1425	1126	1537	1117	1278	1243	1590	1296	1100	1689	1165	15704	20041
8月	1238	1517	1267	1370	982	1230	1727	1809	1291	1709	1257	1511	16908	21018
9月	790	907	768	1169	995	1110	1018	1242	825	1178	988	1113	12103	16161
10月	945	939	1267	1120	1214	839	1019	1382	903	910	758	819	12115	16507
11月	669	627	653	745	794	539	736	714	686	911	720	748	8542	14224
12月	232	536	488	577	370	423	426	411	344	513	431	433	5184	8305
1月	462	633	488	516	344	379	551	603	413	685	763	683	6520	8687
2月	226	329	450	374	268	286	405	524	283	542	361	466	4514	6107
3月	329	528	549	472	511	696	654	622	381	706	866	843	7157	9499
合計	9067	10437	10513	11984	10746	10200	11293	12817	9746	11559	11793	11884	132039	177635
期合計	42001				45056				44982					

は各月で最多(平成11年度を除く)

特別展示期間中の入館者数

展 示 タ イ ト ル	期 間	入館者数
(公財)北海道埋蔵文化財センター平成28年度発掘調査成果展	4月1日(土)～5月28日(日)	2518
「北の縄文―縄文耳飾りの世界―」展	7月8日(土)～10月1日(日)	3606
北海道遺跡百選10 「シブノツナイと北の古代」展	12月2日(土)～平成30年2月25日(日)	1536
特別展示期間中の入館者数合計		7660
世界遺産をめざす北の縄文展	4月1日(土)～平成30年3月31日(土)	11884

一般道民対象の講座 連続講座・講演会「人類学と考古学を知る・学ぶ」シリーズとして実施

事 業 名	実 施 日	参加人数
「人類学と考古学を知る・学ぶ2」「手形・足形の考古学」	7月22日(土)	94
「人類学と考古学を知る・学ぶ4」「縄文人に挑戦」	10月28日(土)	18
「人類学と考古学を知る・学ぶ5」「縄文のクソゾウムシ?―圧痕・レプリカ法の考古学」	11月25日(土)	70
「人類学と考古学を知る・学ぶ6」「オホーツク人の骨を知る・学ぶ」	1月20日(土)	100
「人類学と考古学を知る・学ぶ7」「考古学からみたアイヌ文化」	3月17日(土)	135
計		417

児童生徒学生対象の体験型講座

年	月	日	曜	事 業 名	参加人数
平成29年	6	3	土	「親子ガラス玉づくり教室」	15
	7	29	土	「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第1次)	5
	8	5	土	「夏休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第2次)	17
平成30年	1	6	土	「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第3次)	28
	1	13	土	「冬休み自由研究教室」まいぶん遺跡探検隊(第4次)	10
計					75

児童生徒対象の出前講座

市町村	実 施 場 所	実 施 日	担 当	備 考	参加人数
1 豊 頃 町	豊頃町える夢館	6月17日(土)	倉橋	平成29年度青少年体験学習事業「第2回える夢キッズクラブ/考古学教室&アイヌの伝統食体験」として実施	15
2 福 島 町	福島町吉岡総合センター	6月17日(土)	坂本	「福島学ジュニア」として実施	16
3 上 川 町	上川町郷土資料館	7月30日(土)	田口	「考古学出前講座」として実施	13
4 蘭 越 町	蘭越町ふるさとの丘リンリン公園・蘭越町民センターらぶちゃんホール	8月1日(火)、 8月2日(水)	田口	平成29年度「ちびっこキャンプ」	35
5 苫 前 町	苫前町郷土資料館	8月8日(火)	坂本・柳瀬	平成29年度公民館講座「考古学講座」	20
6 大 樹 町	大樹町生涯学習センター	8月2日(水)	倉橋	平成29年度「第3回あつまれ!大樹っ子」として実施	22
7 東神楽町	東神楽町総合福祉会館	9月9日(土)	倉橋	平成29年度「第3回東神楽町チャレンジクラブ」として実施	33
8 美 唄 市	ピバオイの里プラザ	1月10日(水)	柳瀬・倉橋	平成29年度「キッズ・アートスクール」として実施	30
計					184

教育連携講座

年	月	日	曜	事 業 名	参加人数
平成29年	6	4	日	北翔大学短期大学部太田・菊地先生選択理科社会講義利用(展示室探検ラリー・資料ハンズオン・地層砂絵)	33
	7	9	日	北翔大学短期大学部太田・菊地先生理科社会指導法講義利用(資料ハンズオン・勾玉づくり)	17
	7	13	木	札幌学院大学国際交流センター留学生講義利用(施設見学・勾玉作り)	28
	8	4	金	平成29年度北海道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修(夏季休業期間分・教職員対象)(施設見学・バックヤードツアー)	2
	9	3	土	江別市郷土資料館「再発見江別」展示室見学	43
	10	4	水	北翔大学佐々木先生地域学Ⅱ講義利用(施設見学)	15
	11	15	水	北翔大学小杉先生博物館情報・メディア論講義利用(バックヤードツアー・展示室見学)	6
	11	29	水	北翔大学小杉先生博物館情報・メディア論講義利用(ミニ勾玉づくり)	6
	12	6	水	北翔大学小杉先生博物館情報・メディア論講義利用(玉づくり)	5
平成30年	1	11	木	平成29年度北海道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修(冬季休業期間分・教職員対象)(施設見学・バックヤードツアー)	1
	1	25	土	札幌学院大学国際交流センター留学生講義利用(施設見学・勾玉作り)	65
計					171

講演会

	年	月	日	曜	事業名	参加人数
1	平成29年	5	20	土	春季講演会「人類学と考古学を知る・学ぶ1」 「日本人はどこから来たのか?—海を渡った祖先たち—」	161
2		9	30	土	秋季講演会「人類学と考古学を知る・学ぶ3」 「近年のホモサピエンスと縄文人研究の動向から—ユーラシアへの拡散を中心に—」	133
計						294

報告会

	年	月	日	曜	事業名	参加人数
1	平成29年	4	15	土	公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成28年度発掘調査報告会	75
計						75

近隣市町村対象の出前講座

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	参加人数
1	札幌市	札幌市資料館	6月23日(金)	倉橋	「勾玉づくり講座」	27
2	江別市	北海道立図書館	7月30日(日)	坂本	道立図書館まつり「埋文ワークショップ オリジナル土偶をつくろう!」	30
3	江別市	江別市役所隣接地・市民会館	8月26日(土)	倉橋	江別青年会議所主催「まるごと江別 2017」	71
4	三笠市	三笠藤幼稚園	9月26日(火)	倉橋	ミニ勾玉づくり	7
5	江別市	対雁小学校	10月24日(火)	倉橋	4年3組親子レク「勾玉づくり講座」	50
6	江別市	対雁小学校	11月7日(火)	倉橋	4年2組親子レク「勾玉づくり講座」	49
計						234

講師派遣

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	参加人数
1	札幌市	北海道教育大学札幌校	7月15日(土)	倉橋	「あいの里土曜講座」	50
2	函館市	函館市北方民族資料館	10月21日(土)	田口	ミュージアム・トーク2017	40
3	江別市	札幌学院大学	12月1日(金)	倉橋	教養科目「人文地理学概説」	53
4	江別市	札幌学院大学	12月15日(金)	倉橋	教養科目「人文地理学概説」	56
5	札幌市	北海道教育大学札幌校	12月22日(金)	倉橋	教養科目「子どもと社会教育」	4
6	札幌市	北海道教育大学札幌校	12月28日(木)	倉橋	教養科目「子どもと社会教育」	4
計						207

職員派遣

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	参加人数
1	札幌市	国立アイヌ民族博物館設立準備室	9月28日(水)	田口	国立アイヌ民族博物館ネットワーク準備会(第2回)	12
2	札幌市	国立アイヌ民族博物館設立準備室	11月30日(木)	田口	国立アイヌ民族博物館ネットワーク準備会(第3回)	10
3	白老町	一般財団法人アイヌ民族博物館体験学習室	2月22日(木)	田口	国立アイヌ民族博物館ネットワーク準備会(第4回)	12
計						34

職場体験

	学校名	受入期間	備考	受入人数
1	江別市立江陽中学校	8月29日(火)～31日(木)	受付・展示に関する作業、体験学習での教材づくり	3
2	江別市立野幌中学校	10月17日(火)～19日(木)		3
3	江別市立江別第三中学校	10月18日(水)～20日(金)		3
4	江別市立江別第一中学校	10月24日(火)～26日(木)		3
5	江別市立江別第二中学校	11月7日(火)～9日(木)		2
6	江別市立大麻中学校	11月14日(火)～16日(木)		3
計				17

博物館実習

	学校名	受入期間	備考	受入人数
1	札幌学院大学	7月19日(水)～27日(木)・8月4日(金)・8日(火)・9日(水)	受付・展示・図書に関する作業、体験学習での教材づくり、教育連携講座運営補助	3
2	北翔大学			1
3	札幌市立大学			1
計				5

(2) 団体利用者対応

小学校

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成29年	5	10	水	札幌市立小野幌小学校体験学習（施設見学・火起こし）	33
2		5	12	金	札幌市立小野幌小学校体験学習（施設見学・火起こし）	33
3		5	16	火	札幌市立小野幌小学校体験学習（施設見学・火起こし）	33
4		5	17	水	江別市立上江別小学校体験学習（施設見学・火起こし・展示室探検ラリー・土器拓本）	120
5		6	14	金	江別市立文京台小学校施設見学（展示室見学）	24
6		7	21	金	江別市立文京台小学校体験学習（ミニチュア土器作り）	26
7		9	8	金	岩見沢市立幌向小学校体験学習（展示室探検ラリー・勾玉作り）	49
計						318

中学校

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成29年	5	17	水	恵庭市立恵明中学校体験学習（ミニ土器づくり・展示室探検ラリー・資料ハンズオン）	39
計						39

大 学

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成29年	5	10	水	札幌学院大学大塚先生考古学A講義利用（展示室・収蔵庫見学）	48
2		5	18	木	札幌学院大学大塚先生博物館資料論講義利用（展示室・収蔵庫見学）	12
3		6	1	木	札幌学院大学大塚先生博物館資料論講義利用（展示室・保存科学室見学）	12
4		6	1	木	北海道教育大学札幌校今先生演習利用（あいの里土曜講座準備）	4
5		6	10	土	北海道教育大学札幌校今先生演習利用（あいの里土曜講座準備）	4
6		6	25	土	北海道教育大学札幌校今先生演習利用（あいの里土曜講座準備）	3
7		6	26	月	北翔大学園部先生博物館資料保存論講義利用（展示室・収蔵庫、保存科学室）	7
8		7	1	土	北海道教育大学札幌校今先生演習利用（あいの里土曜講座準備）	3
9		7	6	木	北翔大学笹木先生介護福祉演習Ⅳ講義利用（バリアフリーに関連した施設見学）	6
10		7	12	水	札幌学院大学大塚先生考古学A講義利用（展示室見学）	41
11		7	13	木	札幌学院大学大塚先生博物館資料論講義利用	11
12		10	1	日	北翔大学本間先生講義利用	7
13		12	5	火	北翔大学小杉先生博物館専門ゼミ講義利用（バックヤードツアー・展示室見学）	7
14		12	12	火	北翔大学小杉先生博物館専門ゼミ講義利用（ミニ勾玉づくり）	9
15	平成30年	1	31	水	札幌市立大学福岡先生博物館資料保存論講義利用（展示室・収蔵庫、保存科学室）	7
計						199

教育機関

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	平成29年	5	27	土	江別市少年少女発明クラブ体験学習（ミニ勾玉づくり・展示室探検ラリー・資料ハンズオン）	23
2		6	13	火	北海道立教育研究所研修生施設見学	3
3		6	11	日	長沼町教育委員会縄文文化と郷土史跡めぐり勾玉づくり体験	37
4		6	18	日	篠路地区青少年育成委員会（収蔵庫見学・展示室探検ラリー・ミニ勾玉づくり）	61
5		7	7	金	空知特別支援学級体験学習（勾玉づくり）	52
6		8	8	火	上砂川町教育委員会体験学習（収蔵庫見学・展示室探検ラリー・ミニ勾玉づくり）	15
7		8	9	水	石狩市立図書館ボランティア施設見学	10
8		8	24	水	江別市蒼樹大学体験学習（収蔵庫見学・ミニ勾玉づくり）	11
9		9	2	土	北広島市民大学施設見学（収蔵庫見学・展示室見学）	11
10		9	12	火	北海道立教育研究所研修生施設見学	7
11		10	3	火	北海道立教育研究所研修生施設見学	4
12		10	5	木	北海道立教育研究所研修生施設見学	3
13		10	7	土	江別市郷土資料館こども学芸員カレッジ（収蔵庫見学・展示室探検ラリー・ミニ勾玉づくり）	21
14		10	17	火	北海道立教育研究所研修生施設見学	5
15		11	8	水	北海道立教育研究所研修生施設見学	3
16		11	28	火	北海道立教育研究所研修生施設見学	7
計						273

児童関係の団体

	年	月	日	曜	団 体 名	人数
1	平成29年	4	1	土	児童 ココロハス 砂絵体験	34
2		4	1	土	きらりはーと西宮の沢 縄文工房利用	8
3		4	4	火	児童デイサービス かがやき厚別西 縄文工房利用	10
4		4	7	金	一般社団法人輝 施設見学	9
5		4	18	火	児童デイサービス ほほ笑み 砂絵体験	11
6		7	15	土	そらいろ	11
7		7	28	金	児童福祉サービス あいむ	7
8		8	4	金	かかわり教室 みのり2 縄文工房利用	12
9		8	9	水	児童福祉サービス あいむ	9
10		8	10	木	ここみクラブ	16
11		9	24	日	札幌第24団ボーイスカウト ミニ勾玉づくり体験	78
12		10	17	火	ここみクラブ	16
13		11	3	金	放課後等デイサービス アミティエ環状通東	8
14		11	11	土	児童デイサービス あかりえ	15
15		12	16	土	放課後等デイサービス アミティエ環状通東	9
16		12	16	土	通所支援事業 ほほ笑み	9
17	平成30年	1	10	水	児童通所支援センター ビリーヴ野幌	15
18		1	12	金	とらいあんぐるピース	17
19		1	12	金	ここみクラブ	16
20		2	10	土	児童デイサービス かがやき	8
21		2	23	金	児童デイサービス ポレポレ	9
22		3	27	火	クレオ平岡	9
23		3	27	火	児童デイサービス ポレポレ	7
24		3	27	火	拓北ワークス	7
25		3	28	水	児童デイサービス わくわくSeed	18
26		3	28	水	児童福祉サービス ゆうきゅん	6
計						374

高齢者関係の団体

	年	月	日	曜	団 体 名	人数
1	平成29年	5	18	木	デイサービス つばさ 縄文工房利用	3
2		6	15	水	デイサービスセンターふくろうの森 施設見学	9
3		7	13	木	北竜町高齢者大学 施設見学	33
計						9

その他の団体

	年	月	日	曜	団 体 名	人数
1	平成29年	4	6	木	地域共生ホームてまりの華 砂絵体験	14
2		6	10	土	岩内町郷土館 施設見学	32
3		6	21	水	札幌市二十四軒陶芸サークル 施設見学	22
4		6	21	水	江別市野幌南地区民生委員児童委員連絡協議会 施設見学	30
5		6	24	土	大麻歩こう会	62
6		9	14	木	文京台地区民生委員・児童委員協議会	15
7		9	23	土	手稲郷土史研究会	18
8		10	7	土	釧路考古学研究会	6
9		10	21	土	澄川第3町内会文化部	19
10	平成30年	2	8	木	長井学園	6
計						224

8 講演会要旨

(1) 夏季講演会

『日本人はどこから来たのか？

—海を渡った祖先たち—』

講師：海部 陽介 氏

(国立科学博物館人類研究グループ長)

<はじめに>

この講演のキーワードは、人類史、ホモ・サピエンス、旧石器時代の3点。はじめに、日本列島の人類史：現状と課題について。そのあと、アフリカで進化し、世界へ拡散したホモ・サピエンスについて。最後に、日本人はどこから来たのか。海を渡った祖先たちというテーマについて、お話ししていく。

<日本人の二重構造説>

これまで明らかにされてきたことだが、日本人の二重構造説という学説がある。

縄文文化の日本列島に、弥生文化の源流となる文化をもった人たちが渡来し、渡来系の人びとと、在地の人びとが混血することで、現在の日本人の起源となったという説。これは、人類学の百年論争といってもよい内容で、長らく議論されてきた。

二重構造説は、日本の歴史のなかでの時間は、弥生時代以降、2000年の時を経ているが、数万年という日本の歴史のなかではほんのわずか。

<縄文時代と弥生時代>

縄文時代というと、土器や石器があり、竪穴住居に住み、貝塚を残している。土偶や土製品、漆塗りの櫛などもみつまっている。このような遺物とともに、人骨もみつかることがある。

弥生時代になると、本格的な農耕をはじめ、物見やぐらなどもでき、戦いもおきたようである。

このような両者の混血をもとに現代の日本人の基礎が形成されていった。

アイヌの人たちは、縄文人の系譜を色濃く引いている人たちかもしれないし、沖縄の人たちも同じく、そのような人達かもしれない。

そのほか、渡来系の影響をいろいろと受けっていると考えるのが、この学説の特徴となっている。

当然、最初から日本に人がいたわけではなく、いろいろな地域から人が流入してきて、その混血がおこることは必然的なことで、それは、漢民族

であれ、朝鮮民族であれ、皆、同じことがいえる。漢民族も、南北で差があることは知られており、いろいろな交流の歴史がある。

<本州の歴史と北海道の歴史比較>

本州の歴史と北海道の歴史を比較してみると、本州の弥生時代から江戸時代までの間、北海道は、続縄文文化期、擦文文化期、オホーツク文化期、アイヌ文化期と違った変遷をしていく。

<旧石器時代>

旧石器時代のうち、後期旧石器時代は、いつ頃から始まるか。日本では、3万8千年くらい前の遺跡がみつまっている。

旧石器時代の遺跡は、全国でどれくらいの数があるのか。正解は、1万か所以上あり、それは、いかに日本人が真面目に発掘調査をしているか、ということにもなるのだと考えている。

この時代に相当数のヒトが日本列島にいたという証しでもあり、ダイナミックに生活をしていたことを想起させる。

少し前に日本では旧石器のねつ造事件があり、この事件に関連して、日本では3万8千年前の遺跡があったかどうか論争になっていた。私たちにつながるホモ・サピエンス以前の原人や猿人がいたかどうかの話になる。

残念ながら、その時代の遺跡については、ねつ造だということになり、一度ゼロになってしまった。現在は、非常に慎重な考え方をされる方が多く、やはりいなかったのではないかと考えられる人もおり、この前の時代にヒトがいたか、いなかったかは、決着していない問題である。

私は、そのことがらも大切だが、後期旧石器時代に1万以上もの遺跡がみつまっていることも非常に重要なことだと考えている。

ねつ造事件により、前期旧石器時代の遺跡については、ゼロになってしまったが、後期旧石器時代の遺跡については、ゼロになったわけではない。

<後期旧石器時代に遺跡数が増える理由>

後期旧石器時代になってから、飛躍的に遺跡の数が増える理由は何か。突然、突出して遺跡の数が増えることは、なにかのシグナルではないか。

おそらく誰かが日本列島にやってきた。これこそが、原人や旧人ではなく、ホモ・サピエンスが

日本列島に渡ってきた証拠だと考えられる。

<ホモ・サピエンス>

ホモ・サピエンスについて、いったん日本から離れて、地球全体を見渡していく。

ホモ・サピエンスとは、現在生きている人類＝現生人類のことで、新人ともいわれる。現代人は、すべてホモ・サピエンス。クロマニヨン人や縄文人など、一部の先史時代の集団も含み、ネアンデルタール人やジャワ原人や北京原人などは、ホモ・サピエンスに含まれない。

人類は、アフリカで初期の猿人、猿人に進化して、その後、原人、旧人、新人と進化をとげる。

<ホモ・サピエンスの拡散>

ホモ・サピエンスは、全世界に拡散していた。現在の人類は、ホモ・サピエンス1種。このことを普段、みなさんはあたりまえだと思っているが、これを生物学的に考えると、実は、全然あたりまえではないのである。

はっきりいって、この種は異常。その他の生き物で、1種のものが世界中にはない。普通の生き物は、広い地域に分布していくと、種ごとに進化をとげる。

例えば、ニューヨークのゴキブリと日本のゴキブリは、種が違う。ネズミなども同じ。

ところが、人間はどこへ行ってもホモ・サピエンス。世界中どこへいっても、ヒトに出会う。これは生物学的には特別なこと。この特別な状況は、最初からあったわけではない。

人類はアフリカで誕生した。裏を返すと、その当時はアフリカのみ人類がいた。

では、今のように全世界に人類が拡散したのは、いつなのか。

700万年前にアフリカで誕生した人類は、初期の猿人や猿人段階の200万年前までは、アフリカの一部にしか存在しなかった。

次の150万年前の原人段階で、はじめて、ヨーロッパやアジアに進出していく。

次の原人や旧人の5万年前までは、全世界の半分のエリアに満たない地域で暮らしていたと考えられる。

アメリカ大陸にもオーストラリア大陸にも人類は到達していない。新人段階の過去5万年間で、

人類は全世界に拡散していった。それを達成したのが、われわれホモ・サピエンスなのだ。

<ホモ・サピエンス 海を渡る>

その前の人類は、あることが苦手、もしくは、できず、ホモ・サピエンスは、それが得意、できた人類といえるのだが、それは何か。

原人や旧人がいけなかった場所は、どのようなところなのか。海を越えて島に渡ることができなければ、オーストラリアに到達することができない。ヒトは、オーストラリアどころか、ハワイにまで到達している。島へ渡り住むサルはおらず、霊長類史上はじめてのことなのである。

<ホモ・サピエンス 寒冷地へ進出>

もう一つヒトが苦手だったのは、寒冷地への適応、進出だった。北海道も緯度的にはかなり高緯度ではあるが、上には上がある。

日本では、現在、外国人にスノーモンキーというのが流行っている。雪のなかにサルがいると、長野県などがにぎわっているようだ。

では、なぜこれがおもしろいのか。

サルは暖かいところが好きで、寒いところにはいない。ニホンザルは、野生霊長類の北限になり、青森県まで生息している。そのような状況がめずらしいので、外国人の観光客がみにくる。

ホモ・サピエンスは、そのような霊長類の苦手な寒冷地へも進出していった。

やがて、ロシアなどの寒冷地に進出した新人がアラスカからアメリカ大陸に進出していき、一気に南米まで到達する。南極を除く、すべての大陸に人類が到達することになった。その後、太平洋の島々にも人類は拡散し、全世界に人類が存在することになったのだ。

では、アメリカ大陸をはじめて発見したのは、誰か。まさか、コロンブス、とはみなさん言わないだろう。コロンブスがアメリカ大陸を発見した時に、コロンブスがインドだと間違った先住民がいた。彼らこそが発見者だといえる。

1万5千年前にベーリング海峡をわたって、アメリカ大陸へ到達したヒト。南米にわたり、マヤ・インカ文明などを築いていった人々の祖先。歴史の教科書もたまに間違いをするものだ。

このように海と寒さという2つの困難を乗り越

え、人類は拡がっていった。

ここで、念のため付け加えておくと、ボルネオ島とジャワ島のあたりは、なぜ猿人が移動できたのか。この地域は、過去の海水面変動で、海退時にすべて陸化してしまい、歩いて移動できる地域だったからである。

一方、面白いのがマダガスカル島で、アフリカの隣であるにもかかわらず、新人の段階までヒトが到達することができなかった。

アフリカで人類が誕生したのが、700万年前。マダガスカル島で現在みつかった最古の遺跡は、2300年前のもの。そんな最近までヒトがいなかったのである。

<ホモ・サピエンス拡散についての論争>

ホモ・サピエンスがアフリカで誕生した後、世界にどのように拡散していったかについては、いろいろな論争がある。

ホモ・サピエンスがアフリカで進化したことについて、もう一度整理をする。

ホモ・サピエンスの進化については、2通りの考え方がある。

<多地域進化説>

ひとつは、多地域進化説。170万年前に原人がヨーロッパやアジアに進出して、ジャワ原人や北京原人が生まれ、そのあと旧人が生まれ、これらいろいろな地域で生まれた人類が、それぞれ現在の各地域のホモ・サピエンスにつながっていったという説。昔の教科書には、こう書かれており、多くの方がこのような図式で考えられているかもしれない。

例えば、北京原人は、われわれの祖先。ジャワ原人は、東南アジアに住む人たちの祖先。その考え方は、現在正しくないことがわかっている。

<アフリカ起源説>

現在、私たちが正しいとしているのは、アフリカ起源説。

原人や旧人が各地に拡散していく。そのあと、アフリカに残った原人、旧人から進化した新人が、世界各地に拡散して行って、各地の旧人と置き換わるという理論である。

直感的にいうと、どちらの説が正しそうか。アフリカ起源説の各地域に広がっていた旧人が絶滅

したという考えは、俄かに受け入れがたいところがあるかもしれない。

なぜ、アフリカ起源説が正しいかは、詳しいことは割愛させていただき、ひとつわかり易い考え方を示すこととする。

私たちが旧人で、ホモ・サピエンスに進化すると、想像してみよう。その際に、いろいろな遺伝子が増えなければならぬ。ひとつの遺伝子だけが変化することで、旧人が新人に変化することは、考えられないだろう。実は、いくつの遺伝子が関わっているのかは、現在のところ、まだわかっていない。

もし、多地域で原人、旧人から新人への進化を遂げたのであれば、それぞれにおいて遺伝子の変化が起きたことになる。そのようなことが起こることは、きわめて難しいのである。ばらばらに違う種に進化するという事は普通起こりえない。もう少し時間をかけて説明するところだが、それが一番の問題点。

化石の証拠では、15万年前にどこに誰がいたか。ヨーロッパにはネアンデルタール人がいた。

ネアンデルタール人は、ヨーロッパを中心に、西アジア、中央アジア、最後には南シベリアあたりにも分布していた。中国やインドにも旧人がいた。インドネシアには、ジャワ原人がまだ生き残っていた。フローテス島には、身長が1mに矮小化してしまったフローレス原人がいた。台湾にも原人がいたのではないかという報告が近年なされている。

私自身の専門は、ジャワ原人や台湾の原人などで、過去20年、これらの資料を研究してきた。これに加えてホモ・サピエンスも研究している。

15万年前、アフリカ大陸にだけ、私たちと同じ姿をしたホモ・サピエンスがいたのだ。

15万年前には、ホモ・サピエンス以外にも世界のいろいろな地域に違う人類がいたのである。他の生き物と同様に、人類もかつては多様だったのだ。象も、インドゾウとアフリカゾウとは違う。マルミミゾウという少し変わった象もアフリカにはいる。

ホモ・サピエンスが世界に拡散して、今の新人の段階になっていく。

<クロマニヨン人>

今日は、日本列島のお話をする前に寄り道をして、アフリカを出て、西ヨーロッパに移動していったグループについて、お話をしていく。このグループこそが、皆さんの知っているクロマニヨン人。クロマニヨン人がホモ・サピエンスらしくいろいろなことを行う。この内容を先に説明することで、ホモ・サピエンスの特徴を皆さんに知っていただきたいと思う。

ネアンデルタール人とクロマニヨン人を比較すると、ネアンデルタール人は毛皮をまとっているが、クロマニヨン人は、生地を縫製する技術をもっていたと考えられている。

<クロマニヨン人の芸術文化>

スペインのある洞窟で、クロマニヨン人が何をしていたのか、ということの説明したい。

ラガルマというこの洞窟は、全長300mくらいだが、奥に入っていくと、不思議なものが発見された。

よくある誤解で、原始人は洞窟のなかに住んでいたという考えがある。人間は、洞窟の入り口を生活の場として利用する。入口のほう明るく、空気の通りも良く、居心地がよい。雨が強いときは、中の方に入ればよい。入口のあたりで、石器や焚火の跡などがみつまっている。これは、ネアンデルタール人は行っていないことがら。

入り口部分は、地震で崩落し、塞がっていた。ここを開けて、中に入ってみると、不思議な空間が残っていた。左側の壁を注目してみると、馬の絵が洞窟の中に描かれていた。

洞窟の床面には、石や骨などが落ちていた。ウシ科の指の骨を拾い上げ、展開写真を撮影してみると、浮彫のすばらしいウシの彫像が掘りこまれていた。

次の例も、浮彫の彫刻が施されていた。表裏で動物がふりかえった表現になっているようだ。

洞窟の一番奥まで約250m進んでみると、手形が記されている場所に行き当たる。そもそも250m真っ暗な洞窟を奥にすすんでみたいと皆さんは思うだろうか。絵を描くこと自体も驚くべき行為なのだが、それ以上に、このような環境の場所で、絵を描く行為を行うこと自体が私は不思議でなら

ない。

このようなことは、おそらく生き物としては不必要なこと。そもそも生き物が生息するうえで、絵を描くことは絶対に必要なものではない。服を着ること、装身具を身にまとふことなど、他の生き物では行っていないこと。このような行為を行っているのは、人間だけなのだ。

このように考えると人間はおもしろい存在。全世界に1種で分布していることもそうであるし、このように絵や彫刻の芸術をもち、音楽、文学を生み出し、服を着、装身具を身にまとふ行為を行っている。このような行為が目立つようになってくるのは、ホモ・サピエンスになってからなのだ。ヨーロッパには、このような状況が残った遺跡が多くみられることを先にお伝えしておく。

ヨーロッパには岩面刻画が残る洞窟が300以上ある。そのなかで最も有名なもののひとつがラスコーになる。

ラスコー展では、岩面刻画を3D実物大で皆様にご覧いただけるような展示を行っている。写真では絶対に伝わらない立体感をこの展示ではお届けできていると思う。

ラスコー洞窟から出土した赤色砂岩製のランプ。油を入れ、明かりを灯したことがわかる。火を手に入れることで、調理ができるようになり、夜の時間に明かりを得ることができるようになった。

体をなめるバイソンと名付けられた素晴らしいトナカイ角製の彫刻。こちらの復原女性像は、毛皮の服を着て、貝製のビーズがたくさんついた帽子をかぶっている。このような復元は、一定の根拠をもとに行っている。

貝製ビーズが頭部付近で見つかる例が多い。また、シカ犬歯のビーズも実際にお墓から出土したもの。このように装身具を身にまとっていたという証拠に基づき、復元を行っている。

この時期には、縫い針がみつまっている。それにより、衣服の復原も毛皮などの生地が縫い合わされたものになっている。

専門的にみても、クロマニヨン人がこれくらい「おしゃれ」であっても良い。岩面刻画を描き、彫刻を作成している。デザインのセンスでいえば、

私よりはるかに上。

ここまでのお話がアフリカから出てきて、西ヨーロッパへ広がっていったクロマニヨン人の話しだった。

人間は、ここで新しくなった。このアフリカから出発したグループの中で、東側に向かった人たちがいた。そのグループの一部が日本列島にやってきたというお話をこれからすすめていく。

<後期旧石器時代の日本列島>

3万8千年前から1万6千年前。最終氷期の後半に相当。地形、気候、景観、植生、動物相は、現在と異なっていた。

4万年前から3万年前は、現在より海面が現在より約80m低かった。なぜ、寒いと海面が下がるのか。

寒いと極地に氷がたまってしまう。海の水が少なくなってしまうことになり、海面が下がる現象が起きる。今から一番寒かったといわれる2万年前は、今より130m海面が下がったと考えられている。

4万年前から3万年前は、そこまで寒かったわけではないが、80m海面が低かった。サハリンと沿海州は陸続きとなり、さらにサハリンと北海道も陸続きとなった。北海道は大陸の一部だったのだ。私たちは、北海道のことを古北海道半島とよんでいるが、それはかつて半島だったことに起因する。

津軽海峡は、つながらない。朝鮮半島は、黄海はほぼ陸地化している。海の深さが浅いゆえ、世界最大の干潟。台湾は、大陸の一部。瀬戸内海も陸地化し、四国九州も本州と一体化していた。

<現在と約2万年前の日本列島植生の違い>

植生も違っていた。現在と約2万年前をおおまかに比較してみると、現在の北海道の植生が、現在の九州までひろがっていた。九州の気候が現在の北海道のものに近かったというイメージ。

北海道は現在とは違うイメージ。ツンドラ気候となり、ツンドラステップという夏季には草原も広がるようなエリアができ、そこへマンモスが集まってきた。北海道では、マンモスの骨などがみつまっているが、マンモスが好むのは森ではなく、草原。マンモスの好む植生が北海道まで及んでお

り、そこへ向かってマンモスも移動してきた。

鹿児島湾（錦江湾）の北側は、大きなカルデラで、3万年前に超巨大爆発が起こりできたもの。この噴火による火山灰は、北海道ではまだ確認されていないが、ほぼ全国に拡がり、降灰している。

シラス台地は、この大噴火による火砕流によりできたもの。それほどの大爆発であるから、鹿児島市周辺の動物などは、全滅したに違いない。

この噴火は、当時にとっては大災害だったと思われるが、考古学的には役立つ情報として残されたともいえる。始良カルデラのATテフラをみつけることができれば、その層は3万年前の層であることがわかるのである。このAT層より下でみつかるものは、3万年前よりも古く、AT層より上でみつかるものは、3万年前よりも新しい。北海道にもATとは別の鍵層になる火山灰がある。

<動物相の違い>

オオツノジカやナウマンゾウ、さらに、北海道にはマンモスやバイソンがいた。ヒョウも2万年くらい前までは日本にいた。

多くの大型獣は、2万年前までに姿を消してしまった。

<後期旧石器時代人の生活>

この当時の人びとは、どのような生活を送っていたのか。みなさんが一般的に持っているイメージは、アニメはじめ人間ギャートルズに描かれた世界なのではないか。よく描かれている部分もあるのだが、やはり少し違う部分もある。

裸でいるように描かれているところも少し疑問がある。また、石斧の表現だが、この時代にほとんどみられず、斧をつかって狩猟するという行為もおそらく行われていなかったと考えられる。

<日本列島で独自に発達・発展した創造活動>

狩猟をするための世界最古の落とし穴がみつまっていること。槍で直接的に獲物を攻撃するという方法ではなく、獲物の行動特性をとらえ、落とし穴という罠施設をつくり、獲物を捕獲する。2万3千年前の世界最古の釣り針が、沖縄でみつまっている。世界最古の海を越えてきた事実もある。

<1万8千年前の黒曜石の運搬>

このセンターでも黒曜石が展示されているが、

各地の黒曜石産地から石材がいろいろな地域に運ばれた証拠がみついている。遠軽町白滝産の黒曜石は、道内各地にとどまらず、山形県まで到達していたことがわかっている。

黒曜石は、成分組成の分析で、どの産地の黒曜石かが判別できる。それにより、広範囲に黒曜石が運ばれていたことがわかるのである。旧石器人の移動についても検討できる材料といえる。

<日本列島へ新人がどのようにわたってきたのか>

日本列島へ新人がどのようにわたってきたのか。私なりにいろいろな整理を試みている。

どうやら、最初に渡ってきたのは、朝鮮半島から九州にあたる部分しか考えられない。3万8千年前に、対馬海峡を渡って、九州から本州にかけて一番古い段階の遺跡が発見されているためだ。3万5千年前には、台湾から沖縄本島にむかって、新人が移動してきたようだ。

北海道には、3万年前には人がいたようで、2万5千年前くらいに、新しい文化が入ってきたのではないかと考えられている。

大きく3つの渡来ルートが想定されるが、おそらくそのすべてのルートが利用されていると考えられる。しかも、違う時代に人が移動してきているようだ。そのため、旧石器人の歴史は、単純ではない。1度の渡来で、日本全域にその人たちが拡散して終わりというのではなく、いろいろな地域から時代をたがえて、入ってきているようだ。

現在、私たちは沖縄ルートに着目し、3万年前の航海検証プロジェクトを行っている。

<琉球列島の主な旧石器時代の遺跡>

種子島には、3万5千年前の横峰C遺跡と立切遺跡、奄美大島には、3万年前の土浜ヤーヤ遺跡や喜子川遺跡、徳之島には、3万年前のガラ竿遺跡、本島には、3万5千年前のサキタリ洞遺跡、宮古島には3万年前のピンザアブ遺跡、石垣島には2万7千年前の白保竿根田原洞穴遺跡がみついている。これらが琉球列島でみついている古い遺跡になる。

3万5千年前から3万年前くらいにかけて、突如、琉球列島全域にわたり、ヒトが現れる。これ以前には、おそらく人がいなかったと想定されるが、ある時期に一度にヒトの流入がみられる。

最近、沖縄本島で、世界最古の釣り針がみついている。

これらの遺跡発見は、琉球列島へ人がわたってきた証拠であり、海を渡った渡海の証拠でもある。

<陸橋はなかった生物地理>

私は、さきほど80mほど海水面が下り、その時には、琉球列島がひとつの島だったとお話したが、もう少ししっかり検証したい。

これは、いろいろな理由から陸続きのひとつの島だったと断定できる。

琉球列島全体は、地質学的にみると、隆起し続けており、沈降したことはこれまでなく、沈降することにより、それぞれの島にわかれたわけではない。

動物相から確認すると、九州、台湾でもサル、シカ、クマは生息している。ちなみに、台湾にはコブラも生息している。

ところが、琉球列島の真ん中の方には、これらの動物がいない。沖縄にはサルやシカがいない。奄美大島には、アマミノクロウサギが、沖縄にはヤンバルクイナが、南西諸島にはケナガネズミが、西表島には、イリオモテヤマネコがいる。メジャーな動物はおらず、これらの島々に固有の希少種が存在する。これは、過去ずっと島が孤立していた証しになる。

もし、陸続きになっていたのであれば、サル、シカ、クマなどが生息していて良いはずだが、これらの動物がいない。この他にもいくつかの証拠があるが、ここでは割愛させていただく。

屋久島には、ヤクザルとヤクシカがいる。これは、大隅海峡は水深が110mしかなく、海が130m下がった時には、陸化した証拠である。屋久島と種子島は、九州とつながっていた。屋久島の動物は、モグラやネズミまで、鹿児島のものと一緒になのだ。

現在は、生息していないが、昔は、沖縄にもシカが生息していた。リュウキュウムカシキョンとリュウキュウシカ、2種の矮小化したものである。

大きさを比較してみると、北海道のエゾシカが一番大きく、リュウキュウムカシキョンとリュウキュウシカはその半分以下の形態だったと、出土する残存骨からわかる。

小さな島に残る動物は、大きな島の動物よりも巨大化するか、矮小化するという島嶼化がおきる。古生物学的にこれらの事例も傍証にあげられる。

<人間が島に渡った証拠>

世界最古の渡海事例は、オーストラリアに渡ったもので、約5万年前のもの。オーストラリアで発見されている最古の遺跡が4万7千年前のものから推定している。地中海は意外と古くなく、1万2千年前という考えと8千年前という考えがみられる。クロマニヨン人は、海を渡らなかったのではないか。彼らは、洞窟のなかで絵を描くなどの活動はしていたが、海には出なかったようなのだ。アメリカ大陸や南米大陸もさほど古くはない。

オーストラリア周辺と日本の周辺が特に古い証拠となりそうだ。

私自身は、フィリピンあたりにも足を延ばしているのではないかと考えているが、今のところそのように古い時期の遺跡がみつかっておらず、はっきりしない。

西太平洋地域に一番古い海洋文化があったのではないかというのが、私の漠然とした考えである。その中で、日本における航海路に注目している。

80m海拔が下がっていると、台湾は大陸につながっている。石垣島と西表島もつながってしまう。沖縄本島も今よりも大きくなっている。それでもなお、台湾から与那国島までは約100キロ、宮古島から沖縄本島まで約220キロ海が隔てていたと考えられる。

目標とする島は、小さくて遠いため、目視できない。見えない島を発見したという事実をどのように解釈すればよいか、私自身もまだ考えがまとまっておりません。

もうひとつは、黒潮。黒潮は、世界で最大の海流のひとつなのだが、この黒潮を横断、もしくは、逆行する必要がある。黒潮の海流は、およそ2ノット。ひとが歩くくらいのスピードだが、この流れは、昔の原始的な構造の舟では、なかなか越えられるものではありません。

そのため、昔の航海については、考えないといけないのである。

海を渡ったのは間違いなのだが、偶然の漂流だったのか、それとも意図的な航海だったのか、

という問題が起こる。これはどちらなのだろうか。

漂流説は、この時代の人たちに海は渡れないだろうというのがひとつ。台湾のような大きな島から、航海途上になにが起こるかわからない状況で、小さな島へ移動することは考えられない。

逆に漂流説の難点を考えてみると、急に九州から台湾にかけての島々にヒトが住むようになったということは、急に人の漂流がたくさん起こったことになる。これもないとはいえない。どのようなどきに漂流がおこるか。海に出て魚をとっているなどの作業をしていないと漂流するということは起こらない。

舟を持っているということが前提になる。舟をもって海に出ているのであれば、おそらく魚を取っている作業中だろうということになる。この魚とりの作業中に流されてしまうということがケースとしては考えられる。魚をとるという仕事は、民俗例を確認すると、おおよそ男の仕事で、男女が一緒に魚を捕るという例は、ほとんどみられない。

海に出て魚とりをしていた男2名が漂流したとし、運よく島に流れ着いたとする。生きてよかったと思うが、そのあと男性2名で、子孫を残すことはできない。さらに、子孫を残す場合、男1、女1のペアでは足りないのである。国立科学博物館には、いろいろな分野の研究者がおり、数理生物学が専門の研究者に何名が渡らないと移住が成功しないかについて、シュミレーションしてもらった。

暫定的な結論としては、男性5名、女性5名の、計10名が渡海しなければ難しいようだ。男性5名、女性5名の、計10名が舟に乗っていて漂流することは、あまり考えられないことだと思う。

<伊豆七島、神津島の黒曜石>

これらの例に加えて、私が意図的に渡海していたのではないかと考えるのは、伊豆七島、神津島の例があるからだ。

伊豆七島は、東京都になるが、神津島の少し横に恩馳島という岩礁でできた島がある。ここが実は黒曜石の産地。この黒曜石が、海を渡った関東地方でみつかっているのである。

富士山の麓に愛鷹山遺跡群があり、約3万8千

年前の地層から、神津島の黒曜石が見つかる。約3万8千年前とは、日本列島にヒトが移動してきたすぐのこと。

私は、日本列島に渡ってきたヒトが、周辺を探検して歩いているのだと思っている。島から海を渡って黒曜石が運ばれており、往復しているのだから、漂流では説明ができません。黒曜石を意図的に持ち帰っているのだから、漂流ではなく、意図した航海といえるだろう。

直線で30から40kmの距離。黒潮の分流が入っているのだから、真っ直ぐ航海することは不可能。島に向かうよりも帰りの方が難しいといわれる。

3万8千年前に神津島へ、韓国から日本へ、台湾から沖縄へ、この3ルートでヒトの移動がみられる。これらをすべて漂流で片づけるのは、難しいと私は考えている。

<3万年前の古代舟を復元して、

実際に航海してみる>

そこで、3万年前の古代舟を復元して、実際に航海してみようと考えた。これはあくまで机上の空論で、難しいのはわかっているけれど、どれくらい難しいか、わかっていないのが実際だと感じている。海の専門家でもないし、造船技術の専門家でもないが、実際に作業してみたいというのが最初。作業を通して、造船の難しさや、操船の難しさを感じてみたいと思ったのである。

幸いなことに、私はいろいろな専門家に知り合いが多く、海流の専門家など、それぞれのエキスパートに声掛けをして、プロジェクトチームを結成した。

<2016年夏、第1段階の実験航海>

草の舟をつくり、与那国島から西表島まで航海をするプロジェクト。私たちの最終目標は、台湾から黒潮を通り抜け、与那国島まで到達したい。第1段階の実験航海は、その前段として、いろいろなモデルを検証しようというもの。草の舟をつくり、どのようなことが起こったのか。第1段階の実験航海は、残念ながら成功していない。

西表島をめざして出港したが、船は最初からかなり北側に流されており、この時点で最後は中止の判断をした。

草の舟は、2ノットで航海できる。これは作っ

てみて、航海に出てみてわかったこと。今回は草舟を製作したことがある方に参加していただき、プロジェクトを進行することができた。

今回の航路では、通常、不規則に海流が動いているのだから、概ね、北向きに0.5ノットから1ノット程度の海流がある場所だった。この日は運悪く、通常の倍の2ノットになっていた。

僕たちの一番の問題は、スケジュール。現代人は、皆、仕事をしているのだから、忙しい。それでも、台風の悪天候のため最初に計画していた日程を3日間延長して、取り組み、ようやく海にでることはできたのだから、ベストな日ではなかった。本当はベストの日まで待ちたかったのですが、これがタイムリミットだった。

ベストな日とは、与那国島から西表島が肉眼でみえ、海流が穏やかな日。おそらく3万年前の人びとも、目視でき、海流が穏やかで、天候の良い日を選んだはず。彼らは、時間より、安全な航海を優先させたいだろう。

この日は、台風から1週間経過し、西表島は目視できなかったが、波も収まってきたので、出港した。のちに気象庁のデータと照らし合わせると、この日の与那国島から西表島の間には、通常のときの、台湾から与那国島間に流れている黒潮本流に近い速さの流れが起きていた。

波の高さ、1.5mから2m、南東（北西向き）の風5.1m/s、曇天で目的地、西表島がみえないという環境だった。

<実験航海で得たもの>

まず、草の舟とはどのようなものか、掴むことができた。この舟は、スピードができない、これは仕方がないところ。ただ、船体自体は安定していた。草なので、少しずつ舟に水が浸み込むが、浮力がある。7人の掻き手にプラスして、食料や水なども積んでいた。伴走船から補給するのではなく、あくまで、おそらく当時の人たちも持って出港したであろう量の食糧や水などの必需品を携えていった。

漕ぎ手、この舟の乗り手にとっては、「この舟は転覆しないのだ」という安心感があった。

問題点は、スピードが出ない点。もうひとつは、舟自体の寿命が短い。

漕ぎ手たちは、方角は理解していた。この時期は、南風が吹くので、相対的な方角がわかったのだ。流されていることも理解していた。出た島の形で判断できたようだ。出た島の形が変わらなければ流されていない。形が変わって見えると流されていることになる。

先につくった練習艇は、1週間海につけてから利用してみた。かなり水面に沈むような形になっているが、それでも浮力は高く、あるレベルから沈むことはない。その代り、多く水を含んでいるため、水の塊のようなものになってしまい、スピードが上がらない。草を多量に使用するので、島の草がなくなってしまう可能性もある。

3万年前のモデルとしては、考えられるものだが、いくつか検討していかなければいけない課題も残った。他の候補には、竹や木がある。

私たちは、これから一つずつ検証していこうと思っている。竹の舟は、すでに試みで作成したので、のちほど解説してみたい。

最終的には2019年台湾から与那国島まで渡る航海を目標にプロジェクトを続けていく。

今回は草の舟をテストした。遺跡から舟の痕跡はみつかっていないので、どのような舟を利用したのかわからない。でも、そこで私はあきらめたくはない。

可能性があるものをひとつずつ、テストしていけばよいだろうと、私は考えている。草か竹か木のいずれかが利用されたのだと考え、2017年の3月から竹筏舟を作成し、6月にテスト航海を行う予定である。

<オホーツク文化の舟>

オホーツク文化の人たちは、どのような舟で北海道まで移動してきたのか。オホーツク文化の舟も残念ながらまだ発見されていないようだ。人類学と考古学の研究者は、基本的に地面をみて研究をすすめていく。地面をみて、掘って、出てきたものを基に研究をする。これらが直接的な証拠なので、それら以外ではモノを語らない。

ただ、私は、この話については、あきらめきれなかった。舟に関する資料が出てこないからと言って考えないのは、もったいない。人類史上においても、大きな出来事。祖先たちがどのように

したのかを知りたい。発掘調査とは違うアプローチで取り組んでいる。

<台湾から与那国島へわたる>

今年度は、台湾にいて竹の舟をつくる予定。台湾の東海岸に住んでいるアミ族がつくる竹筏を改良してつくった舟。私たちが利用する舟は、この形態ではありません。この形では明らかにスピードがでないため。外洋航海ができる、黒潮の流れに負けない、もう少しスピードの出る舟をつくりたいと考えている。

私たちが草の舟で学んだのは、当たり前のことではあるが、2ノットしかスピードの出せない舟は、2ノットの海流に負けてしまう。

海流はその時々で変動するので、悪天候などで強い海流となったとき、それ以上のスピードを出せなければ、押し流されてしまう。

舟を製作する時に重要なのは、当時の製作技術でできるレベルのものをつくること。台湾でみつまっている約3万年前の石器で加工できるレベルのものを意識している。この石器で扱える材料で取り組むことにしている。この石器では、おそらく丸木舟はつくることのできないのではないかと、私は考えている。私が丸木舟を排除しているのはそのような理由があげられる。

では、竹細工であればよいのか。それは、大丈夫。実験により検証をしてみた。この石器で竹を切ることができ、直径18cmの大きな竹でも切ることができた。

このようにいろいろな材料に対しての検証実験を行い、素材を選んだ。また、その土地にある材料でなければダメ。

もうひとつ調査しているのは、与那国島から台湾が夏場、年に数回みえる。それは台湾が大きな島で3000m級の山々が連なっているから。

台湾のひとに与那国島が見えるか、と聞くと、見えるわけないと、答えられる。しかし、片側からみえて、反対方向にみえないこともないだろうと、例えば、台湾の山に登って、与那国島方面を眺めてみるなど、いろいろな情報を集めているところである。

島の存在がわかっていないと舟を出す理由がない。3万年前の人たちが、目的地としての島を確

認した状態で、海に出たことを証明したいのだ。この作業は、難航しているが、少しずつ情報も集まりつつある。どこからどのように島がみえるかということを理解し、黒潮の流れを理解し、それを総合的に判断して、航海の準備をしていく予定である。

今年の目標は、竹を選び、切り出し、竹製の舟をつくり、その各種性能を検証すること。かつ、島のさまざまな情報を集めること。それらを基に2、3年かけて与那国島をめざす作戦をたてることにある。2019年までに、どの舟が利用された可能性が高いものになるかを考え、私たちなりの結論を出していきたいと考えている。

<アミ族の竹筏・竹舟>

アミ族の人たちに協力をしてもらい竹舟を製作している。材料を結わいている部分には籐を利用した。籐細工はみなさんご承知だと思うが、皆さんの中で、植物としての籐そのものをみたことがある方はいるだろうか。

かくいう私も台湾にいて、はじめて実物を確認した。棘の量が多く、見るからに痛そうな感じがする植物。山中で数十mにも成長するのだそうだが、この植物の中の軸皮が、籐の原料になる。

籐をつくるまでに多くの手間暇がかかっている。このようなこともやってみて、はじめてわかることもある。

テスト版の舟をつくり、4月に川でテスト運行をしてみた。6月には、また台湾へ行き、1週間ほどこの舟を海でテスト運行してみる予定である。

このプロジェクトは通常のものとは違い、オープンな形で進めている。通常プロジェクトは結論がでてから、みなさんにお知らせをするのだが、今回は違う方法で行っている。この方法をとっているのは、こちらの方が面白いから。実験航海をするのに、研究者だけで行うと、面白くないなあと考え、多くの人たちに知ってほしい、試行錯誤し、謎解きをしていく過程も含めて、みなさまに知ってほしい。失敗するところも含めて、すべてお見せしていこうと思っている。

<北海道への渡海>

最後に、今回は沖縄のお話をしたが、みなさん

のいる北海道は、このようなお話しと無関係なのか、ということではない。

津軽海峡をいつヒトがわたり始めるのか、という問題も、わかっておりません。おそらく旧石器時代から渡っている可能性が高いので、その航海においても、舟が利用されていたものと考えられる。そのあと、オホーツク文化期にも舟でオホーツク文化の担い手が渡ってきている。海を越えた人の交流が存在する。彼らがどのような技術、文化をもって、行っていたのかは、わかっていない。

<おわりに>

私の夢は、いまは、台湾から沖縄にかけてのエリアで行っているが、日本列島の周辺が海のフロンティアであったことは間違いのないので、いまだ解明されていないこれらの問題について、解き明かしていきたいと考えている。

特徴的、緑色（F）は東南アジアに特徴的。

オックスフォード大学の遺伝学者、スティーブン・オープンハイマーは、『Out of Eden』という著作で、南のルートのほかに、ヒマラヤを超えて、さらに北側のルートをとって、ユーラシア大陸の西側で2手にわかれて東に向かったという説を出した。

<時間差説>

2007年、『サイエンス』にミトコンドリアDNAの研究者、テッド・ゴebelが寄稿した説。

ヒマラヤを超えて、さらに北側のルートは、4万5千年前から3万5千年前にかけて、南側のルートは、5万年前から4万5千年前にかけて。北に向かった人たちは、約1万年遅れてシベリアを移動していったという仮説。



<時間差 2 回移住説>

2011年、『サイエンス』にラスムッセンほか寄稿した時間差 2 回移住説。

オーストラリアのアボリジニの方が自分の先祖である100年前のおじいさんの髪の毛が残っていたので、研究機関に提供された。この髪の毛からゲノム解析が行われた。



なぜ、100年前なのかというと、現代のアボリジニの方々は、ヨーロッパの人たちと混血がすすんでいる。100年前ならもとのアボリジニの

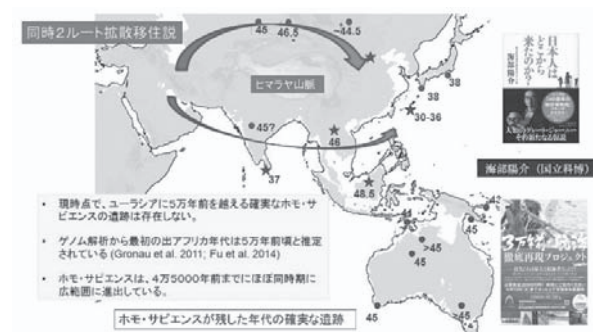
方々そのものの分析ができるということで利用された。

このデータによると、アボリジニの祖先は7万年前から6万年前くらいにアフリカを出発したグループ。後のグループは、3万8千年前から2万5千年前までにヨーロッパへ移動した。

<遺跡の分布からみた傾向>

国立科学博物館の海部先生の説は、もう少し初步的な研究で、石器の形状などでホモ・サピエンスが残した年代が確実な遺跡を世界地図にプロットしてみたもの。インドでは4万5千年前や3万7千年前の遺跡がみついている。

年代をみると北も南も2つのルートともほぼ同時期に移動があったことがわかる。ゲノム解析では、最初の出アフリカ年代は、約5万年前と推定されているので、そのあと、5千年くらいのなかで、ヒマラヤ山脈の北と南にホモ・サピエンスは拡散していったのではないかと推測している。



<ホモ・サピエンスは、なぜ、>

<ユーラシアには5万年前まで来なかったのか>

ホモ・サピエンスは、15万年以上前にアフリカで誕生していたのに、なぜ、ユーラシアには5万年前まで来なかったのか。この間、10万年ものギャップがある。

原人（ホモ・エレクトス）は、100万年前や50万年前などの年代でも、世界中に拡散している。そこから、ホモ・サピエンスは、世界に拡散していく能力はあったはず。原人はすべて絶滅してしまっただけで、10万年のギャップはなぜできたのか。

<ホモ・サピエンスが拡散する以前の人類>

私が考えているのは、ホモ・サピエンスが広まるまでいた人類というのは、北京原人の子孫やジャワ原人の子孫。ジャワ原人は、海部先生の説で

は、5万年前までインドネシアに生存していたと考えられている。かつてソロ人として、旧人と考えられていた人類だが、現在では、原人と考えられている。

＜スマトラ島の火山噴火＞

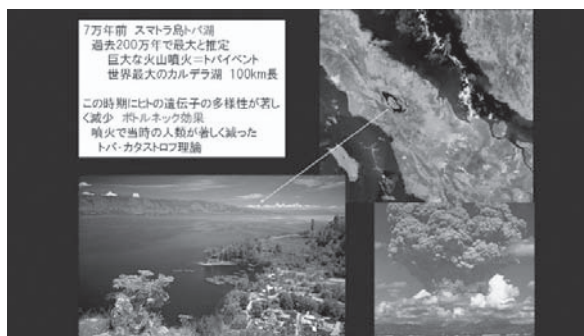
スマトラ島にトバ湖という湖がある。トバ湖は大噴火によりできた幅100kmくらいの世界最大のカルデラ湖。支笏湖は、同じカルデラ湖だが、長辺が13km。いかにトバ湖が大きいかがわかる。

この大噴火による火山灰は、地球の半分の地域に降灰し、全世界の気候を変えてしまったと考えられている。それにより、ボトルネック効果が起こり、ホモ・フロレシエンシスやジャワ原人などのたくさんの人類が死滅し、人類の多様性がここで一旦失われた。

この火山灰の影響は、その後1万年間続いたと考えられ、この理論がトバ・カタストロフ理論とよばれている。

われわれ全人類の祖先は、わずか15万年前のアフリカで誕生し、トバの大噴火事変により先住の原人が絶滅し、気候への影響が終熄する。5万年前以降に、ホモ・サピエンスは、ユーラシア全域に急拡大。我々すべてのホモ・サピエンスは、共通の設計図をもってスタート。能力の違いはない。地域によりネアンデルタール人との混血はみられるが、数%の範囲。

以降の住拡散のルートと時期は、さまざまなシナリオが描かれている。Single Wave（1回の拡散）か、Multipul Wave（複数回か）。ヒマラヤ北部を横断したグループがいたのか。



＜更新世5万年前から2万年前の

ホモ・サピエンスの化石＞

ラオスのTam Pa Ling (46000年前)、マレー

シアのNiah Sarawak (40000年前)、フィリピンのTabon Palawan Isd (30000年前)、タイ Moh Khiew (25000年前) などから古人骨が出土している。しかし、どれも断片的でどのような顔つきをしているのか、全体像が不明確。

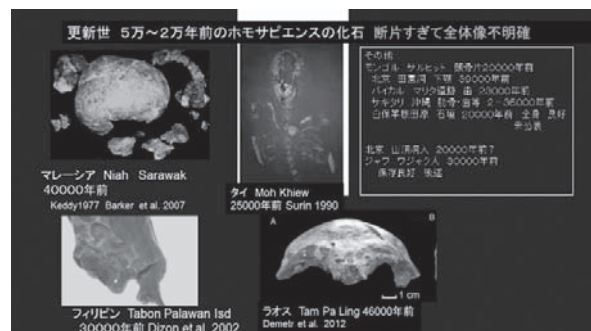
日本の出土例で、比較的状況が良いものに、2万年前の石垣島の白保竈根田原遺跡の例がある。また、中国では2万年前の北京の山頂洞人がある。

5万年前から4万年前の全体像がわかるものではなく、2万年前くらいのは、ある程度顔つきもわかる保存状況のよいものもみられる。

そこで私は、もう少し新しい1万年前から5千年前くらいの時期の遺跡から出土した人骨を調査してきた。北は北京から、南はインドネシアまで。広範囲の遺跡を対象にデータを集めてきた。★は、旧石器時代。◆は、4千年以後の新石器時代。●が、3千年前から2千年前くらいからはじまる金属器時代の遺跡。これらの資料は、地元の研究者が発掘調査したもの。これに加えて、私自身が調査した遺跡を加えている。

2011年から2016年にかけて科研費を利用し、調査した中国の灰窯田遺跡（7千年前）。

ベトナムでは、2004年に調査した旧石器時代のHang Cho洞穴（1万1千年前）、2017年先週まで調査をしていたBau Du遺跡（5千5百年前）。Con Co Nga遺跡（6千年前）、Man Bac遺跡（3800年前）、Hoa Diem遺跡（3800年前）、インドネシアスマトラ Gua Harimau洞穴（8千年から2千年前）。2004年から13年間かけて、6つの遺跡を調査してきた。



「頭骨の計測データによる類似関係」

この人たちの頭や顔の形態についてみていく。

行った。

最近、ネットワーク系統樹という新しい系統樹をかくプログラムができた。ドイツで公表されているもの。このプログラムで分析してみると、不死鳥のような形になる系統樹が描かれた。右の上にぎっしり密に線が集まっている部分はひとつのグループを示している。中央左部分で分断され、それより左側でひとつのグループが形成されている。

右上に集まっているグループは、シベリア、中国、東南アジア島嶼部。◆は、新石器時代の農耕民。ベトナム、タイ、ラオスの人たちが、シベリアの人たちと近いグループを形成していることがわかった。

左下のグループは、インド・サフル、ホアビニアン。ニューブリテン、ニューギニア、ベッタ、オーストラリア、メラネシアなど、インドやサフル（オーストラリアやメラネシアなど）。それに加えて、中国、ベトナムの旧石器人のグループ、採集狩猟民の人たちが同じグループを形成している。

ニューブリテン、ニューギニア、インドのベツダ、オーストラリア、メラネシア、アンダマン。★は、1万年くらい前のベトナムやタイに住んでいるホアビニアンなどの狩猟採集民。計測値の分析からは、ほぼ同じ人たちとってよいくらい近い。

鯉魚坡遺跡や灰窯田遺跡。Con Co Ngua（コンコンガ）遺跡。これらの人たちもパプア・サフルの人たちと同じグループ。現在の中国人や日本人と全く顔つきが違う人たちであることがわかる。

スリランカのヴェツダ、メラネシアのニューブリテン、オーストラリアの先住民(Kow Swamp)、中国の鯉魚坡、7千年前のホアビン文化と同時期のマレーシアのGua Chaも同じ形態である。

「パプア・サフル系集団」

完新世初頭までの狩猟採集民は、アジアの基層をなす人々で、パプア・サフル系の集団。その特徴は、前後に長い脳頭蓋（長頭）、長方形に角張った眼窩、突出した眉間、陥凹した鼻根部、幅

広い鼻腔口（梨状孔）、やや突顎、低く幅広い顔面。今のアジアにいるいわゆるモンゴロイドと呼ばれていた人々とはまったく違う。

モンゴルの人と比べてみると、眼窩の高さがモンゴルの方は、おでこに近いところにある。また、顔が上下に長い。鼻腔口がパプア・サフル系に比べて狭い。脳頭蓋が丸く、球状に近い形態をしている。横から見ると顔が平らで、突出が少ない。

復顔したイメージは、パプア・ニューギニアに住む先住民の方とモンゴルの代表として元横綱朝青龍関を思い浮かべていただければ、ちょうどあてはまる。

パプア・ニューギニアタイプの人たちは、ここ3年くらいの私が調査した他の事例でも発見することができた。

<周口店上洞人>

古くから有名な北京原人の骨が見つかった周口店は、北京中心部から30キロほど離れた郊外にある、石灰岩の洞窟地帯。ここから北京原人だけではなく、2万年前の周口店上洞人3体分の人骨もみつまっている。これらの資料は戦中に北京原人の骨とともに散逸してしまったのだが、さいわいレプリカが残っており、計測をすることができた。ホアビニアンと同系、パプア・サフル系であることがわかった。

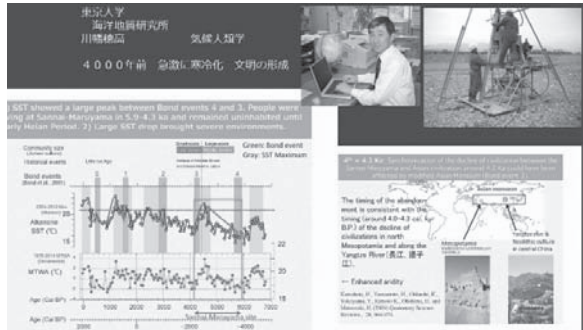
このことから東南アジアから中国北部の北京ぐらいまでの範囲に、パプア・サフル系のひとたちが広がっていたことが確認された。

このグループがおそらくアフリカを出発し、東に進み、アジアに到達した最初のホモ・サピエンスのグループであろうと考えられる。

<私の近年の研究結果>

これまでの人類の起源や日本人の起源にかかわる書籍には、1万年前から6千年前にかけてアジアの大部分には、原モンゴロイドや古モンゴロイド、あるいは南方モンゴロイドが居住していたという記載がしばしば見受けられたが、私が今日紹介した研究成果から、このような人々は存在せず、そこに住んでいたのはパプア・ニューギニア系統の人たちであったといえる。

では、このあと農耕民についてみていくことにする。ここまでのお話は、6千年前から5千年前くらいのもの。これからは4千年前からのお話になる。



気候人類学をご専門にされている東京大学海洋地質研究所川幡穂高先生の研究によると、4200年前に急激に寒冷化が起り、それをきっかけにメソポタミアや長江文明が形成された。

<Man Bac遺跡>

私たちが2005から2007年にトヨタ財団から研究費をいただき調査した新石器時代後半、ベトナム Ninh Binh省、3800年前のMan Bac遺跡。ハノイから150kmほど南に位置する。現状はとうきび畑だったのだが、地主に了承を得て、発掘調査をさせていただいた。



全体で100体くらいの人骨を検出した。これまでの埋葬方法とは違い、伸展葬。土器、家畜、イネも出土している。

Aは、稲作の起源地、河姆渡文化の地域。稲作は、8千年から7千年前に長江流域で行われ始めた。Dは、黄河の中流域。アワ、キビなどのミレットを利用した地域。これらの稲作や雑穀栽培の起源地から南に拡散していき、Gのベトナム地域に伝播したと考えられる。

出土した土器は、器面も薄く、繊細なもので、

S字型の波模様が施されている。この施文は、中国でも見られるもの。成人式に特定の歯を抜く、抜歯の風習や磨製石斧やブタ、ニワトリが見つかっている。

豊富な副葬品で伸展葬。イネを持っている人々。このように、生活道具と稲作農耕の技術がセットでこの地域に伝播してきたことがわかる。

おそらく Austroasian という言語集団。今のタイ語やベトナム語の祖語になっている言語を持つ集団だったと考えられる。

<Man Bac遺跡出土人骨のクラスター分析>

先ほどのクラスター分析に当てはめると、Man Bacの稲作民は、河姆渡文化の農耕集団と非常に近いところになり、現在の北東アジアの人たちとも隣り合っている。そこからも北東アジアの人々が南下してきたという仮説を支持している。鉄器時代から新石器時代のいろいろな遺跡が同じグループに位置する。中国の農耕民とも非常に近い関係にあることがわかる。

<河姆渡遺跡>

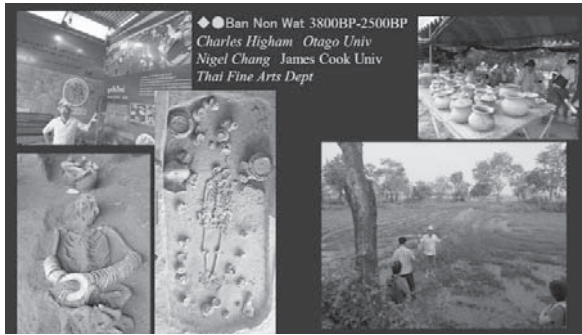
7千年から6千年前の河姆渡遺跡。東京ドームくらいの大きな覆屋の中で発掘調査を行っている。日本では中世の遺物ではないかと思われるほど多量のイネの炭化遺体が見つかっている。河姆渡遺跡から出土している人骨は、北東アジアの人たちの特徴を持っている。

ホアビン文化の先住民で、スダサフル系の特徴を示す。一方平坦な顔をもつ稲作農耕民。Man Bac遺跡からもごく少数、ホアビン文化の子孫である先住系の特徴を持つ人骨も見つかっている。

同じ遺跡からスダサフル系の先住民の特徴を持つ人骨が出てくると、北東アジア系の農耕民の特徴を持つ人骨が出てきたことで、このMan Bac遺跡が有名になった。

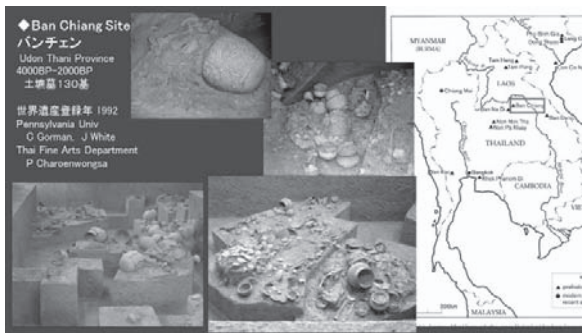
<Ban Non Wat遺跡>

3800年前から2500年前のタイのBan Non Wat遺跡。オタゴ大学のHigham先生が一生かけて調査されている遺跡。伸展葬で多量の副葬品。おびただしい数の腕輪をしている埋葬人骨。いかに豊かであるかがわかる。



<Ban Chiang遺跡>

1992年に世界遺産登録された4千年前から2千年前のBan Chiang遺跡。朱でカラーリングした彩色土器を製作したことで有名な遺跡。この土器も波模様が施されている。4000年前の青銅器が見つかった遺跡ということで、世界遺産に登録されましたが、青銅器に関してはもっと新しい2000年前ということがわかった。



これらの農耕民の遺跡は、90%北東アジア系の（いわゆるモンゴロイド系）人たちとなり、農耕を開始した3800年から3000年前、中国から東南アジアに移動していったことがわかる。それは、先住民の人たちとはあまり変わらず、自分たちの仲間たちによるコロニーを形成していたのではない。

日本の例も同じように、渡来系の弥生人の遺跡からは、縄文人の子孫譜の人骨はほとんど見つからない。

東南アジアの島々は、中国から台湾を超えて、フィリピンやインドネシアを通り、太平洋の島々まで海洋航海をしながら移動していったものと考えられる。中国南部の福建省から5000年前に出発し、台湾へ。台湾から3500年前には東南アジアへ。その後ポリネシア、ミクロネシアにも伝わっていったと考えられる。

この人たちはオーストロネシア言語集団で言語も共通している。そのほか農耕、家畜(ニワトリ、ブタ) 海洋民集団がセットになっている。



海洋地域に広がるには、アウトリガーと呼ばれる遠洋航海ができる船と船の技術が必要。

このような仮説は、Out of Taiwanモデルと呼ばれ『農耕起源の人類史』という著書でPeter Bellwoodが提唱している。

<Gua Harimau洞穴>

私が調査しているインドネシアスマトラ島の8千年前から2千年前のGua Harimau洞穴。インドネシアの代表は、Truman Simanhuntak先生。そのほか地元の国立の埋蔵文化財センターの人たちも調査に加わっていた。

ジャングルを2 kmほど分け入り、その奥に巨大な洞窟があった。古い時期に調査が行われた遺跡なので、階段なども整備されていた。2200年から1800年前の鉄器時代の伸展葬で埋葬された人骨が見つかった。

この層の下を2 mほど掘り進めていくと、8千年前から5千年前の屈葬の人骨が見つかった。ここでもスダサフル系と北東アジア系の二重構造がみられる。

2300年前から1800年前の青銅器鉄器時代の伸展葬で埋葬された人骨はなぜか多くが合葬されていた。青銅器や壁画も見ついている。虫歯が多い。農耕を行い栄養状態も良かったという証拠であろう。

壁際のところからは、さらに旧石器時代の人骨も見つかった。屈葬で葬られ、黒曜石やチャートを利用した石器が見ついている。

インドネシアの場合、中国やベトナムと違い火山地帯で黒曜石が豊富にある。そのため、黒曜石

の剥片石器も多く見つかった。ホアビン文化に特徴的な磨製石斧も見つかった。カナリウムが多量に炭化物層となり、見つかった。

クラスター分析では、5千年前の人骨は、パプア・サフル系の人たちの系統を示す。

青銅器や鉄器時代の人骨は、4500年前の福建省の農耕民と類似しており、また現代の東南アジア島嶼のグループとも一致することから、Out of Taiwanの人たちであることは確実である。

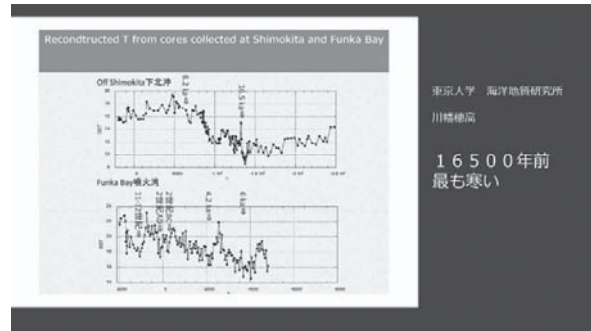


<北東アジア人はどこから来たのか？>

縄文人はどこから来たのか。ミステリーとはいえない。おそらくパプア・サフル系の遺伝子を多く持つ人たちだろうと予想できる。国立科学博物館の神沢・篠田先生、国立遺伝学研究所斎藤先生による核ゲノム解析では、縄文人は現代の東ユーラシアの日飛び地とは相当古くに分岐した系統だという。形態からの所見と一致していて興味深い。ただし日本には細石刃文化が入っているので、北東アジア人との混血が若干あったと考えられる。

いっぽうで謎の集団は、北東アジアの人たちである。彼らが寒冷地適応を受ける前はどのような姿だったのか。全くわかっていないうえ、どのようなルートで移動して来たのかもわからない。テルマエロマエという映画化もされた漫画では、平たい顔族が出てくるが、寒冷地適応（胴長短足で平坦顔）を受けた人たちが、なぜ温暖な日本列島にいるのか、考えてみると不思議な現象であろう。

先ほどの川幡先生によると1万6500年前が最終氷期の一番寒かった時期だという。ヒマラヤの北には、シベリアを横断して移動して来たマンモスハンターだった人たちの存在が想定される。このような人々こそが、その時期に寒冷地適応を受け



たのであろう。

彼らの子孫は、9000年前までには黄河近くまで南下した。細石器の拡散の南限からそのような予想をしている。東胡林という北京近くの1万年前の遺跡では、北東アジア人の典型的特徴を持つ人骨が見つかった。7千年前には賈湖、7千年前の河姆渡遺跡、6300年前の田螺山遺跡くらいまで南下している。7千年前の賈湖では雑穀栽培、7千年前の河姆渡遺跡、6300年前の田螺山遺跡で

は稲作栽培が行われている。

北東アジア人モンゴロイドは謎が深まるばかりである。南まわりのスンダ・サフル系の人たちと同じ人たちが北上して寒冷地適応を受けたのか。シベリア横断ルートの人たちが祖先なのか。

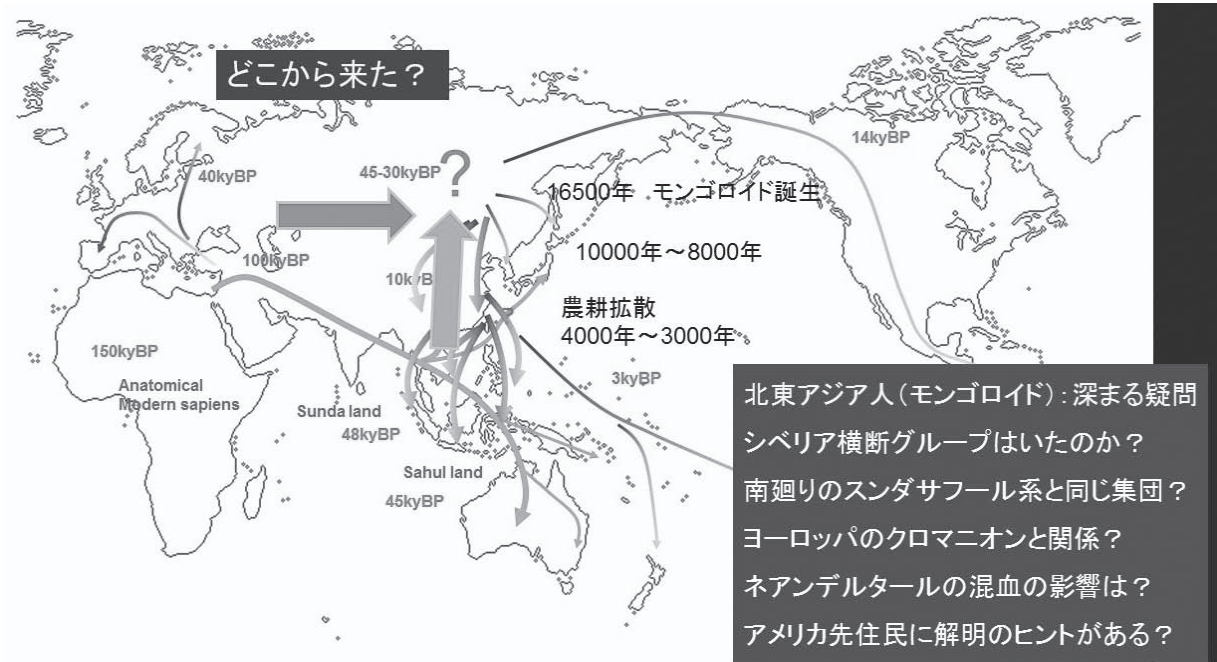


だとすると、ヨーロッパのクロマニオン人との関係はどうであったのか。ネアンデルタール人との関連は、アメリカ先住民に解決の糸口があるの

か。バイカル湖付近にある有名な旧石器時代の遺跡。マリタ遺跡から見つかった歯。24000年前の古さであるRaghavenらによって解析されたDNAはヨーロッパ人と一致らしい。アメリカ先住民ともやや共通するところがあるが、北東アジア人とは無関係のようである。

ヒマラヤ北部シベリア横断ルートにはネアンデルタール人の居住域と重なっている。ネアンデルタール人との混血も無視できない。

縄文人については似た先史人骨が中国や東南アジアから発見されているのに対し、北東アジアのシベリアでは化石人類が少ない上に、このようなさまざまな疑問が山積しており、北東アジア人の起源については、縄文人の起源よりも謎が多く、解明についてはまさにこれからの課題である。



北海道立埋蔵文化財センター年報19

平成29（2017）年度

平成30年4月24日発行

編集：公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1

Tel：(011)386-3231 Fax：(011)386-3238

E-mail：mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

Tel：(011)375-2116(代) Fax：(011)375-2115
